

草枕（夏目漱石）

一

山路を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣りにちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容で、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊といふ。

住みにくき世から、住みにくき煩いを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である、画である。あるは音楽と彫刻である。こまかに云えば写さないでもよい。ただまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さぬとも瑣鏘の音は胸裏に起る。丹青は画架に向って

塗抹せんでも五彩の絢爛は自から心眼に映る。ただおのが住む世を、かく観じ得て、靈台方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらかに収め得れば足る。この故に無声の詩人には一句なく、無色の画家には尺縑なきも、かく人世を観じ得るの点において、かく煩悩を解脱するの点において、かく清浄界に出入し得るの点において、またこの不同不二の乾坤を建立し得るの点において、我利私慾の羈絆を掃蕩するの点において、——千金の子よりも、万乗の君よりも、あらゆる俗界の寵児よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知った。二十五年にして明暗は表裏のごとく、日のあたる所にはきつと影がさすと悟った。三十の今日はこの思うている。——喜びの深きとき憂いよいよ深く、楽みの大いなるほど苦しみも大きい。これを切り放そうとすると身が持てぬ。片づけようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖えれば寝る間も心配だろう。恋はうれしい、嬉しい恋が積もれば、恋をせぬ昔がかえって恋しかろ。閣僚の肩は数百万人の足を支えている。背中には重い天下がおぶさっている。うまい物も食わねば惜しい。少し食えば飽き足らぬ。存分食えばあとが不愉快だ。……

余の考がここまで漂流して来た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏み損くなった。平衡を保つために、すわやと前に飛び出した左足が、仕損じの埋め合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺ほどな岩の上に卸りた。肩にかけた絵の具箱が腋の下から躍り出しただけで、幸いと何の事もなかった。

立ち上がる時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せたような峰が聳えている。杉か檜が分らないが根元から頂きまでことごとく蒼黒い中に、山桜が薄赤くだんだらに棚引いて、続き目が確と見えぬくらい靄が濃い。少し手前には山が一つ、群をぬきんで眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去ったか、鋭どき平面をやけに谷の底に埋めている。天辺に一本見えるのは赤松だろう。枝の間の空さえ判然としている。行く手は二丁ほどで切れているが、高い所から赤い毛布が動いて来るのを見ると、登ればあすこへ出るのだろう。路はすこぶる難義だ。

土をならすだけならさほど手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平らにしても石は平らにならぬ。石は切り碎いても、岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙って、吾らのために道を譲る景色はない。向うで聞かぬ上は乗り越すか、廻らなければならぬ。巖のない所でさえ歩るきよくはない。左右が高くなって、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿って、その頂点が真中を貫いていると評してもよい。路を行くと云わんより川底を渉ると云う方が適当だ。固より急ぐ旅でないから、ぶらぶらと七曲りへかかる。

たちまち足の下で雲雀の声がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。ただ声だけが明らかに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いている。方幾里の空気が一面に蚤に刺されていたたまれないような気がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の余裕もない。のどかな春の日を鳴き尽くし、鳴きあかし、また鳴き暮らさなければ気が済まんと見える。その上どこまでも登って行く、いつまでも登って行く。

雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入って、漂うているうちに形は消えてなくなつて、ただ声だけが空の裡に残るのかも知れない。

巖角を鋭どく廻って、按摩なら真逆様に落つところを、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思った。いいや、あの黄金の原から飛び上がってくるのかと思った。次には落ちる雲雀と、上る雲雀が十文字にすれ違うのかと思った。最後に、落ちる時も、上る時も、また十文字に擦れ違うときにも元氣よく鳴きつづけるだろうと思った。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さえ忘れて正体なくなる。ただ菜の花を遠く望んだときに眼が醒める。雲雀の声を聞いたときに魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全体が鳴くのだ。魂の活動が声にあらわれたもののうちで、あれほど元氣のあるものはない。ああ愉快だ。こう思つて、こう愉快になるのが詩である。

たちまちシェレーの雲雀の詩を思い出して、口のうちに覚えたとこただけ暗誦して見たが、覚えていたところは二三句しかなかった。その二三句のなかにこんながある。

We look before and after

And pine for what is not:

Our sincerest laughter

With some pain is fraught;

Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.

「前をみては、後えを見ては、物欲しと、あこがるるかなわれ。腹からの、笑といえど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るとぞ知れ」なるほどいくら詩人が幸福でも、あの雲雀のように思い切つて、一心不乱に、前後を忘却して、わが喜びを歌う訳には行かない。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく万斛の愁など云う字がある。詩人だから万斛で素人なら一合で済むかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神経が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜びもあろうが、無量の悲しも多かるう。そんならば詩人になるのも考え物だ。

しばらくは路が平で、右は雑木山、左は菜の花の見つけである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸のような葉が遠慮なく四方へのして真中に黄色な珠を擁護している。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと、振り向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎮座している。呑気なものだ。また考えをつづける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、ただうれしくて胸が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、桜も——桜はいつか見えなくなった。こう山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れて、旨いものが食べられぬくらいの事だろう。

しかし苦しみのないのはなぜだろう。ただこの景色を一幅の画として観、一卷の詩として読むからである。画であり詩

である以上は地面を貰つて、開拓する氣にもならねば、鉄道をかけて一儲けする了見も起らぬ。ただこの景色が——腹の足しにもならぬ、月給の補いにもならぬこの景色が景色としてのみ、余が心を楽ませつつあるから苦勞も心配も伴わぬのだろう。自然の力はここにおいて尊とい。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

恋はうつくしかろ、孝もうつくしかろ、忠君愛国も結構だろう。しかし自身がその局に当れば利害の旋風に捲き込まれて、うつくしき事にも、結構な事にも、目は眩んでしまふ。したがってどこに詩があるか自身には解しかねる。

これがわかるためには、わかるだけの余裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。三者の地位に立てばこそ芝居は観て面白い。小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小説を読んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げている。見たり読んだりする間だけは詩人である。

それすら、普通の芝居や小説では人情を免かれぬ。苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする。見るものもいつかその中に同化して苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする。取柄は利慾が交らぬと云う点に存するかも知れぬが、交らぬだけにその他の情緒は常よりは余計に活動するだろう。それが嫌だ。

苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたり人は人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽々した。飽き飽きした上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大変だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞するようなもので

はない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少からう。どこまでも世間を出る事が出来ぬのが彼らの特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるからいわゆる詩歌の純粋なるものもこの境を解脱する事を知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を弁じている。いくら詩的になつても地面の上を馳けてあるいて、銭の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。

うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊の東籬下、悠然見南山。ただそれぎりの裏に暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣りの娘が覗いてる訳でもなければ、南山に親友が奉職している次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持ちになれる。独坐幽篁裏、彈琴復長嘯、深林人不知、明月来相照。ただ二十字のうちに優に別乾坤を建立している。この乾坤の功德は「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない。汽船、汽車、権利、義務、道德、礼義で疲れ果てた後に、すべてを忘却してぐっすり寝込むような功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀にこの出世間的の詩味は大切である。惜しい事に今の詩を作る人も、詩を読む人もみんな、西洋人にかぶれているから、わざわざ吾気な扁舟を泛べてこの桃源に溯るものはないようだ。余は固より詩人を職業にしておらんから、王維や淵明の境界を今の世に布教して広げようと云う心掛も何もない。ただ自分にはこう

云う感興が演芸会よりも舞踏会よりも薬になるように思われる。ファウストよりも、ハムレットよりもありがたく考えられる。こうやって、ただ一人絵の具箱と三脚几を担いで春の山路をのそのそあるくのも全くこれがためである。淵明、王維の詩境を直接に自然から吸収して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願。一つの酔興だ。

もちろん人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はそう長く続く訳には行かぬ。淵明だつて年が年中南山を見詰めていたのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳を釣らずに寝た男でもなからう。やはり余つた菊は花屋へ売りこかして、生えた筍は八百屋へ払い下げたものと思う。こう云う余もその通り。いくら雲雀と菜の花が気に入つたつて、山のなかへ野宿するほど非人情が募つてはおらん。こんな所でも人間に逢う。じんじん端折りの頬冠りや、赤い腰巻の姉さんや、時には人間より顔の長い馬にまで逢う。百万本の檜に取り囲まれて、海面を抜く何百尺かの空気を呑んだり吐いたりしても、人の臭いはなかなか取れない。それどころか、山を越えて落ちつく先の、今宵の宿は那古井の温泉場だ。

ただ、物は見様でどうでもなる。レオナルド・ダ・ヴィンチが弟子に告げた言に、あの鐘の音を聞け、鐘は一つだが、音はどうとも聞かれるとある。一人の男、一人の女も見様次第でいかようと見立てがつく。どうせ非人情をしに出掛けた旅だから、そのつもりで人間を見たら、浮世小路の何軒目に狭苦しく暮した時とは違ふだろう。よし全く人情を離れる事が出来んでも、せめて御能拝見の時くらいは淡い心持ちにはなれそうなのだ。能にも人情はある。七騎落でも、墨田川

でも泣かぬとは保証が出来ん。しかしあれは情三分芸七分で見せるわざだ。我らが能から享けるありがた味は下界の人情をよくそのまゝに写す手際から出てくるのではない。そのまゝの上へ芸術という着物を何枚も着せて、世の中にあるまじき悠長な振舞をするからである。

しばらくこの旅中に起る出来事と、旅中に出逢う人間を能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだろう。まるで人情を棄てる訳には行くまいが、根が詩的に出来た旅だから、非人情のやりついでに、なるべく節儉してそこまでは漕ぎつきたいものだ。南山や幽篁とは性の違ったものに相違ないし、また雲雀や菜の花といっしょにする事も出来まいが、なるべくこれに近づけて、近づけ得る限りは同じ観察点から人間を視てみたい。芭蕉と云う男は枕元へ馬が尿するのをさえ雅な事と見立てて発句にした。余もこれから逢う人物を——百姓も、町人も、村役場の書記も、爺さんも婆さんも——ことごとく大自然の点景として描き出されたものと仮定して取こなして見よう。もっとも画中の人物と違って、彼らはおのがじし勝手な真似をするだろう。しかし普通の小説家のようにその勝手な真似の根本を探ぐって、心理作用に立ち入ったり、人事葛藤の詮議立てをしては俗になる。動いても構わない。画中の人間が動くと思えば差し支えない。画中の人物はどう動いても平面以外に出られるものではない。平面以外に飛び出して、立方的に働くと思えばこそ、こつちと衝突したり、利害の交渉が起ったりして面倒になる。面倒になればなるほど美的に見ている訳に行かなくなる。これから逢う人間には超然と遠き上から見物する気で、人情の電気がむやみに双方で

起らないようにする。そうすれば相手がいくら働いても、こちらの懐には容易に飛び込めない訳だから、つまりは画の前へ立って、画中の人物が画面の中をあちらこちらと騒ぎ廻るのを見るのと同じ訳になる。間三尺も隔てていれば落ちついて見られる。あぶな気なしに見られる。言を換えて云えば、利害に気を奪われないから、全力を挙げて彼らの動作を芸術の方面から観察する事が出来る。余念もなく美か美でないかと鑑識する事が出来る。

ここまで決心をした時、空があやしくなつて来た。煮え切れない雲が、頭の上へ靠垂れ懸つていたと思つたが、いつのまにか、崩れ出して、四方はただ雲の海かと怪しまれる中から、しとしとと春の雨が降り出した。菜の花は疾く通り過して、今は山と山の間を行くのだが、雨の糸が濃かでほとんど霧を欺くくらいだから、隔たりはどれほどかわからぬ。時々風が来て、高い雲を吹き払うとき、薄黒い山の背が右手に見える事がある。何でも谷一つ隔てて向うが脈の走っている所らしい。左はすぐ山の裾と見える。深く罩める雨の奥から松らしいものが、ちよくちよく顔を出す。出すかと思うと、隠れる。雨が動くのか、木が動くのか、夢が動くのか、何となく不思議な心持ちだ。

路は存外広くなって、かつ平だから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂れがぽたりぽたりと落つる頃、五六間先きから、鈴の音がして、黒い中から、馬子がふうとあらわれた。

「ここに休む所はないかね」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ。だいぶ濡れたね」

まだ十五丁かと、振り向いているうちに、馬子の姿は影画のように雨につつまれて、またふうと消えた。

糠のように見えた粒は次第に太く長くなって、今は一筋ごとに風に捲かれる様までが目に入る。羽織はとくに濡れ尽して肌着に浸み込んだ水が、身体の温度で生暖く感ぜられる。気持がわるいから、帽を傾けて、すたすた歩行く。

茫々たる薄墨色の世界を、幾条の銀筋が斜めに走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思えば、詩にもなる、句にも咏まれる。有体なる己れを忘れ尽して純客観に眼をつくる時、始めてわれは画中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。ただ降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを氣に掛ける瞬間に、われはすでに詩中の人にあらざる、画裡の人にもあらざる。依然として市井の一豎子に過ぎぬ。雲煙飛動の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情けも心に浮ばぬ。蕭々として独り春山を行く吾の、いかに美しきかはなおさらに解せぬ。初めは帽を傾けて歩行た。後にはただ足の甲のみを見詰めてあるいた。終りには肩をすぼめて、恐る恐る歩行た。雨は満目の樹梢を揺かして四方より孤客に逼る。非人情がちと強過ぎたようだ。

二

「おい」と声を掛けたが返事がない。

軒下から奥を覗くと煤けた障子が立て切つてある。向う側は見えない。五六足の草鞋が淋しそうに庇から吊されて、屈託氣にふらりふらりと揺れる。下に駄菓子箱が三つばかり並んで、そばに五厘銭と文久銭が散らばっている。

「おい」とまた声をかける。土間の隅に片寄せてある白の上に、ふくれていた鶏が、驚ろいて眼をさます。ククク、クククと騒ぎ出す。敷居の外に土竈が、今しがたの雨に濡れて、半分ほど色が変わつてゐる上に、真黒な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜かわからない。幸い下は焚きつけてある。

返事がないから、無断ですつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。鶏は羽搏きをして臼から飛び下りる。今度は畳の上へあがつた。障子がしめてなければ奥まで馳けぬける気かも知れない。雄が太い声でこけっここと云うと、雌が細い声でけけっここと云う。まるで余を狐か狗のように考えているらしい。床几の上には一升枴ほどの煙草盆が閑静に控えて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るの知らぬ顔で、すこぶる悠長に燻っている。雨はしだいに収まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさりと開く。なから一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだろうとは思っていた。竈に火は燃えてい

る。菓子箱の上に銭が散らばっている。線香は呑気に燻っている。どうせ出るにはきまっている。しかし自分の見世を明け放しても苦にならないと見えるところが、少し都とは違っている。返事がないのに床几に腰をかけて、いつまでも待っているのも少し二十世紀とは受け取れない。ここらが非人情で面白い。その上出て来た婆さんの顔が気に入った。

二三年前宝生の舞台で高砂を見た事がある。その時これはうつくしい活人画だと思った。箒を担いだ爺さんが橋懸りを五六歩来て、そりりと後向になって、婆さんと向い合う。その向い合うた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔がほとんど真むきに見えたから、ああうつくしいと思った時に、その表情はぴしやりと心のカメラへ焼き付いてしまった。茶店の婆さんの顔はこの写真に血を通わしたほど似ている。

「御婆さん、ここをちよつと借りたよ」

「はい、これは、いっこう存じませんで」

「だいぶ降ったね」

「あいにくな御天気で、さぞ御困りで御座んしよ。おとおおだいぶお濡れなされた。今火を焚いて乾かして上げましょ」

「そこをもう少し燃しつけてくれれば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなった」

「へえ、ただいま焚いて上げます。まあ御茶を一つ」と立ち上がりながら、しっしつと二声で鶏を追いつける。

こここと馳け出した夫婦は、焦茶色の畳から、駄菓子箱の中を踏みつけて、往来へ飛び出す。雄の方が逃げるとき駄菓子の上へ糞を垂れた。

「まあ一つ」と婆さんはいつの間にか剝り抜き盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦がれている底に、一筆がきの梅の花が三輪無雑作に焼き付けられている。

「御菓子を」と今度は鶏の踏みつけた胡麻ねじと微塵棒を持つてくる。糞はどこぞに着いておらぬかと眺めて見たが、それは箱のなかに取り残されていた。

婆さんは袖無しの上から、襷をかけて、竈の前へうずくまる。余は懷から写生帖を取り出して、婆さんの横顔を写しながら、話をしかける。

「閑静でいいね」

「へえ、御覧の通りの山里で」

「鶯は鳴くかね」

「ええ毎日のように鳴きます。此辺は夏も鳴きます」

「聞きたいな。ちつとも聞えないとなお聞きたい」

「あいにく今日は——先刻の雨でどこぞへ逃げました」

折りから、竈のうちが、ぱちぱちと鳴って、赤い火が颯と風を起して一尺あまり吹き出す。

「さあ、御あたり。さぞ御寒かろ」と云う。軒端を見ると青い煙りが、突き当って崩れながらに、微かな痕をまだ板底にからんでいる。

「ああ、好い心持ちだ、御蔭で生き返った」

「いい具合に雨も晴れました。そら天狗巖が見え出しました」
逡巡として曇り勝ちなる春の空を、もどかしとばかりに吹き払う山嵐の、思い切りよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴れ尽して、老嫗の指さす方に巉岼と、あら削りの柱のごとく聳えるのが天狗岩だそうだ。

余はまず天狗巖を眺めて、次に婆さんを眺めて、三度目には半々に両方を見比べた。画家として余が頭のなかに存在する婆さんの顔は高砂の姫と、蘆雪のかいた山姥のみである。

蘆雪の図を見たとき、理想の婆さんは物凄いいものだと感じた。

紅葉のなかか、寒い月の下に置くべきものと考えた。宝生の別会能を観るに及んで、なるほど老女にもこんな優しい表情があり得るものと驚ろいた。あの面は定めて名人の刻んだものだろう。惜しい事に作者の名は聞き落したが、老人もこうあらわせば、豊かに、穏やかに、あたたかに見える。金屏にも、春風にも、あるは桜にもあしらって差し支ない道具である。余は天狗岩よりは、腰をのして、手を翳して、遠く向うを指している、袖無し姿の婆さんを、春の山路の景物として恰好なものだと考えた。余が写生帖を取り上げて、今しばらくという途端に、婆さんの姿勢は崩れた。

手持無沙汰に写生帖を、火にあてて乾かしながら、

「御婆さん、丈夫そうだね」と訊ねた。

「はい。ありがたい事に達者で——針も持ちます、芋もうみます、御団子の粉も磨きます」

この御婆さんに石臼を挽かして見たくなった。しかしそんな注文も出来ぬから、

「ここから那古井までは一里足らずだったね」と別な事を聞いて見る。

「はい、二十八丁と申します。旦那は湯治に御越しで……」

「込み合わなければ、少し逗留しようかと思うが、まあ気が向けばさ」

「いえ、戦争が始まりましたから、頓と参るものは御座いま

せん。まるで締め切り同様で御座います」

「妙な事だね。それじゃ泊めてくれないかも知れんね」

「いえ、御頼みになればいつでも宿めます」

「宿屋はたった一軒だったね」

「へえ、志保田さんと御聞きになればすぐわかります。村のものもちで、湯治場だか、隠居所だかわかりません」

「じゃ御客がなくても平気な訳だ」

「旦那は始めてで」

「いや、久しい以前ちよつと行つた事がある」

会話はちよつと途切れる。帳面をあけて先刻の鶏を静かに写生していると、落ちついた耳の底へじやらんじやらんと云う馬の鈴が聴え出した。この声がおのずと、拍子をとって頭の中に一種の調子が出る。眠りながら、夢に隣りの白の音に誘われるような心持ちである。余は鶏の写生をやめて、同じページの端に、

春風や惟然が耳に馬の鈴

と書いて見た。山を登ってから、馬には五六匹逢った。逢った五六匹は皆腹掛をかけて、鈴を鳴らしている。今の世の馬とは思われない。

やがて長閑な馬子唄が、春に更けた空山一路の夢を破る。憐れの底に気楽な響がこもって、どう考えても画にかいた声だ。

馬子唄の鈴鹿越ゆるや春の雨

と、今度は斜に書きつけたが、書いて見て、これは自分の句でない気がついた。

「また誰ぞ来ました」と婆さんが半ば独り言のように云う。

ただ一条の春の路だから、行くも帰るも皆近づきと見える。最前逢うた五六匹のじゃらんじゃらんもことごとくこの婆さんの腹の中でまた誰ぞ来たと思われては山を下り、思われては山を登ったのだろう。路寂寥と古今の春を貫いて、花を厭えば足を着くるに地なき小村に、婆さんは幾年の昔からじゃらん、じゃらんを数え尽くして、今日の白頭に至ったのだらう。

馬子唄や白髪も染めで暮るる春

と次のページへ認めたが、これでは自分の感じを云い終せない、もう少し工夫のありそうなものと、鉛筆の先を見詰めながら考えた。何でも白髪という字を入れて、幾代の節と云う句を入れて、馬子唄という題も入れて、春の季も加えて、それを十七字に纏めたいと工夫しているうちに、

「はい、今日は」と実物の馬子が店先に留って大きな声をかける。

「おや源さんか。また城下へ行くかい」

「何か買物があるなら頼まれて上げよ」

「そうさ、鍛冶町を通ったら、娘に靈巖寺の御札を一枚もらってきておくれなさい」

「はい、貰ってきよ。一枚か。——御秋さんは善い所へ片づいて仕合せだ。な、御叔母さん」

「ありがたい事に今日には困りません。まあ仕合せと云うのだるか」

「仕合せとも、御前。あ的那古井の嬢さまと比べて御覧」

「本当に御気の毒な。あんな器量を持って。近頃はちつとは具合がいいかい」

「なあに、相変らずさ」

「困るなあ」と婆さんが大きな息をつく。
「困るよう」と源さんが馬の鼻を撫でる。

枝繁き山桜の葉も花も、深い空から落ちたまなる雨の塊まりを、しっぽりと宿していたが、この時わたる風に足をすくわれて、いたたまれずに、仮りの住居を、さらさらと転げ落ちる。馬は驚ろいて、長い鬣を上下に振る。

「コーラッ」と叱りつける源さんの声が、じゃらん、じゃらんと共に余の冥想を破る。

御婆さんが云う。「源さん、わたしや、お嫁入りのときの姿が、まだ眼前に散らついている。裾模様の振袖に、高島田で、馬に乗って……」

「そうさ、船ではなかった。馬であつた。やはりここで休んで行つたな、御叔母さん」

「あい、その桜の下で嬢様の馬がとまったとき、桜の花がほろほろと落ちて、せつかくの島田に斑が出来ました」

余はまた写生帖をあける。この景色は画にもなる、詩にもなる。心のうちに花嫁の姿を浮べて、当時の様を想像して見たり顔に、

花の頃を越えてかしこし馬に嫁

と書きつける。不思議な事には衣装も髪も馬も桜もはつきりと目に映じたが、花嫁の顔だけは、どうしても思いつけなかった。しばらくあの顔か、この顔か、と思索しているうちに、ミレーのかいた、オフエリヤの面影が忽然と出て来て、高島田の下へすぽりとはまった。これは駄目だと、せつかくの図面を早速取り崩す。衣装も髪も馬も桜も一瞬間に心の道具立

から奇麗に立ち退いたが、オフエリヤの合掌して水の上を流れて行く姿だけは、朦朧と胸の底に残って、棕櫚箒で煙を払うように、さっぱりしなかった。空に尾を曳く彗星の何となく妙な気になる。

「それじゃ、まあ御免」と源さんが挨拶する。

「帰りにまた御寄り。あいにくの降りで七曲りは難義だろ」

「はい、少し骨が折れよ」と源さんは歩行出す。源さんの馬も歩行出す。じゃらんじゃらん。

「あれは那古井の男かい」

「はい、那古井の源兵衛で御座んす」

「あの男がどそぞの嫁さんを馬へ乗せて、峠を越したのかい」

「志保田の嬢様が城下へ御輿入のときに、嬢様を青馬に乗せて、源兵衛が羈絆を牽いて通りました。——月日の立つのは早いもので、もう今年で五年になります」

鏡に對うときのみ、わが頭の白きを啣つものは幸の部に属する人である。指を折って始めて、五年の流光に、転輪の疾き趣を解し得たる婆さんは、人間としてはむしろ仙に近づける方だろう。余はこう答えた。

「さぞ美しくかったろう。見にくればよかった」

「ハハハ今でも御覧になれます。湯治場へ御越しなされば、きつと出て御挨拶をなされましょう」

「はあ、今では里にいいのかい。やはり裾模様様の振袖を着て、高島田に結っていればいいが」

「たのんで御覧なされ。着て見せましょ」

余はまさかと思つたが、婆さんの様子は存外真面目である。非人情の旅にはこんなのが出なくては面白くない。婆さんが

云う。

「嬢様と長良の乙女とはよく似ております」

「顔がかい」

「いいえ。身の成り行きがで御座んす」

「へえ、その長良の乙女と云うのは何者かい」

「昔しこの村に長良の乙女と云う、美しい長者の娘が御座りましたそうな」

「へえ」

「ところがその娘に二人の男が一度に懸想して、あなた」

「なるほど」

「ささだ男に靡こうか、ささべ男に靡こうかと、娘はあけくれ思い煩つたが、どちらへも靡きかねて、とうとう

あきづけばをばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも

と云う歌を咏んで、淵川へ身を投げて果てました」

余はこんな山里へ来て、こんな婆さんから、こんな古雅な言葉で、こんな古雅な話をきこうとは思いがけなかった。

「これから五丁東へ下ると、道端に五輪塔が御座んす。ついでに長良の乙女の墓を見て御行きなされ」

余は心のうちには是非見て行こうと決心した。婆さんは、そのあとを語りつづける。

「那古井の嬢様にも二人の男が祟りました。一人は嬢様が京都へ修行に出て御出での頃御逢いなさったので、一人はこの城下で随一の物持ちで御座んす」

「はあ、御嬢さんはどっちへ靡いたかい」

「御自身は是非京都の方へと御望みなさったのを、そこには

色々な理由もありましたろが、親ご様が無理にこちらへ取りきめて……」

「めでたく、淵川へ身を投げんでも済んだ訳だね」

「ところが——先方でも器量望みで御貰いなさったのだから、随分大事にはなさったかも知れませぬが、もともと強いられ御出なさったのだから、どうも折合がわるくて、御親類でもだいぶ御心配の様子で御座んした。ところへ今度の戦争で、旦那様の勤めて御出の銀行がつぶれました。それから嬢様はまた那古井の方へ御帰りになります。世間では嬢様の事を不人情だとか、薄情だとか色々申します。もとは極々内気の優しいかたが、この頃ではだいぶ気が荒くなって、何だか心配だと源兵衛が来るたびに申します。……」

これからさきを聞くと、せっかくの趣向が壊れる。ようやく仙人になりかけたところを、誰か来て羽衣を帰せ帰せと催促するような気がする。七曲りの陰を冒して、やつとの思で、ここまで来たものを、そうむやみに俗界に引きずり下されては、飄然と家を出た甲斐がない。世間話もある程度以上に立ち入ると、浮世の臭いが毛孔から染込んで、垢で身体が重くなる。

「御婆さん、那古井へは一筋道だね」と十銭銀貨を一枚床几の上へかちりと投げ出して立ち上がる。

「長良の五輪塔から右へ御下りなさると、六丁ほどの近道になります。路はわるいが、御若い方にはその方がよろしかろ。」

——これは多分に御茶代を——気をつけて御越しなされ」

三

昨夕は妙な気持ちでした。

宿へ着いたのは夜の八時頃であつたから、家の具合庭の作り方は無論、東西の区別さえわからなかつた。何だか廻廊のような所をしきりに引き廻されて、しまいに六畳ほどの小さな座敷へ入れられた。昔し来た時とはまるで見当が違ふ。晩餐を済まして、湯に入つて、室へ歸つて茶を飲んでいると、小女が来て床を延べよかと云う。

不思議に思つたのは、宿へ着いた時の取次も、晩食の給仕も、湯壺への案内も、床を敷く面倒も、ことごとくこの小女一人で弁じている。それで口は滅多にきかぬ。と云うて、田舎染みてもおらぬ。赤い帯を色気なく結んで、古風な紙燭をつけて、廊下のような、梯子段のような所をぐるぐる廻わされた時、同じ帯の同じ紙燭で、同じ廊下とも階段ともつかぬ所を、何度も降りて、湯壺へ連れて行かれた時は、すでに自分ながら、カンヴァスの中を往来しているような気がした。

給仕の時には、近頃は客がないので、ほかの座敷は掃除がしてないから、普段使っている部屋で我慢してくれと云つた。床を延べる時にはゆるりと御休みと人間らしい、言葉を述べて、出て行つたが、その足音が、例の曲りくねつた廊下を、次第に下の方へ遠かつた時に、あとがひっそりとして、人の気がしないのが氣になった。

生れてから、こんな経験はただ一度しかない。昔し房州を館山から向うへ突き抜けて、上総から銚子まで浜伝いに歩いた事がある。その時ある晩、ある所へ宿た。ある所と云うよりほかに言いようがない。今では土地の名も宿の名も、まるで忘れてしまった。第一宿屋へとまったのが問題である。棟の高い大きな家に女がたった二人いた。余がとめるかと聞いたとき、年を取った方がはいと云って、若い方がこちらへと案内をするから、ついて行くと、荒れ果てた、広い間をいくつも通り越して一番奥の、中二階へ案内をした。三段登って廊下から部屋へ這入ろうとすると、板庇の下に傾きかけていた一叢の修竹が、そよりと夕風を受けて、余の肩から頭を撫でたので、すでにひやりとした。椽板はすでに朽ちかかっている。来年は筍が椽を突き抜いて座敷のなかは竹だらけになろうと云ったら、若い女が何にも云わずににやにやと笑って、出て行った。

その晩は例の竹が、枕元で婆娑ついて、寝られない。障子をあげたら、庭は一面の草原で、夏の夜の月明かなるに、眼を走しらせると、垣も塀もあらばこそ、ともに大きな草山に続いている。草山の向うはすぐ大海原でどんどんと大きな濤が人の世を威嚇しに来る。余はとうとう夜の明けるまで一睡もせずに、怪し気な蚊帳のうちに辛防しながら、まるで草双紙にでもありそうな事だと考えた。

その後旅もいろいろしたが、こんな気持ちになった事は、今夜この那古井へ宿るまではかつて無かった。

仰向に寝ながら、偶然目を開けて見ると欄間に、朱塗りの縁をとった額がかかっている。文字は寝ながらも竹影払階

塵不動と明らかに読まれる。大徹という落款もたしかに見える。余は書においては皆無鑑識のない男だが、平生から、黄檗の高泉和尚の筆致を愛している。隠元も即非も木庵もそれぞれに面白味はあるが、高泉の字が一番蒼勁でしかも雅馴である。今この七字を見ると、筆のあたりから手の運び具合、どうしても高泉としか思われない。しかし現に大徹とあるからには別人だろう。ことによると黄檗に大徹という坊主がいたかも知れぬ。それにしては紙の色が非常に新しい。どうしても昨今のものとしか受け取れない。

横を向く。床にかかっている若冲の鶴の図が目につく。これは商売柄だけに、部屋に這入った時、すでに逸品と認めた。若冲の図は大抵精緻な彩色ものが多いが、この鶴は世間に気兼ねなしの一筆がきで、一本足ですらりと立った上に、卵形の胴がふわっと乗かっている様子は、はなはだ吾意を得て、飘逸の趣は、長い嘴のさきまで籠っている。床の隣りは違い棚を略して、普通の戸棚につづく。戸棚の中には何があるか分らない。

すやすやと寝入る。夢に。

長良の乙女が振袖を着て、青馬に乗って、峠を越すと、いきなり、ささだ男と、ささべ男が飛び出して両方から引張る。女が急にオフェリヤになって、柳の枝へ上って、河の中を流れながら、うつくしい声で歌をうたう。救ってやろうと思って、長い竿を持って、向島を追懸けて行く。女は苦しい様子もなく、笑いながら、うたいながら、行末も知らず流れを下る。余は竿をかついで、おおいおおいと呼ぶ。

そこで眼が醒めた。腋の下から汗が出ている。妙に雅俗混淆

な夢を見たものだと思った。昔し宋の大慧禪師と云う人は、悟道の後、何事も意のごとくに出来ん事はないが、ただ夢の中では俗念が出て困ると、長い間これを苦にされたそうだが、なるほどもっともだ。文芸を性命にするものは今少しうつくしい夢を見なければ幅が利かない。こんな夢では大部分画にも詩にもならないながら、寝返りを打つと、いつの間にか障子に月がさして、木の枝が二三本斜めに影をひたしている。冴えるほどの春の夜だ。

気のせいかな、誰か小声で歌をうたつてゐるような気がする。

夢のなかの歌が、この世へ抜け出したのか、あるいはこの世の声が遠き夢の国へ、うつつながらに紛れ込んだのかと耳を時てる。たしかに誰かうたっている。細くかつ低い声には相違ないが、眠らんとする春の夜に一縷の脈をかすかに搏たせつつある。不思議な事に、その調子とはにかく、文句をきくと——枕元でやっているのでないから、文句のわかりようはない。——その聞えぬはずのものが、よく聞える。あきづけば、をばなが上に、おく露の、けぬべくもわは、おもほゆるかもと長良の乙女の歌を、繰り返し繰り返すように思われる。

初めのうちは椽に近く聞えた声が、しだいしだいに細く遠退いて行く。突然とやむものには、突然の感はあるが、憐れはうすい。ふつつりと思ひ切つたる声をきく人の心には、やはりふつつりと思ひ切つたる感じが起る。これと云う句切りもなく自然に細りて、いつの間にか消えるべき現象には、われもまた秒を縮め、分を割いて、心細さの細さが細る。死なんとしては、死なんとする病夫のごとく、消えんとしては、消えんとする灯火のごとく、今やむか、やむかとのみ心を乱す

この歌の奥には、天下の春の恨みをことごとく萃めたる調べがある。

今までは床の中に我慢して聞いていたが、聞く声の遠ざかるに連れて、わが耳は、釣り出さるると知りつつも、その声を追いかけたくなる。細くなればなるほど、耳だけになつても、あとを慕って飛んで行きたい気がする。もうどう焦慮でも鼓膜に応えはあるまいと思ふ一刹那の前、余はたまらなくなつて、われ知らず布団をすり抜けると共にさらりと障子を開けた。途端に自分の膝から下が斜めに月の光りを浴びる。寝巻の上にも木の影が揺れながら落ちた。

障子をあけた時にはそんな事には気がつかなかった。あの声はと、耳の走る見当を見破ると——向うにいた。花ならば海棠かと思はれる幹を背に、よそよそしくも月の光りを忍んで朦朧たる影法師がいた。あれかと思ふ意識さえ、確とは心にうつらぬ間に、黒いものは花の影を踏み碎いて右へ切れた。わがいる部屋つづきの棟の角が、すらりと動く、背の高い女姿を、すぐに遮ってしまふ。

借着の浴衣一枚で、障子へつらまつたまま、しばらく茫然としていたが、やがて我に帰ると、山里の春はなかなか寒いものと悟つた。ともかくもと抜け出でた布団の穴に、再び帰参して考え出した。括り枕のしたから、袂時計を出して見ると、一時十分過ぎである。再び枕の下へ押し込んで考え出した。よもや化物ではあるまい。化物でなければ人間で、人間とすれば女だ。あるいは此家の御嬢さんかも知れない。しかし出帰りの御嬢さんとしては夜なかに山つづきの庭へ出るのがちと不穩当だ。何にしてもなかなか寝られない。枕の下にある時

計までがちくちく口をきく。今まで懷中時計の音の氣になつた事はないが、今夜に限って、さあ考えろ、さあ考えろと催促することく、寝るな寝るなと忠告することく口をきく。怪しからん。

怖いものもただ怖いものそのままの姿と見れば詩になる。凄（す）い事も、己（おの）れを離れて、ただ単独に凄（す）いのだと思えば画（え）になる。失恋が芸術の題目となるのも全くその通りである。失恋の苦しみを忘れて、そのやさしいところやら、同情の宿（やど）るところやら、憂（うれ）いのもるところやら、一步進めて云えば失恋の苦しみそのものの溢（あふ）るところやらを、單に客觀的に眼（がん）前に思い浮べるから文学美術の材料になる。世には有りもせぬ失恋を製造（みず）して、自（みづ）から強（し）いて煩悶（はんもん）して、愉快を貪（むさ）ぼるものがある。常人（じょうにん）はこれを評（ひら）して愚（ぐ）だと云う、氣違（きちが）だと云う。しかし自（みづ）から不幸の輪廓（りんがく）を描（えが）いて好（この）んでその中（うち）に起臥（きが）するのは、自（みづ）から烏有（ういう）の山水（さんすい）を刻（こ）画（が）して壺（こ）中（ちゅう）の天地（てんち）に歡喜（くわんぎ）すると、その芸術的（げいゆてき）の立脚地（りつきゃくち）を得たる点（てん）において全く等（とう）しいと云わねばならぬ。この点（てん）において世上幾多（いくた）の芸術家（げいゆつか）は（日常（にちじょう）の人（ひと）としてはいざ知らず）芸術家（げいゆつか）として常人（じょうにん）よりも愚（ぐ）である、氣違（きちが）である。われわれは草鞋（わらじ）旅行（りょぎん）をする間（あいだ）、朝（あ）から晩（ばん）まで苦（くる）しい、苦しいと不平（ふへい）を鳴（な）らしつづけているが、人（ひと）に向（む）つて曾遊（そうゆう）を説（と）く時分（ときぶん）には、不平（ふへい）らしい様（よう）子は少しも見（み）せぬ。面白（おもしろ）かつた事（こと）、愉快（うきげき）であつた事は無論（もちろん）、昔（むかし）の不（ふ）平（へい）をさ（み）え得意（とくい）に喋（ちや）々（々）として、したり顔（が）である。これはあえて自（みづ）ら欺（あざむ）く、人（ひと）を偽（いつ）わるのと云（い）う了見（りょうけん）ではない。旅行（りょぎん）をする間（あいだ）は常人（じょうにん）の心持（こもち）で、曾遊（そうゆう）を語（かた）るときはすでに詩人（しじん）の態度（たいど）にあるから、こんな矛盾（むじう）が起（お）る。して見（み）ると四角（しやうかく）な世界（せかい）から常識（じょうしき）と名（な）のつく、一角（いっかく）を磨滅（まめつ）

して、三角（さんかく）のうちに住（す）むのを芸術家（げいゆつか）と呼（よ）んでもよからう。この故（ゆゑ）に天然（てんねん）にあれ、人事（じんじ）にあれ、衆俗（しゅうぞく）の辟易（へきえき）して近づ（か）がたしとなすところにおいて、芸術家（げいゆつか）は無数（むすう）の琳琅（りんろう）を見（み）、無上（むじやう）の宝璐（ほうろ）を知る。俗（ぞく）にこれ（こ）を名（な）づけて美（び）化（か）と云（い）う。その実は美（び）化（か）でも何（なん）でもない。燦爛（さんらん）たる彩光（さいかう）は、炳（へい）乎（こ）として昔（むかし）から現象（げんさう）世界（せかい）に実（じつ）在（ざい）している。ただ一翳（いちえい）眼（がん）に在（あ）つて空花（くわ）乱墜（らんざい）するが故（ゆゑ）に、俗累（ぞくゑい）の羈絆（きはん）牢（ろう）として絶（た）ちがたきが故（ゆゑ）に、栄辱（えいじよく）得喪（とくさう）のわれに逼（せま）る事（こと）、念々（ねんぜん）切（き）なるが故（ゆゑ）に、ターナーが汽車（きしや）を写（うつ）すまでは汽車（きしや）の美（び）を解（と）せず、応挙（おうきよ）が幽霊（ゆうれい）を描（えが）くまでは幽霊（ゆうれい）の美（び）を知らず（し）に打ち過（す）ぎるのである。

余（あ）が今（いま）見た影法師（えいほうし）も、ただそれきりの現象（げんさう）とすれば、誰（だ）れが見（み）ても、誰（だ）れに聞（き）かしても饒（た）かに詩趣（しそ）を帯（た）びてゐる。——孤村（こそん）の温泉（おんせん）、——春（しゅん）宵（しやう）の花影（かえい）、——月前（げつぜん）の低誦（ていしやう）、——臙夜（おほうよ）の姿（すがた）——どれもこれも芸術家（げいゆつか）の好題目（こうだいまく）である。この好題目（こうだいまく）が眼前（がんぜん）にありながら、余（あ）は入（い）らざる詮義（せんぎ）立て（た）てをして、余計（よけい）な探（さ）ぐりを投げ込（こ）んでゐる。せつかくの雅境（みやうけい）に理窟（りくつ）の筋（すぢ）が立（た）つて、願（ねが）つてもない風流（ふうりゅう）を、氣味（きゐ）の悪（わる）さ（さ）が踏（ふ）みつけにしまつた。こんな事（こと）なら、非人情（ひにんじやう）も標榜（ひょうぼう）する価値（かち）がない。もう少し修行（しゆぎやう）をしなければ詩人（しじん）とも画家（が）とも人（ひと）に向（む）つて吹聴（ふいしやう）する資格（しきかく）はつかぬ。昔（むかし）以太利亞（イタリヤ）の画家（が）サルヴァトル・ロザ（サルヴァトル・ロザ）は泥棒（どろぼう）が研究（けんきう）して見（み）たい一心（いっしん）から、おのれの危険（きけん）を賭（か）けにして、山賊（さんぞく）の群（むれ）に這（は）入り込（こ）んだと聞（き）いた事（こと）がある。飄然（ひょうぜん）と画帖（がてふ）を懷（ふところ）にして家（い）を出（で）たからには、余（あ）にもそのくらの覺悟（かくご）がなくては恥（は）ずかしい事（こと）だ。

こんな時（とき）にどうすれば詩的（してき）な立脚地（りつきゃくち）に歸（かへ）れるかと云（い）えば、おのれの感（かん）じ、そのもの（もの）を、おの（おの）が前（まへ）に据（す）えつけて、その感（かん）

じから一步退いて有体に落ちついて、他人らしくこれを検査する余地さえ作ればいいのである。詩人とは自分の屍骸を、自分で解剖して、その病状を天下に発表する義務を有している。その方便は色々あるが一番手近なのは何でも蚊でも手当り次第十七字にまとめて見るのが一番いい。十七字は詩形としてもっとも軽便であるから、顔を洗う時にも、厠に上った時にも、電車に乗った時にも、容易に出来る。十七字が容易に出来ると云う意味は安直に詩人になれると云う意味であつて、詩人になると云うのは一種の悟りであるから軽便だと思つて侮蔑する必要はない。軽便であればあるほど功德になるからかえつて尊重すべきものと思う。まあちよつと腹が立つと仮定する。腹が立つたところをすぐ十七字にする。十七字にするときは自分の腹立ちがすでに他人に變じている。腹を立ったり、俳句を作ったり、そう一人が同時に働けるものではない。ちよつと涙をこぼす。この涙を十七字にする。するや否やうれしくなる。涙を十七字に纏めた時には、苦しみの涙は自分から遊離して、おれは泣く事の出来る男だと云う嬉しさだけの自分になる。

これが平生から余の主張である。今夜も一つこの主張を実行して見ようと、夜具の中で例の事件を色々句に仕立てる。出来たら書きつけないと散漫になつていかぬと、念入りの修業だから、例の写生帖をあげて枕元へ置く。

「海棠の露をふるふや物狂ひ」と真先に書き付けて読んで見ると、別に面白くもないが、さりとて気味のわるい事もない。次に「花の影、女の影の朧かな」とやったが、これは季が重なっている。しかし何でも構わない、気が落ちついて呑気に

なればいい。それから「正一位、女に化けて朧月」と作ったが、狂句めいて、自分ながらおかしくなった。この調子なら大丈夫と乗氣になつて出るだけの句をみななき付ける。

春の星を落して夜半のかざしかな

春の夜の雲に濡らすや洗ひ髪

春や今宵歌つかまつる御姿

海棠の精が出てくる月夜かな

うた折々月下の春ををちこちす

思ひ切つて更け行く春の独りかな

などと、試みているうち、いつしか、うとうと眠くなる。

恍惚と云うのが、こんな場合に用いるべき形容詞かと思う。

熟睡のうちには何人も我を認め得ぬ。明覚の際には誰あつて外界を忘るるものはなからう。ただ両域の間に縷のごとき幻境が横わる。醒めたりと云うには余り朧にて、眠ると評せんには少しく生氣を剩す。起臥の二界を同瓶裏に盛りて、詩歌の彩管をもつて、ひたすらに攪き雑ぜたるがごとき状態を云うのである。自然の色を夢の手前までばかして、ありのままの宇宙を一段、霞の国へ押し流す。睡魔の妖腕をかりて、ありとある実相の角度を滑かにすると共に、かく和らげられたる乾坤に、われからと微かに鈍き脈を通わせる。地を這う煙の飛ばんとして飛び得ざるごとく、わが魂の、わが殻を離れんとして離るるに忍びざる態である。抜け出でんとして逡巡い、逡巡いては抜け出でんとし、果ては魂と云う個体を、もぎどうに保ちかねて、氤氳たる暝氣が散るともなしに四肢五体に纏綿して、依々たり恋々たる心持ちである。

余が寤寐の境にかく逍遙していると、入口の唐紙がすうと開いた。あいた所へまぼろしのごとく女の影がふうと現われた。余は驚きもせぬ。恐れもせぬ。ただ心地よく眺めている。眺めると云うてはちと言葉が強過ぎる。余が閉じている瞼の裏に幻影の女が断りもなく滑り込んで来たのである。まぼろしはそりそりと部屋のかなかに這入る。仙女の波をわたるがごとく、畳の上には人らしい音も立たぬ。閉ずる眼のなから見る世の中だから確とは解らぬが、色の白い、髪濃い、襟足の長い女である。近頃はやる、ぼかした写真を灯影にすかすような気がする。

まぼろしは戸棚の前でとまる。戸棚があく。白い腕が袖をすべって暗闇のなかにほのめいた。戸棚がまたしまる。畳の波がおのずから幻影を渡し返す。入口の唐紙がひとりで閉たる。余が眠りはしだいに濃やかになる。人に死して、まだ牛にも馬にも生れ変らない途中はこんなであらう。

いつまで人と馬の相中に寝ていたかわれは知らぬ。耳元にききつと女の笑い声がしたと思つたら眼がさめた。見れば夜の幕はとくに切り落されて、天下は隅から隅まで明るい。うららかな春日が丸窓の竹格子を黒く染め抜いた様子を見ると、世の中に不思議と云うものの潜む余地はなさそうだ。神秘は十萬億土へ帰って、三途の川の向側へ渡つたのだらう。浴衣のまま、風呂場へ下りて、五分ばかり偶然と湯壺のなかで顔を浮かしていた。洗う気にも、出る気にもならない。第一昨夕はどうしてあんな心持ちになったのだらう。昼と夜を界にこう天地が、でんぐり返るのは妙だ。

身体を拭くさえ退儀だから、いい加減にして、濡れたまま上

って、風呂場の戸を内から開けると、また驚かされた。

「御早う。昨夕はよく寝られましたか」

戸を開けると、この言葉とはほとんど同時にきた。人のいるさえ予期しておらぬ出合頭の挨拶だから、さそくの返事も出る違えないうちに、

「さ、御召しなさい」

と後ろへ廻って、ふわりと余の背中へ柔かい着物をかけた。ようやくの事「これはありがとう……」だけ出して、向き直る、途端に女は二三歩退いた。

昔から小説家は必ず主人公の容貌を極力描写することに相場がきまつてゐる。古今東西の言語で、佳人の品評に使用せられたるものを列挙したならば、大蔵経とその量を争うかも知れぬ。この辟易すべき多量の形容詞中から、余と三步の隔りに立つ、体を斜めに振って、後目に余が驚愕と狼狽を心地よげに眺めている女を、もっとも適当に叙すべき用語を拾い来つたなら、どれほどの数になるか知れない。しかし生れて三十余年の今日に至るまで未だかつて、かかる表情を見た事がない。美術家の評によると、希臘の彫刻の理想は、端肅の二字に帰するそうである。端肅とは人間の活力の動かんとして、未だ動かざる姿と思う。動けばどう変化するか、風雲か雷霆か、見わけのつかぬところに余韻が縹緲と存するから含蓄の趣を百世の後に伝うるのであらう。世上幾多の尊嚴と威儀とはこの湛然たる可能性の裏面に伏在している。動けばあらわれる。あらわれるれば一か二か三か必ず始末がつく。一も二も三も必ず特殊の能力には相違なからうが、すでに一となり、二となり、三となった暁には、拖泥帶水の陋を遺憾な

く示して、本来円満の相に戻る訳には行かぬ。この故に動と名のつくものは必ず卑しい。運慶の仁王も、北斎の漫画も全くこの動の一字で失敗している。動か静か。これがわれら画工の運命を支配する大問題である。古来美人の形容も大抵この二大範疇のいずれにか打ち込む事が出来べきはずだ。

ところがこの女の表情を見ると、余はいずれとも判断に迷った。口は一文字を結んで静である。眼は五分のすきさえ見出すべく動いている。顔は下膨の瓜実形で、豊かに落ちつきを見せているに引き易えて、額は狭苦しくも、こせついて、いわゆる富士額の俗臭を帯びている。のみならず眉は両方から逼って、中間に数滴の薄荷を点じたるごとく、ぴくぴく焦慮している。鼻ばかりは軽薄に鋭どくもない、遲鈍に丸くもない。画にしたら美しかろう。かように別れ別れの道具が皆一癖あつて、乱調にどやどやと余の双眼に飛び込んだのだから迷うのも無理はない。

元来は静であるべき大地の一角に陥欠が起つて、全体が思わず動いたが、動くは本来の性に背くと悟つて、力めて往昔の姿にもどろうとしたのを、平衡を失つた機勢に制せられて、心ならずも動きつづけた今日は、やけだから無理でも動いて見せると云わぬばかりの有様が——そんな有様がもしあるとすればちようどこの女を形容する事が出来る。

それだから輕侮の裏に、何となく人に縋りたい景色が見える。人を馬鹿にした様子の底に慎み深い分別がほのめいている。才に任せ、氣を負えば百人の男子を物の数とも思わぬ勢の下から温和しい情けが吾知らず湧いて出る。どうしても表情に一致がない。悟りと迷が一軒の家に喧嘩をしながらも同

居している体だ。この女の顔に統一の感じのないのは、心に統一のない証拠で、心に統一がないのは、この女の世界に統一がなかったのだらう。不幸に押しつけられながら、その不幸に打ち勝とうとしている顔だ。不仕合な女に違ない。

「ありがとう」と繰り返しながら、ちよつと会釈した。

「ほほほ御部屋は掃除がしてあります。往つて御覽なさい。いずれ後ほど」

と云うや否や、ひらりと、腰をひねって、廊下を輕氣に馳けて行つた。頭は銀杏返に結っている。白い襟がたぼの下から見える。帯の黒縹子は片側だけだらう。

四

ほかんと部屋へ帰ると、なるほど奇麗に掃除がしてある。ちよつと気がかりだから、念のため戸棚をあけて見る。下には小さな用筆筒が見える。上から友禪の扱帯が半分垂れかかつて、いるのは、誰か衣類でも取り出して急いで、出て行ったものと解釈が出来る。扱帯の上部はなまめかしい衣裳の間にかくれて先は見えない。片側には書物が少々詰めてある。一番上に白隠和尚の遠良天釜と、伊勢物語の一卷が並んでる。昨夕のうつつは事実かも知れないと思つた。

何気なく座布団の上へ坐ると、唐木の机の上に例の写生帖が、鉛筆を挟んだまま、大事そうにあげてある。夢中に書き流した句を、朝見たらどんな具合だろうと手に取る。

「海棠の露をふるふや物狂」の下にだれだか「海棠の露をふるふや朝鳥」とかいたものがある。鉛筆だから、書体はしかと解らんが、女にしては硬過ぎる、男にしては柔か過ぎる。おやとまた吃驚する。次を見ると「花の影、女の影の朧かな」の下に「花の影女の影を重ねけり」とつけてある。「正一位女に化けて朧月」の下には「御曹子女に化けて朧月」とある。真似をしたつもりか、添削した気か、風流の交わりか、馬鹿か、馬鹿にしたのか、余は思わず首を傾けた。

後ほどと云ったから、今に飯の時にでも出て来るかも知れない。出て来たら様子が少しは解るだろう。ときに何時だ

と時計を見ると、もう十一時過ぎである。よく寝たものだ。これでは午飯だけで間に合せる方が胃のためによからう。

右側の障子をあけて、昨夜の名残はどの辺かなと眺める。海棠と鑑定したのはたして、海棠であるが、思ったよりも庭は狭い。五六枚の飛石を一面の青苔が埋めて、素足で踏みつけたら、さも心持ちがよさそうだ。左は山つづきの崖に赤松が斜めに岩の間から庭の上へさし出している。海棠の後ろにはちよつとした茂みがあつて、奥は大竹藪が十丈の翠りを春の日に曝している。右手は屋の棟で遮ぎられて、見えぬけれども、地勢から察すると、だらだら下りに風呂場の方へ落ちてゐるに相違ない。

山が尽きて、岡となり、岡が尽きて、幅三丁ほどの平地となり、その平地が尽きて、海の底へもぐり込んで、十七里向うへ行つてまた隆然と起き上つて、周囲六里の摩耶島となる。これが那古井の地勢である。温泉場は岡の麓を出来るだけ崖へさしかけて、岨の景色を半分庭へ囲い込んだ一構であるから、前面は二階でも、後ろは平屋になる。椽から足をぶらさげれば、すぐと踵は苔に着く。道理こそ昨夕は楷子段をむやみに上ったり、下ったり、異な仕掛の家と思つたはずだ。

今度は左り側の窓をあける。自然と凹む二畳ばかりの岩のなかに春の水がいつともなく、たまって静かに山桜の影を蘸している。二株三株の熊笹が岩の角を彩どる、向うに枸杞とも見える生垣があつて、外は浜から、岡へ上る岨道か時々人声が聞える。往來の向うはだらだらと南下がりに蜜柑を植えて、谷の窮まる所にまた大きな竹藪が、白く光る。竹の葉が遠くから見ると、白く光るとはこの時初めて知つた。藪から

上は、松の多い山で、赤い幹の間から石磴が五六段手にとるように見える。大方御寺だろう。

入口の襖をあけて椽へ出ると、欄干が四角に曲って、方角から云えば海の見ゆべきはずの所に、中庭を隔てて、表二階の一間がある。わが住む部屋も、欄干に倚ればやはり同じ高さの二階なのには興が催おされる。湯壺は地の下にあるのだから、入湯と云う点から云えば、余は三層楼上に起臥する訳になる。

家は随分広いが、向う二階の一間と、余が欄干に添うて、右へ折れた一間のほかは、居室台所は知らず、客間と名がつきそうなのは大抵立て切つてある。客は、余をのぞくのほかほとんど皆無なのだろう。メた部屋は昼も雨戸をあけず、あけた以上は夜も閉てぬらしい。これでは表の戸締りさえ、するかしなにか解らん。非人情の旅にはもつて来いと云う屈強な場所だ。

時計は十二時近くなつたが飯を食わせる景色はさらにない。ようやく空腹を覚えて来たが、空山不見人と云う詩中にあると思うと、一とかたげぐらい俟約しても遺憾はない。画をかくのも面倒だ、俳句は作らんでもすでに俳三昧に入っているから、作るだけ野暮だ。読もうと思つて三脚几に括りつけて来た二三冊の書籍もほどく気にならん。こうやって、煦々たる春日に背中をあぶつて、椽側に花の影と共に寝ころんでいるのが、天下の至楽である。考えれば外道に堕ちる。動くとき危ない。出来るならば鼻から呼吸もしたくない。畳から根の生えた植物のようにじつとして二週間ばかり暮して見たい。やがて、廊下に足音がして、段々下から誰か上ってくる。

近づくのを聞いていると、二人らしい。それが部屋の前でとまったなと思つたら、一人は何にも云わず、元の方へ引き返す。襖があいたから、今朝の人と思つたら、やはり昨夜の小女郎である。何だか物足らぬ。

「遅くなりました」と膳を据える。朝食の言訳も何にも言わぬ。焼肴に青いものをあしらつて、椀の蓋をとれば早蕨の中に、紅白に染め抜かれた、海老を沈ませてある。ああ好い色だと思つて、椀の中を眺めていた。

「御嫌いか」と下女が聞く。

「いいや、今に食う」と云つたが實際食うのは惜しい気がした。ターナーがある晚餐の席で、皿に盛るサラダを見詰めながら、涼しい色だ、これがわしの用いる色だと傍の人に話したと云う逸事がある書物で読んだ事があるが、この海老と蕨の色をちよつとターナーに見せてやりたい。いったい西洋の食物で色のいいものは一つもない。あればサラダと赤大根ぐらいなものだ。滋養の点から云つたらどうか知らんが、画家から見るとすこぶる発達せん料理である。そこへ行くと日本本の献立は、吸物でも、口取でも、刺身でも物奇麗に出来る。会席膳を前へ置いて、一箸も着けずに、眺めたまま帰つても、目の保養から云えば、御茶屋へ上がった甲斐は充分ある。

「うちに若い女の人がいるだろう」と椀を置きながら、質問をかけた。

「へえ」

「ありや何だい」

「若い奥様でござんす」

「あのほかにまだ年寄の奥様がいるのかい」

「去年御亡おなくなりました」

「旦那さんは」

「おります。旦那さんの娘さんでござんす」

「あの若い人がかい」

「へえ」

「御客はいるかい」

「おりません」

「わたし一人かい」

「へえ」

「若い奥さんは毎日何をしているかい」

「針仕事を……」

「それから」

「三味を弾ひきます」

これは意外であつた。面白いからまた

「それから」と聞いて見た。

「御寺へ行きます」と小女郎こじやうらうが云う。

これはまた意外である。御寺と三味線は妙だ。

「御寺詣まいりをするのかい」

「いいえ、和尚様おしょうさまの所へ行きます」

「和尚さんが三味線でも習うのかい」

「いいえ」

「じゃ何をしに行くのだい」

「大徹様の所へ行きます」

なあるほど、大徹と云うのはこの額を書いた男に相違ない。この句から察すると何でも禅坊主らしい。戸棚に遠良天釜おらてがまがあつたのは、全くあの女の所持品だろう。

「この部屋は普段誰か這入はいっている所かね」

「普段は奥様がおります」

「それじゃ、昨夕ゆうべ、わたしが来る時までここにいたのだね」

「へえ」

「それは御気の毒な事をした。それで大徹さんの所へ何をし

に行くのだい」

「知りません」

「それから」

「何でござんす」

「それから、まだほかに何かするのだろう」

「それから、いろいろ……」

「いろいろって、どんな事を」

「知りません」

会話はこれで切れる。飯はようやくおわくする。膳を引くとき、

小女郎が入口の襖ふすまを開たら、中庭の裁込みうへこを隔てて、向う二

階の欄干に銀杏返しいちょうがえが頬杖ほおづえを突いて、開化した楊柳観音ようりゅうくわんのんのよ

うに下を見詰めていた。今朝に引き替かえて、はなはだ静かな

姿である。俯向うつむいて、瞳の働はたらきが、こちらへ通わないから、相好そうごう

にかほどな変化を来たしたものであるうか。昔の人は人に存

するもの眸子ぼしより良きはなしと云ったそうだが、なるほど人

焉いずくんぞ度かくさんや、人間のうちで眼ほど活きている道具はない。

寂然じゃくねんと倚よる亜字欄あじらんの下から、蝶々ちようちようが二羽寄りつ離れつ舞い

上がる。途端とたんにわが部屋の襖ふすまはあいたのである。襖の音に、

女は卒然と蝶から眼を余の方に転じた。視線は毒矢のごとく空を貫つらぬいて、会釈えしゃくもなく余が眉間みけんに落ちる。はっと思つ間に、小女郎が、またはたと襖を立て切った。あとは至極しごく呑気のんきな春

となる。

余はまたごろりと寝ころんだ。たちまち心に浮んだのは、

Sadder than is the moon's lost light,

Lost ere the kindling of dawn,

To travellers journeying on,

The shutting of thy fair face from my sight.

と云う句であつた。もし余があゝの銀杏返しに懸想して、身を碎いても逢わんと思う矢先に、今のような一瞥の別れを、魂消るまでに、嬉しとも、口惜しとも感じたなら、余は必ずこんな意味をこんな詩に作るだろう。その上

Might I look on thee in death,

With bliss I would yield my breath.

と云う二句さえ、付け加えたかも知れぬ。幸い、普通ありふれた、恋とか愛とか云う境界はすでに通り越して、そんな苦しみは感じたくても感じられない。しかし今の刹那に起つた出来事の詩趣はゆたかにこの五六行にあらわれている。余と銀杏返しの間柄にこんな切ない思はないとしても、二人の今の関係を、この詩の中に適用して見るのは面白い。あるいはこの詩の意味をわれらの身の上に引きつけて解釈しても愉快だ。二人の間には、ある因果の細い糸で、この詩にあらわれた境遇の一部分が、事実となつて、括りつけられている。因果もこのくらい糸が細いと苦にはならぬ。その上、ただの糸ではない。空を横切る虹の糸、野辺に棚引く霞の糸、露にかがやく蜘蛛の糸。切ろうとすれば、すぐ切れて、見えているうちは勝れてうつくしい。万一この糸が見る間に太くなつて井戸縄のようにかたくなつたら? そんな危険はない。余は

画工である。先はただの女とは違う。

突然襖があいた。寝返りを打って入口を見ると、因果の相手のその銀杏返しが敷居の上に立って青磁の鉢を盆に乗せたまま付んでいる。

「また寝ていらつしやるか、昨夕は御迷惑で御座んしたろう。何返も御邪魔をして、ほほほ」と笑う。臆した景色も、隠す景色も——恥ずる景色は無論ない。ただこちらが先を越されたのみである。

「今朝はありがとう」とまた礼を云つた。考えると、丹前の礼をこれで三返云つた。しかも、三返ながら、ただ難有うと云う三字である。

女は余が起き返ろうとする枕元へ、早くも坐つて

「まあ寝ていらつしやい。寝ていても話は出来ましよう」と、さも気作に云う。余は全くだと考へたから、ひとまず腹這になつて、両手で顎を支え、しばし畳の上へ肘壺の柱を立てる。

「御退屈だろうと思つて、御茶を入れに來ました」

「ありがとう」またありがとうが出た。菓子皿のなかを見ると、立派な羊羹が並んでいる。余はすべての菓子のうちでもっとも羊羹が好だ。別段食いたくはないが、あの肌合が滑らかに、緻密に、しかも半透明に光線を受ける具合は、どう見ても一個の美術品だ。ことに青味を帯びた煉上げ方は、玉と蛸石の雑種のようで、はなはだ見て心持ちがいい。のみならず青磁の皿に盛られた青い煉羊羹は、青磁のなかから今生れたようにつやつやして、思わず手を出して撫でて見たくなる。西洋の菓子で、これほど快感を与えるものは一つもない。クリームの色はちよつと柔かだが、少し重苦しい。ジェリは、

一目宝石のように見えるが、ぶるぶる顫えて、羊羹ほどの重味がない。白砂糖と牛乳で五重の塔を作るに至っては、言語道断の沙汰である。

「うん、なかなか美事だ」

「今しがた、源兵衛が買って帰りました。これならあなたに召し上がられるでしょう」

源兵衛は昨夕城下へ留ったと見える。余は別段の返事もせず羊羹を見ていた。どこで誰れが買って来ても構う事はない。ただ美しくければ、美しいと思うだけで充分満足である。

「この青磁の形は大変いい。色も美事だ。ほとんど羊羹に対して遜色がない」

女はふふんと笑った。□元に侮どりの波が微かに揺れた。余の言葉を洒落と解したのである。なるほど洒落とすれば、軽蔑される価はたしかにある。智慧の足りない男が無理に洒落れた時には、よくこんな事を云うものだ。

「これは支那ですか」

「何ですか」と相手はまるで青磁を眼中に置いていない。

「どうも支那らしい」と皿を上げて底を眺めて見た。

「そんなものが、御好きなら、見せましょうか」

「ええ、見せて下さい」

「父が骨董が大好きですから、だいぶいろいろなものがあります。父にそう云って、いつか御茶でも上げましょう」

茶と聞いて少し辟易した。世間に茶人ほどもったいぶった風流人はない。広い詩界をわざとらしく窮屈に縄張りをして、極めて自尊的に、極めてことさらに、極めてせせこましく、必要もないのに鞠躬如として、あぶくを飲んで結構がるもの

はいわゆる茶人である。あんな煩瑣な規則のうちに雅味があるなら、麻布の聯隊のなかには雅味で鼻がつかえるだろう。廻れ右、前への連中はことごとく大茶人でなくてはならぬ。あれは商人とか町人とか、まるで趣味の教育のない連中が、どうするのが風流か見当がつかぬところから、器械的に利休以後の規則を鵜呑みにして、これでおおかた風流なんだろう、とかえって真の風流人を馬鹿にするための芸である。

「御茶って、あの流儀のある茶ですか」

「いいえ、流儀も何もありません。御厭なら飲まなくってもいい御茶です」

「そんなら、ついでに飲んでもいいですよ」

「ほほほ。父は道具を人に見ていただくのが大好きなんですから……」

「褒めなくっちゃあ、いけませんか」

「年寄りだから、褒めてやれば、嬉しがりですよ」

「へえ、少しなら褒めて置きましょう」

「負けて、たくさん褒めて置きなさい」

「はははは、時にあなたの言葉は田舎じゃない」

「人間は田舎なんですか」

「人間は田舎の方がいいのです」

「それじゃ幅が利きます」

「しかし東京にいた事がありました」

「ええ、いました、京都にもいました。渡りものですから、

方々にいました」

「ことごと、どっちがいいですか」

「同じ事ですわ」

「こう云う静かな所が、かえって気楽でしょう」

「気楽も、気楽でないも、世の中は気の持ちよう一つでどうでもなります。蚤の国が厭になつたつて、蚊の国へ引越しちゃ、何にもなりません」

「蚤も蚊もない国へ行つたら、いいでしょう」

「そんな国があるなら、ここへ出して御覧なさい。さあ出してちょうだい」と女は詰め寄せる。

「御望みなら、出して上げましょう」と例の写生帖をとつて、女が馬へ乗つて、山桜を見ている心持ち——無論とつさの筆使いだから、画にはならない。ただ心持ちだけをさらさらと書いて、

「さあ、この中へ御這入りなさい。蚤も蚊もいません」と鼻の前へ突きつけた。驚くか、恥ずかしがるか、この様子では、よもや、苦しがる事はなかうと思つて、ちよつと景色を伺うと、

「まあ、窮屈な世界だこと、横幅ばかりじゃありませんか。

そんな所が御好きなの、まるで蟹ね」と云つて退けた。余は「わはははは」と笑う。軒端に近く、啼きかけた鶯が、中途で声を崩して、遠き方へ枝移りをやる。兩人はわざと對話をやめて、しばらく耳を峙てたが、いったん鳴き損ねた咽喉は容易に開けぬ。

「昨日は山で源兵衛に御逢いでしたろう」

「ええ」

「長良の乙女ながらのおとめの五輪塔ごりんとうを見ていらしたか」

「ええ」

「あきづけは、をばなが上に置く露の、けぬべくもわは、お

もほゆるかも」と説明もなく、女はすらりと節もつけずに歌だけ述べた。何のためか知らぬ。

「その歌はね、茶店で聞きましたよ」

「婆さんが教えましたか。あれはもと私のうちへ奉公したもので、私がまだ嫁に……」と云いかけて、これはと余の顔を見たから、余は知らぬ風をしていた。

「私がまだ若い時分でしたが、あれが来るたびに長良の話をして聞かせてやりました。うただけはなかなか覚えなかつたのですが、何遍も聴くうちに、とうとう何もかも誦誦してしまいました」

「どうれで、むずかしい事を知つてると思つた。——しかしあの歌は憐れな歌ですな」

「憐れでしょうか。私ならあんな歌は咏みませんね。第一、淵川へ身を投げるなんて、つまらないじゃありませんか」

「なるほどつまらないですね。あなたならどうしますか」

「どうするつて、訳ないじゃありませんか。ささだ男もささべ男も、男 妾にするばかりですわ」

「両方ともですか」

「ええ」

「えらいな」

「えらかあない、当り前ですわ」

「なるほどそれじゃ蚊の国へも、蚤の国へも、飛び込まずに済む訳だ」

「蟹のような思いをしなくつても、生きていられるでしょう」

ほーう、ほけきようと忘れかけた鶯が、いつ勢を盛り

返してか、時ならぬ高音を不意に張つた。一度立て直すと、

あととは自然に出ると見える。身を逆まにして、ふくらむ咽喉の底を震わして、小さき口の張り裂くるばかりに、

ほーう、ほけきよーう。ほー、ほけっきよーうと、つづけ様に囀ずる。

「あれが本当の歌です」と女が余に教えた。

五

「失礼ですが旦那は、やっぱり東京ですか」

「東京と見えるかい」

「見えるかいつて、一目見りゃあ、——第一言葉でわかりま
さあ」

「東京はどこだか知れるかい」

「そうさね。東京は馬鹿に広いからね。——何でも下町じゃ
ねえようだ。山の手だね。山の手は麹町かね。え？ それじ
や、小石川？ でなければ牛込か四谷でしょう」

「まあそんな見当だろう。よく知ってるな」

「こう見えて、私も江戸っ子だからね」

「道理で生粋だと思ったよ」

「えへへへ。からっきし、どうも、人間もこうなっちゃ、
みじめですぜ」

「何でまたこんな田舎へ流れ込んで来たのだい」

「ちげえねえ、旦那のおっしゃる通りだ。全く流れ込んだん
だからね。すっかり食い詰めっちゃまって……」

「もとから髪結床の親方かね」

「親方じゃねえ、職人さ。え？ 所かね。所は神田松永町で
さあ。なあに猫の額見たような小さな汚ねえ町でさあ。旦那
なんか知らねえはずさ。あすこに竜閑橋でえ橋がありましよ
う。え？ そいつも知らねえかね。竜閑橋や、名代な橋だが

ね」

「おい、もう少し、石鹸を塗^つけてくれないか、痛^{いた}くって、いけない」

「痛^{いた}うがすかい。私^{わたし}や癩^{かん}性^{しょう}でね、どうも、こうやって、逆剃^{さかすり}をかけて、一本一本髭^{ひげ}の穴を掘^ほらなくっちゃ、気が済まねえんだから、——なあに今時^{いまとき}の職人^{しやくじん}なあ、剃^するんじゃねえ、撫^なでるんだ。もう少しだ我慢^{まん}おしなせえ」

「我慢^{まん}は先^{さき}から、もうだいぶしたよ。御願^{ごがん}だから、もう少し湯^ゆか石鹸^{せっけん}をつけとくれ」

「我慢^{まん}しきれねえかね。そんなに痛^{いた}かあねえはずだが。全^{ぜん}体^{てい}、髭^{ひげ}があんまり、延^のび過^かぎてゐるんだ」

やけに頬^ほの肉をつまみ上げた手を、残念^{ざんねん}そうに放^{はな}した親方^{おやう}は、棚^{たな}の上^{うへ}から、薄^{うす}っ片^ぺな赤^{あか}い石鹸^{せっけん}を取り卸^おろして、水のなかにちよつと浸^{ひた}したと思^{おも}つたら、それなり余^{あま}の顔^{かほ}をまんべんなく一応^{いちおう}撫^なで廻^{まわ}した。裸^{はだか}石鹸^{せっけん}を顔^{かほ}へ塗^ぬりつけられた事はあまりない。しかもそれを濡^ぬらした水^{みづ}は、幾^{いく}日^{にち}前^{まえ}に汲^くんだ、溜^{ため}め置^おきかと考えると、余^{あま}りぞつとしない。

すでに髪^{かみ}結^{ゆい}床^{どこ}である以上^{いじょう}は、御客^{おきやく}の権利^{けんり}として、余^{あま}は鏡^{かがみ}に向^{むか}わなければならん。しかし余^{あま}はさつきからこの権利^{けんり}を放棄^{ほうき}したく考^{かんが}えている。鏡^{かがみ}と云^いう道具^{どうぐ}は平^{たい}らに出来^{でき}て、なだらかに人の顔^{かほ}を写^{うつ}さなくては義理^{ぎり}が立たぬ。もしこの性質^{せいかつ}が具^{そな}わらない鏡^{かがみ}を懸^かけて、これに向^{むか}えと強^しいるならば、強^しいるものは下^{した}手^たな写真^{しやしん}師^しと同^{どう}じく、向^{むか}うものの器量^{きりやう}を故意^{こぎ}に損^{そん}害^{がい}したと云^いわなければならぬ。虚栄^{きやうぎ}心を挫^{くじ}くのは修養^{しゆやう}上一^{じゅういち}種^{しゆ}の方便^{はんべん}かも知^しれぬが、何^{なん}も己^{おの}れの真価^{まか}以下^{いげ}の顔^{かほ}を見^みせて、これがあなただですと、こち^{こち}らを侮辱^{ぶじやく}するには及^{およ}ぶまい。今^{いま}余^{あま}が辛抱^{しんぼう}

して向き合^{むかひあ}うべく余儀^{よぎ}なくされている鏡^{かがみ}はたしかに最前^{さいぜん}から余^{あま}を侮辱^{ぶじやく}している。右^{みぎ}を向^{むか}くと顔中^{かほぢう}鼻^{はな}になる。左^{ひだり}を出^だすと口^{くち}が耳元^{みみもと}まで裂^ひける。仰^{あおむ}向^むくと墓^{ひま}蛙^{がは}を前^{まへ}から見た^みたように真平^{まっぺい}に圧^おし潰^{つぶ}され、少^{すこ}しこごむと福祿寿^{ふくろくじう}の祈誓^{もろしぎ}児^このように頭^{あたま}がせり出^でしてくる。いやしくもこの鏡^{かがみ}に対^{たい}する間^{あいだ}は一人^{ひとり}でいろい로운化物^{ばけもの}を兼勤^{けんきん}しなくてはならぬ。写^{うつ}るわが顔^{かほ}の美術^{びいじゆ}的^{てき}ならぬはまず我慢^{まん}するとしても、鏡^{かがみ}の構造^{こうぞう}やら、色合^{しきあひ}や、銀紙^{ぎんし}の剥^はげ落ちて、光線^{くわうせん}が通^{とお}り抜^ぬける模様^{もやう}などを総合^{そうごう}して考えると、この道具^{どうぐ}その物^{もの}からが醜^{みにく}体^{たい}を極^{きま}めている。小^{しょう}人^{にん}から罵^{のの}罵^{のの}されるとき、罵^{のの}罵^{のの}それ自身^{かみづみ}は別^{べつ}に痛痒^{つうよう}を感^{かん}ぜぬが、その小^{しょう}人^{にん}の面^{めん}前に起^お臥^がしなければならぬとすれば、誰^{たれ}しも不愉快^{ふげき}だろう。

その上^{うへ}この親方^{おやう}がただの親方^{おやう}ではない。そこから覗^{のぞ}いたときは、胡坐^{あぐら}をかいて、長煙^{ながぎせる}管^{かん}で、おもちゃの日英同盟^{にちえいどうめい}国旗^{こくき}の上^{うへ}へ、しきりに煙草^{たばこ}を吹^ふきつけて、さも退屈^{たいくつ}氣^きに見^みえたが、這^{はい}入^いって、わが首^{くび}の所置^{しよぢ}を托^{たく}する段^{だん}になつて驚^{おどろ}ろいた。髭^{ひげ}を剃^そる間^{かん}は首^{くび}の所有^{しやうやう}権^{けん}は全^{ぜん}く親方^{おやう}の手^てにあるのか、はた幾分^{いくぶん}かは余^{あま}の上^{うへ}にも存^{ぞん}するの^のか、一人^{ひとり}で疑^ぎがい出^でしたくらい、容赦^{ようしや}なく取^とり扱^{あつか}われる。余^{あま}の首^{くび}が肩^{かた}の上^{うへ}に釘^{くぎ}付^づけにされているにしてみ^みこれでは永^{とこ}く持^もたない。

彼は髪^{かみ}剃^{そり}を揮^{ふる}うに當^{あた}つて、毫^{ごう}も文明^{ぶんめい}の法則^{はふしそく}を解^とけておらん。頬^ほにあたる時はがりりと音^{おと}がした。揉^もみ上^あの所^{ところ}ではぞきりと動脈^{どうみやく}が鳴^なった。顎^{あご}のあたり^{あたり}に利刃^{りじん}がひらめく時分^{ときぶん}にはごりごり、ごりごりと霜^{しも}柱^{はしら}を踏^ふみつけるような怪^{あや}しい声^{こゑ}が出^でた。しかも本人^{ほんじん}は日本^{にっぽん}一^{いち}の手腕^{てうぶ}を有^あする親方^{おやう}をもつて自任^{じにん}している。最後^{さいご}に彼は酔^よつ払^{はら}っている。旦那^{だんな}えと云^いうたんびに妙^{めう}な臭^{にお}いがする。時々^{ときどき}は異^いな瓦斯^{ガス}を余^{あま}が鼻柱^{はなぢう}へ吹^ふき掛^かける。これ

はいつ何時、髪剃がどう間違つて、どこへ飛んで行くか解らない。使う当人にさえ判然たる計画がない以上は、顔を貸した余に推察のできようはずがない。得心づくで任せた顔だから、少しの怪我なら苦情は云わないつもりだが、急に気が變つて咽喉笛でも掻き切られては事だ。

「石鯨なんぞを、つけて、剃るなあ、腕が生なんだが、旦那のは、髭が髭だから仕方があるめえ」と云いながら親方は裸石鯨を、裸のまま棚の上へ放り出すと、石鯨は親方の命令に背いて地面の上へ転がり落ちた。

「旦那あ、あんまり見受けねえようだが、何ですかい、近頃来なすつたのかい」

「二三日前来たばかりさ」

「へえ、どこにいるんですい」

「志保田に逗ってるよ」

「うん、あすこの御客さんですか。おおかたそんな事たろうと思つてた。実あ、私もあの隠居さんを頼て来たんですよ。」

——なにね、あの隠居が東京にいた時分、わっしが近所にて、——それで知ってるのさ。いい人ださあ。ものの解つたね。去年御新造が死んじまって、今じゃ道具ばかり捻くってるんだが——何でも素晴らしいものが、有るてえますよ。売つたらよっぽど金目だろうって話さ」

「奇麗な御嬢さんがいるじゃないか」

「あぶねえね」

「何が？」

「何がって。旦那の前だが、あれで出返りですぜ」

「そうかい」

「そうかいどころの騒じゃねえんだね。全体なら出て来なくつてもいいところをさ。——銀行が潰れて贅沢が出来ねえって、出ちまったんだから、義理が悪るいやね。隠居さんがああしているうちはいいが、もしもの事があつた日にや、法返しがつかねえ訳になりまさあ」

「そうかな」

「当り前でさあ。本家の兄たあ、仲がわるしさ」

「本家があるのかい」

「本家は岡の上にあります。遊びに行つて御覧なさい。景色のいい所ですよ」

「おい、もう一遍石鯨をつけてくれないか。また痛くなつて来た」

「よく痛くなる髭だね。髭が硬過ぎるからだ。旦那の髭じゃ、三日に一度は是非剃を当てなくっちゃ駄目ですぜ。わっしの剃で痛けりや、どこへ行つたつて、我慢出来つこねえ」

「これから、そうしよう。何なら毎日来てもいい」

「そんなに長く逗留する気なんですか。あぶねえ。およしなせえ。益もねえ事つた。碌でもねえものに引かかつて、どんな目に逢うか解りませんぜ」

「どうして」

「旦那あの娘は面はいいようだが、本当はき印しですぜ」

「なぜ」

「なぜって、旦那。村のものは、みんな氣狂だつて云ってるんでさあ」

「そりや何かの間違だろう」

「だって、現に証拠があるんだから、御よしなせえ。けんの

んだ」

「おれは大丈夫だが、どんな証拠があるんだい」

「おかしな話しさね。まあゆっくり、煙草でも呑んで御出なせえ話すから。——頭あ洗いましうか」

「頭はよそう」

「頭垢だけ落して置かかね」

親方は垢の溜った十本の爪を、遠慮なく、余が頭蓋骨の上に並べて、断わりもなく、前後に猛烈なる運動を開始した。

この爪が、黒髪の根を一本ごとに押し分けて、不毛の境を巨人の熊手が疾風の速度で通るごとくに往来する。余が頭に何十万本の髪の毛が生えているか知らんが、ありとある毛がごとくとく根こぎにされて、残る地面がべた一面に蚯蚓腫にふくれ上った上、余勢が地磐を通して、骨から脳味噌まで震盪を感じたくらい烈しく、親方は余の頭を掻き廻わした。

「どうです、好い心持でしょう」

「非常な辣腕だ」

「え？　こうやると誰でもさっぱりするからね」

「首が抜けそうだよ」

「そんなに倦怠うがすかい。全く陽気の加減だね。どうも春てえ奴あ、やに身体がなまけやがって——まあ一ぶく御上がんなさい。一人で志保田にいちや、退屈でしょう。ちと話して御出なせえ。どうも江戸っ子は江戸っ子同志でなくっちゃ、話しが合わねえものだから。何ですか、やっぱりあの御嬢さんが、御愛想に出てきますかい。どうもさっぱし、見境のねえ女だから困っちゃわあ」

「御嬢さんが、どうか、したところで頭垢が飛んで、首が

抜けそうになったっけ」

「違ねえ、がんがらがんだから、からっきし、話に締りがねえったらねえ。——そこでその坊主が逆せちまって……」

「その坊主たあ、どの坊主だい」

「観海寺の納所坊主がさ……」

「納所にも住持にも、坊主はまだ一人も出て来ないんだ」

「そうか、急勝だから、いけねえ。苦味走った、色の出来そうな坊主だった、そいつが御前さん、レコに参っちゃまって、とうとう文をつけたんだ。——おや待てよ。口説たんだっけかな。いんにゃ文だ。文に違えねえ。すると——こうつと——何だか、行きさつが少し変だぜ。うん、そうか、やっぱりそうか。するてえと奴さん、驚ろいちまってからに……」

「誰が驚ろいたんだい」

「女がさ」

「女が文を受け取って驚ろいたんだね」

「ところが驚ろくような女なら、殊勝らしいんだが、驚ろくどころじゃねえ」

「じゃ誰が驚ろいたんだい」

「口説た方がさ」

「口説ないのじゃないか」

「ええ、じれってえ。間違ってるあ。文をもらってさ」

「それじゃやっぱり女だろう」

「なあに男がさ」

「男なら、その坊主だろう」

「ええ、その坊主がさ」

「坊主がどうして驚ろいたのかい」

「どうしてって、本堂で和尚さんと御経を上げてると、突然あの女が飛び込んで来て——ウフフフ。どうしても狂印だね」

「どうかしたのかい」

「そんなに可愛いなら、仏様の前で、いっしょに寝ようって、出し抜けて、泰安さんの頸っ玉へかじりついたんでさあ」

「へええ」

「面喰ったなあ、泰安さ。気狂に文をつけて、飛んだ恥を掻かせられて、とうとう、その晩こっそり姿を隠して死んじまつて……」

「死んだ？」

「死んだろうと思うのさ。生きちゃいられめえ」

「何とも云えない」

「そうさ、相手が気狂じゃ、死んだって冴えねえから、ことによると生きてるかも知れねえね」

「なかなか面白い話だ」

「面白いの、面白くないのって、村中大笑いでさあ。ところが当人だけは、根が気が違ってるんだから、酒唾酒唾して平気なもんで——なあに旦那のようにしっかりしていいりや大丈夫ですがね、相手が相手だから、滅多にからかったり何かすると、大変な目に逢いますよ」

「ちつと気をつけるかね。はははははは」

生温い磯から、塩気のある春風がふわりふわりと来て、親方の暖簾を眠たそうに煽る。身を斜にしてその下をくぐり抜ける燕の姿が、ひらりと、鏡の裡に落ちて行く。向うの家では六十ばかりの爺さんが、軒下に蹲踞まりながら、だまつて

貝をむいている。かちやりと、小刀があたるたびに、赤い味が笹のなかに隠れる。殻はきらりと光りを放って、二尺あまりの陽炎を向へ横切る。丘のごとくに堆かく、積み上げられた、貝殻は牡蠣か、馬鹿か、馬刀貝か。崩れた、幾分は砂川の底に落ちて、浮世の表から、暗らい国へ葬られる。葬られるあとから、すぐ新しい貝が、柳の下へたまる。爺さんは貝の行末を考うる暇さえなく、ただ空しき殻を陽炎の上へ放り出す。彼れの笹には支うべき底なくして、彼れの春の日は無尽蔵に長閑かと見える。

砂川は二間に足らぬ小橋の下を流れて、浜の方へ春の水をそぞ。春の水が春の海と出合うあたりには、参差として幾尋の干網が、網の目を抜けて村へ吹く軟風に、腥き微温を与えつつあるかと怪しまれる。その間から、鈍刀を溶かして、気長にのたくらせたように見えるのが海の色だ。

この景色とこの親方とはとうてい調和しない。もしこの親方の人格が強烈で四辺の風光と拮抗するほどの影響を余の頭脳に与えたならば、余は両者の間に立つてすこぶる円柄方鑿の感に打たれただろう。幸にして親方はさほど偉大な豪傑ではなかった。いくら江戸っ子でも、どれほどたんかを切つても、この渾然として駘蕩たる天地の大気象には叶わない。満腹の饒舌を弄して、あくまでこの調子を破ろうとする親方は、早く「微塵となつて、怡々たる春光の裏に浮遊している。矛盾とは、力において、量において、もしくは意気体軀において氷炭相容るる能わずして、しかも同程度に位する物もしくは人の間に在って始めて、見出し得べき現象である。両者の間隔がはなはだしく懸絶するときは、この矛盾はようやく

漸磨^{しんろう}して、かえって大勢力の一部となつて活動するに至るかも知れぬ。大人の手足^{しゅそく}となつて才子が活動し、才子の股肱^{ここう}となつて昧者^{まいしゃ}が活動し、昧者の心腹^{しんぷく}となつて牛馬が活動し得るのはこれがためである。今わが親方は限りなき春の景色を背景として、一種の滑稽^{こっけい}を演じている。長閑な春の感じを壊すべきはずの彼は、かえって長閑な春の感じを刻意に添えつつある。余は思はず弥生^{やよい}半ばに呑気^{のんき}な弥次^{やじ}と近づきになつたような気持ちになつた。この極めて安価なる気毖^{きえん}家は、太平の象^{しょう}を具したる春の日にもっとも調和せる一彩色である。

こう考えると、この親方もなかなか画^えにも、詩にもなる男だから、とうに帰るべきところを、わざと尻^{しり}を据^すえて四方八方の話をしていた。ところへ暖簾^{のれん}を滑^{すべ}つて小さな坊主頭^{ぼうずがしら}が

「御免、一つ剃^そつて貰おうか」

と這入^{はい}つて来る。白木綿の着物に同じ丸紵^{まるぐけ}の帯をしめて、上から蚊帳^{かや}のように粗い法衣^{ころも}を羽織^{あら}つて、すこぶる気楽に見える小坊主であつた。

「了念^{りょうねん}さん。どうだい、こないだあ道草^{みちくさ}あ、食^くつて、和尚^{おしょう}さんに叱^{しか}られたろう」

「いんにや、褒^ほめられた」

「使^{つか}に出て、途中で魚なんか、とつていて、了念は感心だつて、褒^ほめられたのかい」

「若いに似ず了念は、よく遊んで来て感心じや云うて、老師が褒^ほめられたのよ」

「道理^{どうり}で頭^{こぶ}に瘤^ぶが出来てらあ。そんな不作法な頭^{あたま}あ、剃^するなあ骨^こが折れていけねえ。今日は勘弁^{かんべん}するから、この次から、捏^こね直して来ねえ」

「捏ね直すくらいなら、ますこし上手な床屋へ行きます」

「はははは頭^{あたま}は凹凸^{ぼつこ}だが、口^{くち}だけは達者なもんだ」

「腕^{うで}は鈍^{どん}いが、酒^{さけ}だけ強いのは御前^{おまえ}だろ」

「篋^{べつぼう}棒^{ぼう}め、腕^{うで}が鈍^{どん}いつて……」

「わしが云うたのじゃない。老師が云われたのじゃ。そう怒るまい。年甲斐^{としがひ}もない」

「へん、面白くもねえ。——ねえ、旦那」

「ええ？」

「全体坊主なんてえものは、高い石段の上に住んでやがって、屈托^{くつたく}がねえから、自然に口^{くち}が達者になる訳ですかね。こんな小坊主までなかなか口幅^{くちはば}つてえ事を云いますぜ——おっと、もう少し頭^{どたま}を寝^ねかして——寝^ねかすんだてえのに、——言う事を聴^きかなけりや、切るよ、いいか、血が出るぜ」

「痛いかな。そう無茶をしては」

「このくらいな辛抱が出来なくて坊主になれるもんか」

「坊主にはもうなつとるがな」

「まだ一人前^{いちにんめえ}じゃねえ。——時にあの泰安^{たいあん}さんは、どうして死^しんだっけな、御小僧^{ごしょう}さん」

「泰安^{たいあん}さんは死^しにはせんがな」

「死^しなねえ？ はてな。死^しんだはずだが」

「泰安^{たいあん}さんは、その後^{のち}発憤^{はつぷん}して、陸前^{りくぜん}の大梅寺^{だいばいじ}へ行^いつて、修業^{しゅぎょう}三昧^{さんまい}じゃ。今に智識^{ちしき}になられよう。結構な事よ」

「何が結構だい。いくら坊主だつて、夜逃^{よにが}をして結構な法はあるめえ。御前^{おまえ}なんざ、よく気をつけなくっちゃいけねえぜ。とかく、しくじるなあ女だから——女^{おんな}つてえば、あの狂印^{きやうしん}はやっぱり和尚^{おしょう}さんの所へ行^いくかい」

「狂印と云う女は聞いた事がない」

「通じねえ、味噌播だ。行くのか、行かねえのか」

「狂印は来んが、志保田の娘さんなら来る」

「いくら、和尚さんの御祈祷でもあればかりや、癒るめえ。全く先の旦那が祟つてゐるんだ」

「あの娘さんはえらい女だ。老師がよう褒めておられる」

「石段をあがると、何でも逆様だから叶わねえ。和尚さんが、何て云ったって、気狂は気狂だろう。——さあ剃れたよ。早く行って和尚さんに叱られて来めえ」

「いやもう少し遊んで行って賞められよう」

「勝手にしろ、口の減らねえ餓鬼だ」

「咄この乾屎橛」

「何だと？」

青い頭はすでに暖簾をくぐって、春風に吹かれている。

六

夕暮の机に向う。障子も襖も開け放つ。宿の人は多くもあらぬ上に、家は割合に広い。余が住む部屋は、多くもあらぬ人の、人らしく振舞う境を、幾曲の廊下に隔てたれば、物の音さえ思索の煩にはならぬ。今日は一層静かである。主人も、娘も、下女も下男も、知らぬ間に、われを残して、立ち退いたかと思われる。立ち退いたとすればただの所へ立ち退きはせぬ。霞の国か、雲の国かであろう。あるいは雲と水が自然に近づいて、舵をとるさえ懶き海の上を、いつ流れたとも心づかぬ間に、白い帆が雲とも水とも見分け難き境に漂い来て、果ては帆みずからが、いずこに己れを雲と水より差別すべきかを苦しむあたりへ——そんな遙かな所へ立ち退いたと思われる。それでなければ卒然と春のなかに消え失せて、これまでの四大が、今頃は目に見えぬ靈氣となつて、広い天地の間に、顕微鏡の力を藉るとも、些の名残を留めぬようになつたのであらう。あるいは雲雀に化して、菜の花の黄を鳴き尽したる後、夕暮深き紫のたなびくほとりへ行つたかも知れぬ。または永き日を、かつ永くする蛇のつとめを果したる後、葦に凝る甘き露を吸い損ねて、落椿の下に、伏せられながら、世を香ばしく眠っているかも知れぬ。とにかく静かなものだ。

空しき家を、空しく抜ける春風の、抜けて行くは迎える人

への義理でもない。拒むものへの面^{つら}あてもない。自^{おの}から来^{きた}りて、自^{おの}から去^さる、公平なる宇宙の意である。掌^{たなこ}に顎^{あご}を支^{ささ}えたる余の心も、わが住む部屋のごとく空^{むな}しければ、春風は招かぬに、遠慮もなく行き抜けるであらう。

踏むは地と思えばこそ、裂けはせぬかとの氣遣^{きづかい}も起^{おこ}る。戴^{いた}くは天と知る故に、稻妻^{いなずま}の米嚙^{こめかみ}に震^{ふる}う怖^{おそれ}も出来る。人と争^{あそ}わねば一分^{いちぶん}が立たぬと浮世が催促するから、火宅^{かたく}の苦は免かれぬ。東西のある乾坤^{けんこん}に住んで、利害の綱を渡らねばならぬ身には、事実の恋は齷^{あだ}である。目に見る富は土である。握る名と奪^ほえる誉^{ほまれ}とは、小賢^{こさ}かしき蜂^{はち}が甘く釀^{かも}すと見せて、針を棄^すて去る蜜のごときものであらう。いわゆる楽^{たのしみ}は物に着^{ちやく}するより起るが故^{ゆえ}に、あらゆる苦しみを含む。ただ詩人と画客^{がかく}なるものあつて、飽^あくまでこの待^{たい}対^{たい}世界の精華を嚼^かんで、徹^{てつ}骨^{こつ}徹^{てつ}髓^{ずい}の清きを知る。霞^{かすみ}を餐^{さん}し、露^るを嚙^のみ、紫^しを品^{ひん}し、紅^{こう}を評^{ひやう}して、死に至^{いた}つて悔いぬ。彼らの楽は物に着^{ちやく}するのではない。同化してその物になるのである。その物になり済^{しま}した時に、我を樹立^{じゅりつ}すべき余地は茫^{ぼう}々^{ぼう}たる大地を極^{きわ}めても見^み出し得^えぬ。自在^{じざい}に泥^{でい}団^{だん}を放^{ほう}下^げして、破笠^{はりつり}裏^{うら}に無限^{むげん}の青嵐^{せいらん}を盛^もる。いたずらにこの境遇を拈^{ねん}出^{しゅつ}するのは、敢^{あえ}て市井^{しせい}の銅臭^{どうしゅう}児^じの鬼嚇^{きかく}して、好んで高く標置^{ひょうち}するがためではない。ただ這裏^{しやうり}の福音^{ふくいん}を述べて、縁ある衆生^{しゅじやう}を麾^{さし}くのみである。有^{あり}体^{てい}に云^いえは詩境と云い、画界と云うも皆人々具足^{にんにんぐそく}の道である。春秋^{しゅんじゅう}に指^{さし}を折り尽して、白頭^{はくとう}に呻吟^{しんぎん}するの徒^とといえども、一生を回顧^{かくろ}して、閱歴の波動を順次に点検^{てんけん}し来るとき、かつては微^い光^{くわう}の臭骸^{しゅうがい}に洩^もれて、吾^{われ}を忘れし、拍手^{はくしゅ}の興^{きやう}を喚^よび起す事が出来よう。出来ぬと云わば生甲斐^{いきがひ}のない男である。

されど一事^{いちじ}に即^{そく}し、一物^{いちぶつ}に化^かするのみが詩人の感興とは云わぬ。ある時は一弁^{いちべん}の花に化し、あるときは一双^{いっそう}の蝶^{ちょう}に化し、あるはウオーヅウオースのごとく、一団の水仙に化して、心を沢風^{たくふう}の裏^{うら}に撩^{りようらん}乱^{らん}せしむる事もあるうが、何^{なん}とも知れぬ四辺^{しへん}の風光にわが心を奪^{うば}われて、わが心を奪^{うば}えるは那物^{なもの}ぞとも明瞭^{めいりやう}に意識せぬ場合がある。ある人は天地の耿氣^{こうき}に触ると云うだらう。ある人は無絃^{むげん}の琴^{きん}を靈台^{れいだい}に聴くと云うだらう。またある人は知りがたく、解しがたき故に無限の域に儻^{せん}然^{かん}して、縹^{ひやう}緲^{よう}のちまたに彷徨^{ほうかう}すると形容するかも知れぬ。何と云うも皆その人の自由である。わが、唐木^{からき}の机に憑^よりてぽかんとした心裡^{しんり}の状態は正にこれである。

余は明^{あきら}かに何事をも考えておらぬ。またはたしかに何物をも見ておらぬ。わが意識の舞台に著るしき色彩をもつて動くものがないから、われはいかなる事物に同化したとも云えぬ。されども吾は動いている。世の中に動いてもおらぬ、世の外にも動いておらぬ。ただ何となく動いている。花に動くにもあらず、鳥に動くにもあらず、人間に對して動くにもあらず、ただ恍惚^{こうこつ}と動いている。

強^しいて説明せよと云わるるならば、余が心はただ春と共に動いていと云いたい。あらゆる春の色、春の風、春の物、春の声を打って、固めて、仙丹^{せんたん}に練り上げて、それを蓬萊^{ほうらい}の靈液^{れいえき}に溶^といて、桃源^{とうげん}の日で蒸発せしめた精氣が、知らぬ間に毛孔^{けあな}から染^しみ込んで、心が知覚せぬうちに飽和^{ほうわ}されてしまったと云いたい。普通の同化には刺激がある。刺激があればこそ、愉快であらう。余の同化には、何と同化したか不明であるから、毫^{ごう}も刺激がない。刺激がないから、窈然^{ようぜん}として名状し

がたい^{たのしみ}楽がある。風に揉まれて上の空なる波を起す、輕薄で騒々しい^{おもむき}趣とは違ふ。目に見えぬ幾尋の底を、大陸から大陸まで動いている^{こうよう}漢洋たる蒼海の有様と形容する事が出来る。ただそれほどに活力がないばかりだ。しかしそこにかえて幸福がある。偉大なる活力の発現は、この活力がいつか尽き果てるだろうとの懸念が籠る。常の姿にはそう云う心配は伴わぬ。常よりは淡きわが心の、今の状態には、わが烈しき力の銷磨しはせぬかとの憂を離れたるのみならず、常の心の可もなく不可もなき凡境をも脱却している。淡しとは單に捕え難しと云う意味で、弱きに過ぎる^{おそれ}虞を含んではおらぬ。冲融とか澹蕩とか云う詩人の語はもつともこの境を切実に言^おい^お了^おせたものだろう。

この境界を画にして見たらどうだろうと考えた。しかし普通の画にはならないにきまつている。われらが俗に画と称するものは、ただ眼前の人事風光をありのままなる姿として、もしくはこれをわが審美眼に漉過して、^{えきぬ}絵絹の上に移したものに過ぎぬ。花が花と見え、水が水と映り、人物が人物として活動すれば、画の能事は終つたものと考えられている。もしこの上に一頭地を抜けば、わが感じたる物象を、わが感じたるままの趣を添えて、画布の上に淋漓として生動させる。ある特別の感興を、己が捕えたる森羅の裡に寓するのがこの種の技術家の主意であるから、彼らの見たる物象観が明瞭に筆端に迸^{ほとば}しつておらねば、画を製作したとは云わぬ。己れはしかじかの事を、しかじかに観、しかじかに感じたり、その観方も感じ方も、前人の籬下に立ちて、古来の伝説に支配せられたるにあらず、しかももつとも正しくして、もつとも美しくし

きものなりとの主張を示す作品にあらざれば、わが作と云うをあえてせぬ。

この二種の製作家に主客深淺の區別はあるかも知れぬが、明瞭なる外界の刺激を待つて、始めて手を下すのは双方共同である。されど今、わが描かんとする題目は、さほどに分明なものではない。あらん限りの感覚を鼓舞して、これを心外に物色したところで、方円の形、紅緑の色は無論、濃淡の陰、洪纖の線を見出しかねる。わが感じは外から来たのではない、たとい来たとしても、わが視界に横わる、一定の景物でないから、これが原因だと指を挙げて明らかに人に示す訳に行かぬ。あるものはただ心持ちである。この心持ちを、どうあらわしたら画になるだろう——否この心持ちをいかなる具体を藉りて、人の合点するように^{ほうふつ}髣髴せしめ得るかが問題である。

普通の画は感じはなくても物さえあれば出来る。第二の画は物と感じと両立すればできる。第三に至つては存するものはただ心持ちだけであるから、画にするには是非共この心持ちに恰好なる対象を^{えら}択ばなければならぬ。しかるにこの対象は容易に出て来ない。出て来ても容易に纏らない。纏つても自然界に存するものとは丸で趣を異にする場合がある。したがって普通の人から見れば画とは受け取れない。描いた当人も自然界の局部が再現したものとは認めておらん、ただ感興の上した刻下の心持ちを幾分でも伝えて、多少の生命を^{しやうきやう}愉^し悦^{きやう}しがたきムードに与うれば大成功と心得ている。古来からこの難事業に全然の^{いさおし}績^しを収め得たる画工があるかないか知らぬ。ある点までこの流派に指を染め得たるものを^あ挙^あぐれば、文与可の竹である。雲谷門下の山水である。下つて大雅堂

の景色である。蕪村の人物である。泰西の画家に至っては、多く眼を具象世界に馳せて、神往の氣韻に傾倒せぬ者が大多数を占めているから、この種の筆墨に物外の神韻を伝え得るものはたして幾人あるか知らぬ。

惜しい事に雪舟、蕪村らの力めて描出した一種の氣韻は、あまりに單純でかつあまりに変化に乏しい。筆力の点から云えばとうていこれらの大家に及ぶ訳はないが、今わが画に見ようと思う心持ちはもう少し複雑である。複雑であるだけにどうも一枚のなかへは感じが収まりかねる。頰杖をやめて、両腕を机の上に組んで考えたがやはり出て来ない。色、形、調子が出来て、自分の心が、ああここにいたなと、たちまち自己を認識するようになかなければならない。生き別れをした吾子を尋ね当てるため、六十余州を回国して、寝ても寤めても、忘れる間がなかったある日、十字街頭にふと邂逅して、稻妻の遮るひまもなきうちに、あつ、ここにいた、と思うようになかなければならない。それがむずかしい。この調子さえ出れば、人が見て何と云つても構わない。画でないと罵られても恨はない。いやしくも色の配合がこの心持ちの一部を代表して、線の曲直がこの気合の幾分を表現して、全体の配置がこの風韻のどれほどかを伝えるならば、形にあらわれたものは、牛であれ馬であれ、ないしは牛でも馬でも、何でもないのであれ、厭われない。厭われないがどうも出来ない。写生帖を机の上へ置いて、両眼が帖のなかへ落ち込むまで、工夫したが、とても物にならん。

鉛筆を置いて考えた。こんな抽象的な興趣を画にしようとするのが、そもその間違である。人間にそう変りはない

から、多くの人のうちにはきつと自分と同じ感興に触れたものがあつて、この感興を何らの手段かで、永久化せんと試みに相違ない。試みたとすればその手段は何だろう。

たちまち音楽の二字がぴかりと眼に映った。なるほど音楽はかかる時、かかる必要に逼られて生まれた自然の声であらう。楽は聴くべきもの、習うべきものであると、始めて気がついたが、不幸にして、その辺の消息はまるで不案内である。

次に詩にはなるまいかと、第三の領分に踏み込んで見る。レッシングと云う男は、時間の経過を条件として起る出来事を、詩の本領であるごとく論じて、詩画は不一にして両様なりとの根本義を立てたように記憶するが、そう詩を見ると、今余の発表しようとあせている境界もとうてい物になりそうにない。余が嬉しいと感ずる心裏の状況には時間はあるかも知れないが、時間の流れに沿うて、遁次に展開すべき出来事の内容がない。一が去り、二が来り、二が消えて三が生まらるるがために嬉しいのではない。初から窈然として同所に把住する趣きで嬉しいのである。すでに同所に把住する以上は、よしこれを普通の言語に翻訳したところで、必ずしも時間的に材料を安排する必要はあるまい。やはり絵画と同じく空間的に景物を配置したのみで出来るだろう。ただいかなる景情を詩中に持ち来つて、この曠然として倚托なき有様を写すかが問題で、すでにこれを捕え得た以上はレッシングの説に従わんでも詩として成功する訳だ。ホーマーがどうしても、ヴァージルがどうしても構わない。もし詩が一種のムードをあらわすに適しているとすれば、このムードは時間の制限を受けて、順次に進捗する出来事の助けを藉らずとも、單純に空間的な

る絵画上の要件を充たしさえすれば、言語をもつて描き得るものと思う。

議論はどうでもよい。ラオコーンなどは大概忘れていたのだから、よく調べたら、こつちが怪しくなるかも知れない。とにかく、画にしそくなつたから、一つ詩にして見よう、と写生帖の上へ、鉛筆を押しつけて、前後に身をゆすぶって見た。しばらくは、筆の先の尖がつた所を、どうにか運動させたいばかりで、毫も運動させる訳に行かなかつた。急に朋友の名を失念して、咽喉まで出かかつているのに、出てくれないような気がする。そこで諦めると、出損なつた名は、ついに腹の底へ収まつてしまふ。

葛湯を練るとき、最初のうちは、さらさらして、箸に手応がないものだ。そこを辛抱すると、ようやく粘着が出て、攪き滑ぜる手が少し重くなる。それでも構わず、箸を休ませずに廻すと、今度は廻し切れなくなる。しまいには鍋の中の葛が、求めぬに、先方から、争つて箸に附着してくる。詩を作るのはまさにこれだ。

手掛りのない鉛筆が少しずつ動くようになるのに勢を得て、かれこれ二三十分したら、

青春二三月。愁随芳草長。閑花落空庭。素琴横虚堂。蟪蛄掛不動。篆煙繞竹梁。

と云う六句だけ出来た。読み返して見ると、みな画になりそうな句ばかりである。これなら始めから、画にすればよかったと思う。なぜ画よりも詩の方が作り易かつたかと思う。ここまで出たら、あとは大した苦もなく出そうだ。しかし画に出来ない情を、次には咏つて見たい。あれか、これかと思ひ煩

つた末とうとう、

独坐無隻語。方寸認微光。人間徒多事。此境孰可忘。会得一日静。正知百年忙。遐懷寄何処。緬邈白雲鄉。

と出来た。もう一返最初から読み直して見ると、ちよつと面白く読まれるが、どうも、自分が今しがた入った神境を写したものとすると、索然として物足りない。ついでだから、もう一首作つて見ようかと、鉛筆を握つたまま、何の気もなしに、入口の方を見ると、襖を引いて、開け放つた幅三尺の空間をちらりと、奇麗な影が通つた。はてな。

余が眼を転じて、入口を見たときは、奇麗なものが、すでに引き開けた襖の影に半分かくれかけていた。しかもその姿は余が見ぬ前から、動いていたものらしく、はつと思う間に通り越した。余は詩をすてて入口を見守る。

一分と立たぬ間に、影は反対の方から、逆にあらわれて来た。振袖姿のすらりとした女が、音もせず、向う二階の椽側を寂然として歩行て行く。余は覺えず鉛筆を落して、鼻から吸いかけた息をびたりと留めた。

花曇りの空が、刻一刻に天から、ずり落ちて、今や降ると待たれたる夕暮の欄干に、しとやかに行き、しとやかに帰る振袖の影は、余が座敷から六間の中庭を隔てて、重き空氣のなかに蕭寥と見えつ、隠れつする。

女はもとより口も聞かぬ。傍目も触らぬ。椽に引く裾の音さえおのが耳に入らぬくらい静かに歩行している。腰から下にぱつと色づく、裾模様は何を染め抜いたものか、遠くて解からぬ。ただ無地と模様のつながる中が、おのずから暈されて、夜と昼との境のごとき心地である。女はもとより夜と昼

との境をあるいている。

この長い振袖を着て、長い廊下を何度行き何度戻る気か、余には解からぬ。いつ頃からこの不思議な装をして、この不思議な歩行をつづけつつあるかも、余には解らぬ。その主意に至ってはもとより解らぬ。もとより解るべきはずならぬ事を、かくまでも端正に、かくまでも静肅に、かくまでも度を重ねて繰り返す人の姿の、入口にあらわれては消え、消えてはあらわるる時の余の感じは一種異様である。逝く春の恨を訴うる所作ならば何が故にかくは無頓着なる。無頓着なる所作ならば何が故にかくは綺羅を飾れる。

暮れんとする春の色の、嬋媛として、しばらくは冥邈の戸口をまぼろしに彩どる中に、眼も醒むるほどの帯地は金欄か。あざやかなる織物は往きつ、戻りつ蒼然たる夕べのなかにつまれて、幽闇のあなた、遼遠のかしこへ一分ごとに消えて去る。燦めき渡る春の星の、暁近くに、紫深き空の底に陥いる趣である。

太玄の闇おのずから開けて、この華やかなる姿を、幽冥の府に吸い込まんとするとき、余はこう感じた。金屏を背に、銀燭を前に、春の宵の一刻を千金と、さざめき暮らしてこそしかるべきこの装の、厭う景色もなく、争う様子も見えず、色相世界から薄れて行くのは、ある点において超自然の情景である。刻々と逼る黒き影を、すかして見ると女は肅然として、焦きもせず、狼狽もせず、同じほどの歩調をもって、同じ所を徘徊しているらしい。身に落ちかかる災を知らぬとすれば無邪気の極である。知って、災と思わぬならば物凄。黒い所が本来の住居で、しばらくの幻影を、元のままなる冥漠の裏に

収めればこそ、かように間靨の態度で、有と無の間に逍遙しているのだらう。女のつけた振袖に、紛たる模様の尽きて、是非もなき磨墨に流れ込むあたりに、おのが身の素性をほめかしている。

またこう感じた。うつくしき人が、うつくしき眠りについて、その眠りから、さめる暇もなく、幻覚のままで、この世の呼吸を引き取るときに、枕元に病を護るわれらの心はさぞつらいだらう。四苦八苦を百苦に重ねて死ぬならば、生甲斐のない本人はもとより、傍に見ている親しい人も殺すが慈悲と諦められるかも知れない。しかしすやすやと寝入る児に死ぬべき何の科があるう。眠りながら冥府に連れて行かれるのは、死ぬ覚悟をせぬうちに、だまし打ちに惜しき一命を果すと同様である。どうせ殺すものなら、とても逃れぬ定業と得心もさせ、断念もして、念仏を唱えたい。死ぬべき条件が具わらぬ先に、死ぬる事実のみが、ありありと、確かめらるるときに、南無阿弥陀仏と回向をする声が出るくらいなら、その声でおういおういと、半ばあの世へ足を踏み込んだものを、無理にも呼び返したくなる。仮りの眠りから、いつの間とも心づかぬうちに、永い眠りに移る本人には、呼び返される方が、切れかかった煩惱の綱をむやみに引かるようで苦しいかも知れぬ。慈悲だから、呼んでくれるな、穏かに寝かしてくれと思うかも知れぬ。それでも、われわれは呼び返したくなる。余は今度女の姿が入口にあらわれたなら、呼びかけて、うつつの裡から救ってやろうかと思った。しかし夢のように、三尺の幅を、すうと抜ける影を見るや否や、何だか口が聴けなくなる。今度はと心を定めているうちに、すうと苦もなく

通つてしまふ。なぜ何とも云えぬかと考うる途端に、女はまた通る。こちらに窺う人があつて、その人が自分のためにどれほどやきもき思っているか、微塵も氣に掛からぬ有様で通る。面倒にも氣の毒にも、初手から、余のごときものに、氣をかねておらぬ有様で通る。今度は今度はと思つてゐるうちに、こらえかねた、雲の層が、持ち切れぬ雨の糸を、しめやかに落し出して、女の影を、蕭々と封じ了る。

七

寒い。手拭を下げて、湯壺へ下る。

三畳へ着物を脱いで、段々を、四つ下りると、八畳ほどの風呂場へ出る。石に不自由せぬ国と見えて、下は御影で敷き詰めた、真中を四尺ばかりの深さに掘り抜いて、豆腐屋ほどの湯槽を据える。槽とは云うもののやはり石で畳んである。鉱泉と名のつく以上は、色々な成分を含んでいるのだろうが、色が純透明だから、入り心地がよい。折々は口にさえふくんで見るが別段の味も臭もない。病氣にも利くそうだが、聞いて見ぬから、どんな病に利くのか知らぬ。もとより別段の持病もないから、実用上の価値はかつて頭のなかに浮んだ事がない。ただ這入る度に考え出すのは、白楽天の温泉水。滑洗凝脂と云う句だけである。温泉と云う名を聞けば必ずこの句にあらわれたような愉快的氣持になる。またこの氣持を出し得ぬ温泉は、温泉として全く価値がないと思つてゐる。この理想以外に温泉についての注文はまるでない。

すぼりと浸かると、乳のあたりまで這入る。湯はどこから湧いて出るか知らぬが、常でも槽の縁を奇麗に越している。春の石は乾くひまなく濡れて、あたたかに、踏む足の、心は穏やかに嬉しい。降る雨は、夜の目を掠めて、ひそかに春を潤おすほどのしめやかさであるが、軒のしずくは、ようやく繁く、ぽたり、ぽたりと耳に聞える。立て籠められた湯氣は、床

から天井を隈なく埋めて、隙間さえあれば、節穴の細きを厭わず洩れ出でんとする景色である。

秋の霧は冷やかに、たなびく霧は長閑に、夕餉炊く、人の煙は青く立って、大いなる空に、わがはかなき姿を托す。様々の憐れはあるが、春の夜の温泉の曇りばかりは、浴するものの肌を、柔らかにつつんで、古き世の男かと、われを疑わしむる。眼に写るものの見えぬほど、濃くまつわりはせぬが、薄絹を一重破れば、何の苦もなく、下界の人と、己れを見出すように、浅きものではない。一重破り、二重破り、幾重を破り尽すともこの煙りから出す事はならぬ顔に、四方よりわれ一人を、温かき虹の中に埋め去る。酒に酔うと云う言葉はあるが、煙りに酔うと云う語句を耳にした事がない。あるとすれば、霧には無論使えぬ、霞には少し強過ぎる。ただこの靄に、春宵の二字を冠したるとき、始めて妥当なるを覚える。

余は湯槽のふちに仰向の頭を支えて、透き徹る湯のなかの軽き身体を、出来るだけ抵抗力なきあたりへ漂わして見た。ふわり、ふわりと魂がくらげのように浮いている。世の中もこんな気になれば楽なものだ。分別の錠前を開けて、執着の栓張をはずす。どうともせよと、湯泉のなかで、湯泉と同一化してしまう。流れるものほど生きるに苦は入らぬ。流れるもののなかに、魂まで流していれば、基督の御弟子となったよりありがたい。なるほどこの調子で考えると、土左衛門は風流である。スウィンバーンの何とか云う詩に、女が水の底で往生して嬉しがっている感じを書いてあったと思う。余が平生から苦にしていた、ミレーのオフエリヤも、こう観察す

るとだいぶ美しくなる。何であんな不愉快な所を扱んだものかと今まで不審に思っていたが、あれはやはり画になるのだ。水に浮んだまま、あるいは水に沈んだまま、あるいは沈んだり浮んだりしたまま、ただそのままの姿で苦なしに流れる有様は美的に相違ない。それで両岸にいろいろな草花をあしらって、水の色と流れて行く人の顔の色と、衣服の色に、落ちついた調和をとったなら、きつと画になるに相違ない。しかし流れて行く人の表情が、まるで平和ではほとんど神話が比喻になつてしまふ。痙攣的な苦悶はもとより、全幅の精神をうち壊わすが、全然色気のない平気な顔では人情が写らない。どんな顔をかいたら成功するだろう。ミレーのオフエリヤは成功かも知れないが、彼の精神は余と同じところに存するか疑わしい。ミレーはミレー、余は余であるから、余は余の興味を以て、一つ風流な土左衛門をかいて見たい。しかし思うような顔はそうたやすく心に浮んで来そうもない。

湯のなかに浮いたまま、今度は土左衛門の賛を作つて見る。

雨が降ったら濡れるだろう。

霜が下りたら冷たかる。

土のしたでは暗かるう。

浮かば波の上、

沈まば波の底、

春の水なら苦はなかる。

と口のうちに小声に誦しつつ漫然と浮いていると、どこかで弾く三味線の音が聞える。美術家だのにと云われると恐縮するが、実のところ、余がこの楽器における智識はすこぶる怪しいもので二が上がるうが、三が下がるうが、耳には余り影響

を受けた試しがない。しかし、静かな春の夜に、雨さえ興を添える、山里の湯壺の中で、魂まで春の温泉に浮かしながら、遠くの三味を無責任に聞くのははなはだ嬉しい。遠いから何を唄って、何を弾いているか無論わからない。そこに何だか趣がある。音色の落ちついているところから察すると、上方の検校さんの地唄にでも聴かれそうな太棹かとも思う。

小供の時分、門前に万屋と云う酒屋があつて、そこに御倉さんと云う娘がいた。この御倉さんが、静かな春の昼過ぎになると、必ず長唄の御浚いをする。御浚が始まると、余は庭へ出る。茶畠の十坪余りを前に控えて、三本の松が、客間の東側に並んでいる。この松は周り一尺もある大きな樹で、面白い事に、三本寄つて、始めて趣のある恰好を形つくつていた。小供心にこの松を見ると好い心持になる。松の下に黒くさびた鉄灯籠が名の知れぬ赤石の上に、いつ見ても、わからず屋の頑固爺のようにかく坐っている。余はこの灯籠を見詰めるのが大好きであつた。灯籠の前後には、苔深き地を抽いて、名も知らぬ春の草が、浮世の風を知らぬ顔に、独り句うて独り楽しんでゐる。余はこの草のなかに、わずかに膝を容るるの席を見出して、じつと、しゃがむのがこの時分の癖であつた。この三本の松の下に、この灯籠を睨めて、この草の香を臭いで、そうして御倉さんの長唄を遠くから聞くのが、當時の日課であつた。

御倉さんはもう赤い手絡の時代さえ通り越して、だいぶんと世帯じみた顔を、帳場へ曝してゐるだろう。聳とは折合がいか知らん。燕は年々帰つて来て、泥を啣んだ嘴を、いそがしげに働かしているか知らん。燕と酒の香とはどうして

も想像から切り離せない。

三本の松はいまだに好い恰好で残っているかしらん。鉄灯籠はもう壊れたに相違ない。春の草は、昔し、しゃがんだ人を覚えてゐるだろうか。その時ですら、口もきかずに過ぎたものを、今に見知ろうはずがない。御倉さんの旅の衣は鈴懸のと云う、日ごとの声もよも聞き覚えがあると云うまい。三味の音が思わぬパノラマを余の眼前に展開するにつけ、余は床しい過去の面のあたりに立つて、二十年の昔に住む、頑是なき小僧と、成り済ましたとき、突然風呂場の戸がざらりと開いた。

誰か来たなど、身を浮かしたまま、視線だけを入口に注ぐ。湯槽の縁の最も入口から、隔たりたるに頭を乗せているから、槽に下る段々は、間二丈を隔てて斜めに余が眼に入る。しかし見上げた余の瞳にはまだ何物も映らぬ。しばらくは軒を遶る雨垂の音のみが聞える。三味線はいつの間にかやんでいた。やがて階段の上に何物かあらわれた。広い風呂場を照すものは、ただ一つの小さき釣り洋灯のみであるから、この隔りでは澄切った空気を控えてさえ、確と物色はむずかしい。まして立ち上がる湯気の、濃かなる雨に抑えられて、逃場を失いたる今宵の風呂に、立つを誰とはもとより定めにくい。一段を下り、二段を踏んで、ともに、照らす灯影を浴びたる時でなくては、男とも女とも声は掛けられぬ。

黒いものが一步を下へ移した。踏む石は天鷲絨のごとく柔軟と見えて、足音を証にこれを律すれば、動かぬと評しても差支ない。が輪廓は少しく浮き上がる。余は画工だけあって人体の骨格については、存外視覚が鋭敏である。何とも知れ

ぬものの一段動いた時、余は女と二人、この風呂場の中に在る事を覺った。

注意をしたものか、せぬものかと、浮きながら考える間に、女の影は遺憾なく、余が前に、早くもあらわれた。漲ぎり渡る湯煙りの、やわらかな光線を一分子ごとに含んで、薄紅の暖かに見える奥に、漾わす黒髪を雲とながして、あらん限りの背文を、すらりと伸した女の姿を見た時は、礼儀の、作法の、風紀のと云う感じはことごとく、わが脳裏を去って、ただひたすらに、うつくしい画題を見出し得たとのみ思った。

古代希臘の彫刻はいざ知らず、今世仏国の画家が命と頼む裸体画を見るたびに、あまりに露骨な肉の美を、極端まで描がき尽そうとする痕迹が、ありありと見えるので、どこことなく氣韻に乏しい心持が、今までわれを苦しめてならなかった。

しかしその折々はただごとなく下品だと評するまでで、なぜ下品であるかが、解らぬ故、吾知らず、答えを得るに煩悶して今日に至ったのだらう。肉を蔽えば、うつくしきものが隠れる。かくさねば卑しくなる。今の世の裸体画と云うはただかくさぬと云う卑しさに、技巧を留めておらぬ。衣を奪いたる姿を、そのままに写すだけにては、物足らぬと見えて、飽くまでも裸体を、衣冠の世に押し出そうとする。服をつけたるが、人間の常態なるを忘れて、赤裸にすべての権能を附与せんと試みる。十分で事足るべきを、十二分にも、十五分にも、どこまでも進んで、ひたすらに、裸体であるぞと云う感じを強く描出しようとする。技巧がこの極端に達したる時、人はその観者を強うるを陋とする。うつくしきものを、いやが上に、うつくしくせんと焦せるとき、うつくしきものはか

えってその度を減ずるが例である。人事についても満は損を招くとの諺はこれがためである。

放心と無邪気とは余裕を示す。余裕は画において、詩において、もしくは文章において、必須の条件である。今代芸術の一大弊竇は、いわゆる文明の潮流が、いたずらに芸術の土を駆って、拘々として随处に齷齪たらしむるにある。裸体画はその好例であろう。都会に芸妓と云うものがある。色を売りにて、人に媚びるを商売にしている。彼らは嫖客に対する時、わが容姿のいかに相手の瞳子に映ずるかを顧慮するのほか、何らの表情をも發揮し得ぬ。年々に見るサロンの目録はこの芸妓に似たる裸体美人を以て充滿している。彼らは一秒時も、わが裸体なるを忘るる能わざるのみならず、全身の筋肉をむずつかして、わが裸体なるを観者に示さんと力めている。

今余が面前に娉婷と現われたる姿には、一塵もこの俗埃の眼に遮ぎるものを帯びておらぬ。常の人の纏える衣装を脱ぎ捨てたる様と云えばすでに人界に墮在する。始めより着るべき服も、振るべき袖も、あるものと知らざる神代の姿を雲のなかに呼び起したるがごとく自然である。

室を埋むる湯煙は、埋めつくしたる後から、絶えず湧き上がる。春の夜の灯を半透明に崩し拡げて、部屋一面の虹霓の世界が濃かに揺れるなかに、朦朧と、黒きかとも思われるほどの髪を暈して、真白な姿が雲の底から次第に浮き上がって来る。その輪廓を見よ。

頸筋を軽く内輪に、双方から責めて、苦もなく肩の方へなだれ落ちた線が、豊かに、丸く折れて、流るる末は五本の指と分れるのであろう。ふつくらと浮く二つの乳の下には、し

ばし引く波が、また滑らかに盛り返して下腹の張りを安らかに見せる。張る勢を後ろへ抜いて、勢の尽くるあたりから、分れた肉が平衡を保つために少しく前に傾く。逆に受くる膝頭のこのたびは、立て直して、長きうねりの踵につく頃、平たき足が、すべての葛藤を、二枚の蹠に安々と始末する。世の中にこれほど錯雑した配合はない、これほど統一のある配合もない。これほど自然で、これほど柔らかで、これほど抵抗の少い、これほど苦にならぬ輪廓は決して見出せぬ。

しかもこの姿は普通の裸体のごとく露骨に、余が眼の前に突きつけられてはおらぬ。すべてのものを幽玄に化する一種の靈気のなかに髣髴として、十分の美を奥床しくもほのめかしているに過ぎぬ。片鱗を滄墨淋漓の間に点じて、虬竜の怪を、楮毫のほかに想像せしむるのごとく、芸術的に観じて申し分のない、空気と、あたたかみと、冥邈なる調子とを具えている。六々三十六鱗を丁寧に描きたる竜の、滑稽に落つるが事実ならば、赤裸々の肉を淨洒々に眺めぬうちに神往の余韻はある。余はこの輪廓の眼に落ちた時、桂の都を逃れた月界の嫦娥が、彩虹の追手に取り囲まれて、しばらく躊躇する姿と眺めた。

輪廓は次第に白く浮きあがる。今一步を踏み出せば、せつかくの嫦娥が、あわれ、俗界に墮落するよと思う刹那に、緑の髪は、波を切る靈龜の尾のごとくに風を起して、莽と靡いた。渦捲く煙りを劈いて、白い姿は階段を飛び上がる。ホホホと鋭く笑う女の声が、廊下に響いて、静かなる風呂場を次第に向へ遠退く。余はがぶりと湯を呑んだまま槽の中に突立つ。驚いた波が、胸へあたる。縁を越す湯泉の音がさあ

御茶の御馳走になる。相客は僧一人、観海寺の和尚で名は大徹と云うそうだ。俗一人、二十四五の若い男である。

老人の部屋は、余が室の廊下を右へ突き当って、左へ折れた行き留りにある。大さは六畳もある。大きな紫檀の机を真中に据えてあるから、思ったより狭苦しい。それへと云う席を見ると、布団の代りに花毯が敷いてある。無論支那製だろう。真中を六角に仕切って、妙な家と、妙な柳が織り出している。周囲は鉄色に近い藍で、四隅に唐草の模様を飾った茶の輪を染め抜いてある。支那ではこれを座敷に用いたものか疑わしいが、こうやって布団に代用して見るとすこぶる面白い。印度の更紗とか、ペルシャの壁掛とか号するものが、ちよつと間が抜けているところに価値があるごとく、この花毯もこせつかないところに趣がある。花毯ばかりではない、すべて支那の器具は皆抜けている。どうしても馬鹿で気の長い人種の発明したものとほか取れない。見ているうちに、ぼおつとするとところが尊とい。日本は巾着切りの態度で美術品を作る。西洋は大きくて細かくて、そうしてどこまでも娑婆気がとれない。まずこう考えながら席に着く。若い男は余とならんで、花毯の半を占領した。

和尚は虎の皮の上へ坐った。虎の皮の尻尾が余の膝の傍を通り越して、頭は老人の臀の下に敷かれている。老人は頭の

毛をことごとく抜いて、頬と顎へ移植したように、白い髯をむしゃむしゃと生やして、茶托へ載せた茶碗を丁寧机の上へならべる。

「今日は久し振りで、うちへ御客が見えたから、御茶を上げようと思って、……」と坊さんの方を向くと、

「いや、御使をありがとう。わしも、だいぶ御無沙汰をしたから、今日ぐらい来て見ようかと思つとつたところじゃ」と云う。この僧は六十近い、丸顔の、達磨を草書に崩したような容貌を有している。老人とは平常からの昵懇と見える。

「この方が御客さんかな」

老人は首肯ながら、朱泥の急須から、緑を含む琥珀色の玉液を、二三滴ずつ、茶碗の底へしたたらす。清い香りがかすかに鼻を襲う気分がした。

「こんな田舎に一人では御淋しかろ」と和尚はすぐ余に話しかけた。

「はああ」となんともかとも要領を得ぬ返事をする。淋しいと云えば、偽りである。淋しからずと云えば、長い説明が入る。

「なんの、和尚さん。このかたは画を書かれるために来られたのじゃから、御忙がしいくらいじゃ」

「おお左様か、それは結構だ。やはり南宗派かな」

「いいえ」と今度は答えた。西洋画だなどと云つても、この和尚にはわかるまい。

「いや、例の西洋画じゃ」と老人は、主人役に、また半分引き受けてくれる。

「ははあ、洋画か。すると、あの久一さんのやられるような

ものかな。あれは、わしこの間始めて見たが、随分奇麗にかけたのう」

「いえ、詰らんものです」と若い男がこの時ようやく口を開いた。

「御前何ぞ和尚さんに見ていただいたか」と老人が若い男に聞く。言葉から云うても、様子から云うても、どうも親類らしい。

「なあに、見ていただいたんじゃないですが、鏡が池で写生しているところを和尚さんに見つかったのです」

「ふん、そうか——さあ御茶が注いだから、一杯」と老人は茶碗を各自の前に置く。茶の量は三四滴に過ぎぬが、茶碗はすこぶる大きい。生壁色の地へ、焦げた丹と、薄い黄で、絵だか、模様だか、鬼の面の模様になりかかったところか、ちよつと見当のつかないものが、べたに描いてある。

「李兵衛です」と老人が簡単に説明した。

「これは面白い」と余も簡単に賞めた。

「李兵衛はどうも偽物が多くて、——その糸底を見て御覧なさい。銘があるから」と云う。

取り上げて、障子の方へ向けて見る。障子には植木鉢の葉蘭の影が暖かそうに写っている。首を曲げて、覗き込むと、空の字が小さく見える。銘は観賞の上において、さのみ大切のものとは思わないが、好事者はよほどこれに気がかかるそうだ。茶碗を下へ置かないで、そのまま口へつけた。濃く甘く、湯加減に出た、重い露を、舌の先へ一しずくずつ落して味って見るのは閑人適意の韻事である。普通の人は茶を飲むものと心得ているが、あれは間違だ。舌頭へぼたりと載せて、清

いものが四方へ散れば咽喉へ下るべき液はほとんどない。ただ馥郁たる匂が食道から胃のなかへ沁み渡るのみである。歯を用いるは卑しい。水はあまりに軽い。玉露に至っては濃かなる事、淡水の境を脱して、顎を疲らすほどの硬さを知らず、結構な飲料である。眠られぬと訴うるものあらば、眠られぬも、茶を用いよと勧めたい。

老人はいつの間にやら、青玉の菓子皿を出した。大きな塊を、かくまで薄く、かくまで規則正しく、削りぬいた匠人の手際は驚ろくべきものと思う。すかして見ると春の日影は一面に射し込んで、射し込んだまま、逃がれ出ずる路を失ったような感じである。中には何も盛らぬがいい。

「御客さんが、青磁を賞められたから、今日はちとばかり見せようと思うて、出して置きました」

「どの青磁を——うん、あの菓子鉢かな。あれは、わしも好じゃ。時にあなた、西洋画では襖などはかけんものかな。かけるなら一つ頼みたいがな」

かいてくれなら、かかぬ事もないが、この和尚の気に入るか入らぬかわからない。せつかく骨を折って、西洋画は駄目だなどと云われては、骨の折柴がない。

「襖には向かないでしょう」

「向かんかな。そうさな、この間の久一さんの画のようじゃ、少し派手過ぎるかも知れん」

「私のは駄目です。あれはまるでいたずらです」と若い男はしきりに、恥かしがって謙遜する。

「その何とか云う池はどこにあるんですか」と余は若い男に念のため尋ねて置く。

「ちよつと観海寺の裏の谷の所で、幽邃な所です。——なあに学校にいる時分、習ったから、退屈まぎれに、やって見ただけです」

「観海寺と云うと……」

「観海寺と云うと、わしのいる所じゃ。いい所じゃ、海を一目に見下しての——まあ逗留中にちよつと来て御覧。なに、ここからはつい五六丁よ。あの廊下から、そら、寺の石段が見えるじゃろうが」

「いつか御邪魔に上つてもいいですか」

「ああいいとも、いつでもいる。ここの御嬢さんも、よう、来られる。——御嬢さんと云えば今日は御那美さんが見えんようだが——どうかされたかな、隠居さん」

「どこぞへ出ましたかな、久一、御前の方へ行きはせんかな」

「いいや、見えません」

「また独り散歩かな、ハハハハ。御那美さんはなかなか足が強い。この間法用で礪並まで行つたら、姿見橋の所で——どうも、善く似ると思つたら、御那美さんよ。尻を端折つて、草履を穿いて、和尚さん、何をぐずぐず、どこへ行きなさると、いきなり、驚ろかされたて、ハハハハ。御前はそんな形姿で地体どこへ、行つたのぞいと聴くと、今芹摘みに行つた戻りじゃ、和尚さん少しやろうかと云うて、いきなりわしの袂へ泥だらけの芹を押し込んで、ハハハハハ」

「どうも、……」と老人は苦笑いをしたが、急に立って「実はこれを御覧に入れるつもりで」と話をまた道具の方へそらした。

老人が紫檀の書架から、恭しく取り下した紋緞子の古い

袋は、何だか重そうなものである。

「和尚さん、あなたには、御目に懸けた事があつたかな」

「なんじゃ、一体」

「硯よ」

「へえ、どんな硯かい」

「山陽の愛蔵したと云う……」

「いいえ、そりやまだ見ん」

「春水の替え蓋がついて……」

「そりや、まだのようだ。どれどれ」

老人は大事そうに緞子の袋の口を解くと、小豆色の四角な石が、ちらりと角を見せる。

「いい色合じやのう。端溪かい」

「端溪で鴈鵠眼が九つある」

「九つ？」と和尚大に感じた様子である。

「これが春水の替え蓋」と老人は綸子で張つた薄い蓋を見せる。上に春水の字で七言絶句が書いてある。

「なるほど。春水はようかく。ようかくが、書は杏坪の方が上手じゃて」

「やはり杏坪の方がいいかな」

「山陽が一番まずいようだ。どうも才子肌で俗気があつて、いっこう面白うない」

「ハハハハ。和尚さんは、山陽が嫌いだから、今日は山陽の幅を懸け替えて置いた」

「ほんに」と和尚さんは後ろを振り向く。床は平床を鏡のようにふき込んで、鏤氣を吹いた古銅瓶には、木蘭を二尺の高さに、活けてある。軸は底光りのある古錦欄に、装幀の工夫

を籠めた物徂徠の大幅である。絹地ではないが、多少の時代がついているから、字の巧拙に論なく、紙の色が周囲のきれ地とよく調和して見える。あの錦欄も織りたては、あれほどのゆかしさも無かつたらうに、彩色が褪せて、金糸が沈んで、華麗なところが滅り込んで、渋いところがせり出して、あんないい調子になったのだと思う。焦茶の砂壁に、白い象牙の軸が際立って、両方に突張っている、手前に例の木蘭がふわりと浮き出されているほかは、床全体の趣は落ちつき過ぎてむしろ陰気である。

「徂徠かな」と和尚が、首を向けたまま云う。

「徂徠もあり、御好きでないかも知れんが、山陽よりは善からうと思うて」

「それは徂徠の方が遥かにいい。享保頃の学者の字はまずくても、どこぞに品がある」

「広沢をして日本の能書ならしめば、われはすなわち漢人の拙なるものと云うたのは、徂徠だったかな、和尚さん」

「わしは知らん。そう威張るほどの字でもないで、ワハハハハ」

「時に和尚さんは、誰を習われたのかな」

「わしか。禅坊主は本も読まず、手習もせんから、のう」

「しかし、誰ぞ習われたらう」

「若い時に高泉の字を、少し稽古した事がある。それぎりじや。それでも人に頼まれればいつでも、書きます。ワハハハハ」

時にその端溪を一つ御見せ」と和尚が催促する。

とうとう緞子の袋を取り除ける。一座の視線はことごとく硯の上に落ちる。厚さはほとんど二寸に近いから、通例のも

の倍はあろう。四寸に六寸の幅も長さもまず並と云ってよろしい。蓋には、鱗のかたに研ぎをかけた松の皮をそのまま用いて、上には朱漆で、わからぬ書体が二字ばかり書いてある。

「この蓋が」と老人が云う。「この蓋が、ただの蓋ではないので、御覧の通り、松の皮には相違ないが……」

老人の眼は余の方を見ている。しかし松の皮の蓋にいろいろな因縁があろうと、画工として余はあまり感服は出来んから、

「松の蓋は少し俗ですな」

と云った。老人はまあと云わぬばかりに手を挙げて、

「ただ松の蓋と云うばかりでは、俗でもあるが、これはその何ですよ。山陽が広島におった時に庭に生えていた松の皮を剥いで山陽が手ずから製したのですよ」

なるほど山陽は俗な男だと思ったから、

「どうせ、自分で作るなら、もっと不器用に作れそうなものですな。わざとこの鱗のかたなどをびかびか研ぎ出さなくつても、よさそうに思われますが」と遠慮のないところを云って退けた。

「ワハハハハ。そうよ、この蓋はあまり安っぽいようだな」と和尚はたちまち余に賛成した。

若い男は気の毒そうに、老人の顔を見る。老人は少々不機嫌の体に蓋を払いのけた。下からいよいよ硯が正体をあらわす。

もしこの硯について人の眼を峙つべき特異の点があるとすれば、その表面にあらわれたる匠人の刻である。真中に袂時計ほどな丸い肉が、縁とすれすれの高さに彫り残されて、これ

を蜘蛛の背に象どる。中央から四方に向って、八本の足が彎曲して走ると見れば、先には各鴈眼を抱えている。残る一個は背の真中に、黄な汁をしたたらしたとく煮染んで見える。背と足と縁を残して余る部分はほとんど一寸余の深さに掘り下げてある。墨を湛える所は、よもやこの塹壕の底ではあるまい。たとい一合の水を注ぐともこの深さを充たすには足らぬ。思うに水盂の中から、一滴の水を銀杓にて、蜘蛛の背に落したるを、貴き墨に磨り去るのだろう。それでなければ、名は硯でも、その実は純然たる文房用の裝飾品に過ぎぬ。

老人は涎の出そうな口をして云う。

「この肌合と、この眼を見て下さい」

なるほど見れば見るほどいい色だ。寒く潤沢を帯びたる肌の上に、はっと、一息懸けたなら、直ちに凝って、一朵の雲を起すだろうと思われる。ことに驚くべきは眼の色である。眼の色と云わんより、眼と地の相交わる所が、次第に色を取り替えて、いつ取り替えたか、ほとんど吾眼の欺かれたるを見出し得ぬ事である。形容して見ると紫色の蒸羊羹の奥に、隠元豆を、透いて見えるほどの深さに嵌め込んだようなものである。眼と云えば一個二個でも大変に珍重される。九個と云ったら、ほとんど類はあるまい。しかもその九個が整然と同距離に安排されて、あたかも人造のねりものと見違えらるるに至ってはもとより天下の逸品をもって許さざるを得ない。「なるほど結構です。観て心持がいいばかりじゃありません。こうして触っても愉快です」と云いながら、余は隣りの若い男に硯を渡した。

「久」に、そんなものが解るかい」と老人が笑いながら聞いて見る。久一君は、少々自棄の気味で、

「分りやしません」と打ち遣ったように云い放ったが、わからん硯を、自分の前へ置いて、眺めていては、もったいないと気がついたものか、また取り上げて、余に返した。余はもう一遍丁寧に撫で廻わした後、とうとうこれを恭しく禅師に返却した。禅師はとくと掌の上で見済ました末、それでは飽き足らぬと考えたと見えて、鼠木綿の着物の袖を容赦なく蜘蛛の背へこすりつけて、光沢の出た所をしきりに賞翫している。「隠居さん、どうもこの色が実に善い。使った事があるかの」

「いいや、滅多には使いたう、ないから、まだ買ったなりじや」

「そうじゃろ。こないなのは支那でも珍らしきうな、隠居さん」

「左様」

「わしも一つ欲しいものじゃ。何なら久一さんに頼もうか。どうか、買って来ておくれかな」

「へへへ。硯を見つけないうちに、死んでしまいです」

「本当に硯どころではないな。時にいつ御立ちか」

「二三日うちに立ちます」

「隠居さん。吉田まで送って御やり」

「普段なら、年は取つとるし、まあ見合すところじゃが、これによると、もう逢えんかも、知れんから、送ってやろうと思うております」

「御伯父さんは送ってくれんでもいいです」

若い男はこの老人の甥と見える。なるほどどこか似ている。

「なあに、送って貰うがいい。川船で行けば訳はない。なあ隠居さん」

「はい、山越では難義だが、廻り路でも船なら……」

若い男は今度は別に辞退もしない。ただ黙っている。

「支那の方へおいでですか」と余はちよつと聞いて見た。

「ええ」

ええの二字では少し物足らなかつたが、その上掘って聞く必要もないから控えた。障子を見ると、蘭の影が少し位置を変えている。

「なあに、あなた。やはり今度の戦争で——これがもと志願兵をやつたものだから、それで召集されたので」

老人は当人に代つて、満洲の野に日ならず出征すべきこの青年の運命を余に語げた。この夢のような詩のような春の里に、啼くは鳥、落つるは花、湧くは温泉のみと思ひ詰めていたのは間違である。現実世界は山を越え、海を越えて、平家の後裔のみ住み古るしたる孤村にまで逼る。朔北の曠野を染むる血潮の何万分の一かは、この青年の動脈から迸る時が来るかも知れない。この青年の腰に吊る長き剣の先から煙りとなつて吹くかも知れない。しかしてその青年は、夢みる事よりほかに、何らの価値を、人生に認め得ざる一画工の隣りに坐っている。耳をそばだつれば彼が胸に打つ心臓の鼓動さえ聞き得るほど近くに坐っている。その鼓動のうちには、百里の平野を捲く高き潮が今すでに響いているかも知れぬ。運命は卒然としてこの二人を一堂のうちに会したるのみにて、その他には何事をも語らぬ。

九

「御勉強ですか」と女が云う。部屋に帰つた余は、三脚几に縛りつけた、書物の一冊を抽いて読んでいた。

「御這入りなさい。ちつとも構いません」

女は遠慮する景色もなく、つかつかと這入る。くすんだ半襟の中から、恰好のいい頸の色が、あざやかに、抽き出ている。女が余の前に坐つた時、この頸とこの半襟の対照が第一番に眼についた。

「西洋の本ですか、むずかしい事が書いてあるでしょうね」

「なあに」

「じゃ何が書いてあるんです」

「そうですね。実はわたしにも、よく分らないんです」

「ホホホホ。それで御勉強なの」

「勉強じゃありません。ただ机の上へ、こう開けて、開いた所をいい加減に読んでるんです」

「それで面白いんですか」

「それが面白いんです」

「なぜ？」

「なぜって、小説なんか、そうして読む方が面白いです」

「よっぽど變つていらつしやるのね」

「ええ、ちつと變つてます」

「初から読んじゃ、どうして悪るいでしょう」

「初から読まなけりやならないとすると、しまいまで読まなけりやならない訳になりましょう」

「妙な理窟だ事。しまいまで読んだっていいじゃありませんか」

「無論わるくは、ありませんよ。筋を読む気なら、わたしだって、そうします」

「筋を読まなけりや何を読むんです。筋のほかになにか読むものがありますか」

余は、やはり女だなどと思った。多少試験してやる気になる。「あなたは小説が好きですか」

「私が？」と句を切った女は、あとから「そうですねえ」と判然しない返事をした。あまり好きでもなさそうだ。

「好きだか、嫌だか自分にも解らないんじゃないですか」

「小説なんか読んだって、読まなかったって……」

と眼中にはまるで小説の存在を認めていない。

「それじゃ、初から読んだって、しまいから読んだって、いい加減な所をいい加減に読んだって、いい訳じゃありませんか。あなたのようにそう不思議がらないでもいいでしょう」

「だって、あなたと私とは違いますもの」

「どこが？」と余は女の眼の中を見詰めた。試験をするのはここだと思ったが、女の眸は少しも動かない。

「ホホホ解りませんか」

「しかし若いうちは随分御読みなすったろう」余は一本道で押し合うのをやめにして、ちよつと裏へ廻った。

「今でも若いつもりですよ。可哀想に」放した鷹はまたそれかかる。すこしも油断がならん。

「そんな事が男の前で云えれば、もう年寄のうちですよ」と、やっと引き戻した。

「そう云うあなたも随分の御年じゃあ、ありませんか。そんなに年をとつても、やっぱり、惚れたの、腫れたの、にきびが出来たのってえ事が面白いんですか」

「ええ、面白いんです、死ぬまで面白いんです」

「おやそう。それだから画工なんぞになれるんですね」

「全くです。画工だから、小説なんか初からしまいまで読む必要はないんです。けれども、どこを読んでも面白いのです。

あなたと話をするのも面白い。ここへ逗留しているうちは毎日話をしたいくらいです。何ならあなたに惚れ込んでもいい。

そうなるとなお面白い。しかしいくら惚れてもあなたと夫婦になる必要はないんです。惚れて夫婦になる必要があるうちは、小説を初からしまいまで読む必要があるんです」

「すると不人情な惚れ方をするのが画工なんですね」

「不人情じゃありません。非人情な惚れ方をするんです。小説も非人情で読むから、筋なんかどうでもいいんです。こうして、御籤を引くように、ぱつと開けて、開いた所を、漫然と読んでるのが面白いんです」

「なるほど面白そうね。じゃ、今あなたが読んでいらっしゃる所を、少し話してちょうだい。どんな面白い事が出てくるか伺いたいから」

「話しちゃ駄目です。画だって話にしちゃ一文の価値もなくなるじゃありませんか」

「ホホホそれじゃ読んで下さい」

「英語ですか」

「いいえ日本語で」

「英語を日本語で読むのはつらいな」

「いいじゃありませんか、非人情で」

これも一興いっきやうだろうと思つたから、余は女の乞こいに応じて、例の書物をぽつりぽつりと日本語で読み出した。もし世界に非人情な読み方があるとすればまさにこれである。聴く女ももとより非人情で聴いている。

「情けの風が女から吹く。声から、眼から、肌はだから吹く。男に扶たすけられて舳ともに行く女は、夕暮のヴェニスを眺ながむるためか、扶くる男はわが脈みやくに稲妻いなずまの血を走らすためか。——非人情だから、いい加減ですよ。ところどころ脱けるかも知れません」

「よござんすとも。御都合次第で、御足おたしなすつても構いません」

「女は男とならんで舳ふなばたに倚よる。二人の隔へだたりは、風に吹かるるリボンの幅よりも狭い。女は男と共にヴェニスに去らばと云う。ヴェニスなるドウジの殿楼でんろうは今第二の日没のごとく、薄赤く消えて行く。……」

「ドージとは何です」

「何だつて構やしません。昔むかしヴェニスを支配した人間の名ですよ。何代つづいたものですかね。その御殿が今でもヴェニスに残つてゐるんです」

「それでその男と女と云うのは誰の事なんでしょう」

「誰だか、わたしにも分らないんだ。それだから面白いのですよ。今までの関係なんかどうでもいいですあ。ただあなたとわたしの様に、こういっしょにいるところなんで、その場限りで面白味があるでしょう」

「そんなものですかね。何だか船の中のようなですね」

「船でも岡でも、かいてある通りでいいんです。なぜと聞き出すと探偵たんていになつてしまふです」

「ホホホホじゃ聴きますまい」

「普通の小説はみんな探偵が発明したものですよ。非人情なところがないから、ちつとも趣おもむきがない」

「じゃ非人情の続きを伺いましょう。それから？」

「ヴェニスは沈みつつ、沈みつつ、ただ空に引く一抹いちまつの淡き線となる。線は切れる。切れて点となる。蛋白石とんぼだまの空のなかに円まるき柱が、ここ、かしこと立つ。ついには最も高く聳そびえた鐘楼しめうろうが沈む。沈んだと女が云う。ヴェニスを去る女の心は空行く風のごとく自由である。されど隠れたるヴェニスは、再び帰らねばならぬ女の心に羈きせつ縋つの苦しみを与う。男と女は暗き湾かたの方に眼を注ぐ。星は次第に増す。柔らかに揺ゆらぐ海は泡あわを濺そそがず。男は女の手を把とる。鳴りやまぬ弦ゆづるを握つた心地である。……」

「あんまり非人情でもないようですね」

「なにこれが非人情的に聞けるのですよ。しかし厭いやなら少々略しましょうか」

「なに私は大丈夫ですよ」

「わたしは、あなたよりなお大丈夫です。——それからと、ええと、少しく六むずかしくなつて来たな。どうも訳し——いや読みにくい」

「読みにくければ、御略おりやくしなさい」

「ええ、いい加減にやりましょう。——この一夜ひとよと女が云う。一夜？ と男がきく。一と限るはつれなし、幾夜いくよを重ねてこ

そと云う」

「女が云うんですか、男が云うんですか」

「男が云うんですよ。何でも女がヴェニスへ帰りたいくないのでしょう。それで男が慰める語なんです。——真夜中の甲板に帆綱を枕にして横わりたる、男の記憶には、かの瞬時、熱き一滴の血に似たる瞬時、女の手を確と把りたる瞬時が大濤のごとくに揺れる。男は黒き夜を見上げながら、強いられた結婚の淵より、是非に女を救い出さんと思い定めた。かく思い定めて男は眼を閉ずる。——」

「女は？」

「女は路に迷いながら、いずこに迷えるかを知らぬ様である。攫われて空行く人のごとく、ただ不可思議の千万無量——あとがちよつと読みにくいですよ。どうも句にならない。——ただ不可思議の千万無量——何か動詞はないでしょうか」

「動詞なんぞいるのですか、それで沢山です」

「え？」

轟と音がして山の樹がごとごとく鳴る。思わず顔を見合わす途端に、机の上の一輪挿に活けた、椿がふらふらと揺れる。

「地震！」と小声で叫んだ女は、膝を崩して余の机に寄りかかる。御互の身軀がすれすれに動く。キキーと鋭どい羽搏をして一羽の雉子が藪の中から飛び出す。

「雉子が」と余は窓の外を見て云う。

「どこに」と女は崩した、からだを擦寄せる。余の顔と女の顔が触れぬばかりに近づく。細い鼻の穴から出る女の呼吸が余の髭にさわった。

「非人情ですよ」と女はたちまち坐住居を正しながら屹と云

う。

「無論」と言下に余は答えた。

岩の凹みに湛えた春の水が、驚ろいて、のたりのたりと鈍く揺れている。地盤の響きに、満泓の波が底から動くのだから、表面が不規則に曲線を描くのみで、砕けた部分はどこにもない。円満に動くと言う語があるとすれば、こんな場合に用いられるのだろう。落ちついて影を蘸していた山桜が、水と共に、延びたり縮んだり、曲がったり、くねったりする。しかしどう変化してもやはり明らかに桜の姿を保っているところが非常に面白い。

「こいつは愉快だ。奇麗で、変化があつて。こう云う風に動かなくっちゃ面白くない」

「人間もそう云う風にさえ動いていれば、いくら動いても大丈夫ですね」

「非人情でなくっちゃ、こうは動けませんよ」

「ホホホホ大変非人情が御好きだこと」

「あなた、だって嫌な方じゃありますまい。昨日の振袖なんか……」と言いかけると、

「何か御褒美をちょうだい」と女は急に甘えるように云った。

「なぜです」

「見たいとおっしゃったから、わざわざ、見せて上げたんじゃないありませんか」

「わたしがですか」

「山越をなさった画の先生が、茶店の婆さんにわざわざ御頼みになったそうで御座います」

余は何と答えてよいやらちよつと挨拶が出なかった。女は

すかさず、

「そんな忘れっぽい人に、いくら実をつくしても駄目ですわねえ」と嘲けるごとく、恨むがごとく、また真向から切りつけるがごとく二の矢をついだ。だんだん旗色がわるくなるが、どこで盛り返したもののか、いったん機先を制せられると、なかなか隙を見出しにくい。

「じゃ昨夕の風呂場も、全く御親切からなんです」と際どいところでようやく立て直す。

女は黙っている。

「どうも済みません。御礼に何を上げましょう」と出来るだけ先へ出て置く。いくら出ても何の利目もなかった。女は何喰わぬ顔で大徹和尚の額を眺めている。やがて、

「竹影払 階塵不動」

と口のうちに静かに読み了って、また余の方へ向き直ったが、急に思い出したように、

「何ですって」

と、わざと大きな声で聞いた。その手は喰わない。

「その坊主にさっき逢いましたよ」と地震に揺れた池の水のように円満な動き方をして見せる。

「観海寺の和尚ですか。肥ってるでしょう」

「西洋画で唐紙をかいてくれて、云いましたよ。禅坊さんなんてものは随分訳のわからない事を云いますね」

「それだから、あんなに肥れるんでしょう」

「それから、もう一人若い人に逢いましたよ。……」

「久」でしよう」

「ええ久一君です」

「よく御存じです事」

「なに久一君だけ知ってるんです。そのほかには何にも知りやしません。口を聞くのが嫌な人ですね」

「なに、遠慮しているんです。まだ小供ですから……」

「小供って、あなたと同じくらいじゃありませんか」

「ホホホそうですか。あれは私しの従弟ですが、今度戦地へ行くので、暇乞に來たのです」

「ここに留って、いるんですか」

「いいえ、兄の家におります」

「じゃ、わざわざ御茶を飲みに來た訳ですね」

「御茶より御白湯の方が好なんです。父がよせばいいのに、呼ぶものですから。麻痺が切れて困ったでしょう。私がおれば中途から帰してやっただんですが……」

「あなたはどこへいらしたんです。和尚が聞いていましたぜ、また一人散歩かって」

「ええ鏡の池の方を廻って來ました」

「その鏡の池へ、わたしも行きたいんだが……」

「行って御覧なさい」

「画にかくに好い所ですか」

「身を投げるに好い所です」

「身はまだなかなか投げないつもりです」

「私は近々投げるかも知れませんが」

余りに女としては思い切った冗談だから、余はふと顔を上げた。女は存外たしかである。

「私が身を投げて浮いているところを——苦しんで浮いているところじゃないんです——やすやすと往生して浮いていると

ころを——綺麗な画にかいて下さい」

「え？」

「驚ろいた、驚ろいた、驚ろいたでしょう」

女はすらりと立ち上る。三步にして尽くる部屋の入口を出るとき、顧みてにこりと笑った。茫然たる事多時。

十

鏡が池へ来て見る。観海寺の裏道の、杉の間から谷へ降りて、向うの山へ登らぬうちに、路は二股に岐れて、おのずから鏡が池の周囲となる。池の縁には熊笹が多い。ある所は、左右から生い重なって、ほとんど音を立てずには通れない。木の間から見ると、池の水は見えるが、どこで始まって、どこで終るか一応廻った上でないと見当がつかぬ。あるいて見ると存外小さい。三丁ほどよりあるまい。ただ非常に不規則な形ちで、ところどころに岩が自然のまま水際に横わっている。縁の高さも、池の形の名状しがたいように、波を打って、色々な起伏を不規則に連ねている。

池をめぐりては雑木が多い。何百本あるか勘定がし切れぬ。中には、まだ春の芽を吹いておらんのがある。割合に枝の繁まない所は、依然として、うららかな春の日を受けて、萌え出でた下草さえある。壺堇の淡き影が、ちらりちらりとその間に見える。

日本の堇は眠っている感じである。「天来の奇想のように」と形容した西人の句はとうていあてはまるまい。こう思う途端に余の足はとまった。足がとまれば、厭になるまでそこにいる。いられるのは、幸福な人である。東京でそんな事をすれば、すぐ電車に引き殺される。電車が殺さなければ巡査が追いついて立てる。都会は太平の民を乞食と間違えて、掏摸の親分た

る探偵に高い月俸を払う所である。

余は草を茵に太平の尻をそろりと卸した。ここならば、五六日こうしたなり動かないでも、誰も苦情を持ち出す氣遣はない。自然のありがたいところはここにある。いざとなると容赦も未練もない代りには、人に因って取り扱をかけるような軽薄な態度はすこしも見せない。岩崎や三井を眼中に置かぬものは、いくらでもいる。冷然として古今帝王の權威を風馬牛し得るものは自然のみであらう。自然の徳は高く塵界を超越して、対絶の平等觀を無辺際に樹立している。天下の羣小を麾いで、いたずらにタイモンの憤りを招くよりは、蘭を九畹に滋き、蕙を百畦に樹えて、独りその裏に起臥する方が遙かに得策である。余は公平と云い無私と云う。さほど大事なものならば、日に千人の小賊を戮して、満圃の草花を彼らの屍に培養うがよからう。

何だか考が理に落ちていつこうつまらなくなつた。こんな中学程度の觀想を練りにわざわざ、鏡が池まで来はせぬ。袂から煙草を出して、寸燐をシュツと擦る。手応はあつたが火は見えない。敷島のさきに付けて吸ってみると、鼻から煙が出た。なるほど、吸つたんだなとようやく氣がついた。寸燐は短かい草のなかで、しばらく雨竜のような細い煙りを吐いて、すぐ寂滅した。席をずらせてだんだん水際まで出て見る。余が茵は天然に池のなかに、ながれ込んで、足を浸せば生温い水につくかも知れぬと云う間際で、とまる。水を覗いて見る。

眼の届く所はさまで深そうにもない。底には細長い水草が、往生して沈んでいる。余は往生と云うよりほかに形容すべき

言葉を知らぬ。岡の薄なら靡く事を知っている。藻の草ならば誘う波の情けを待つ。百年待っても動きそうもない、水の底に沈められたこの水草は、動くべきすべての姿勢を調べて、朝な夕なに、弄らるる期を、待ち暮らし、待ち明かし、幾代の思を茎の先に籠めながら、今に至るまでついに動き得ずに、また死に切れずに、生きているらしい。

余は立ち上がって、草の中から、手頃の石を二つ拾って来る。功德になると思つたから、眼の先へ、一つ抛り込んでやる。ぶくぶくと泡が二つ浮いて、すぐ消えた。すぐ消えた、すぐ消えた、余は心のうちで繰り返す。すかして見ると、三茎ほどの長い髪が、慵に揺れかかっている。見つかつてはと云わぬばかりに、濁った水が底の方から隠しに来る。南無阿弥陀仏。

今度は思い切つて、懸命に真中へなげる。ぽかんと幽かに音がした。静かなるものは決して取り合わない。もう抛げる氣も無くなつた。絵の具箱と帽子を置いたまま右手へ廻る。二間余りを爪先上がりに登る。頭の上には大きな樹ががぶさつて、身体が急に寒くなる。向う岸の暗い所に椿が咲いている。椿の葉は緑が深すぎて、昼見ても、日向で見ても、軽快な感じはない。ことにこの椿は岩角を、奥へ二三間遠退いて、花がなければ、何があるか氣のつかない所に森閑として、かたまっている。その花が！一日勘定しても無論勘定し切れぬほど多い。しかし眼がつけば是非勘定したくなるほど鮮かである。ただ鮮かと云うばかりで、いっこう陽気な感じがなない。ぱつと燃え立つようで、思わず、氣を奪られた、後は何だか凄くなる。あれほど人を欺す花はない。余は深山椿を

見るたびにいつでも妖女の姿を連想する。黒い眼で人を釣り寄せて、しらぬ間に、嫣然たる毒を血管に吹く。欺かれたと悟った頃はすでに遅い。向う側の椿が眼に入った時、余は、ええ、見なければよかったと思った。あの花の色はただの赤ではない。眼を醒すほどの派出やかさの奥に、言うに言われぬ沈んだ調子を持っている。悄然として萎れる雨中の梨花には、ただ憐れな感じがする。冷やかに艶なる月下の海棠には、ただ愛らしい気持ちがある。椿の沈んでいるのは全く違う。黒ずんだ、毒気のある、恐ろし味を帯びた調子である。この調子を底に持って、上部はどこまでも派出に装っている。しかも人に媚ぶる態もなければ、ことさらに人を招く様子も見えぬ。ぱつと咲き、ぱたりと落ち、ぱたりと落ち、ぱつと咲いて、幾百年の星霜を、人目にかからぬ山陰に落ちつき払って暮らしている。ただ一眼見たが最後！ 見た人は彼女の魔力から金輪際、免るる事は出来ない。あの色はただの赤ではない。屠られたる囚人の血が、自ずから人の眼を惹いて、自から人の心を不快にすることく一種異様な赤である。

見ていると、ぱたり赤い奴が水の上に落ちた。静かな春に動いたものはただこの一輪である。しばらくするとまたぱたり落ちた。あの花は決して散らない。崩れるよりも、かたまったまま枝を離れる。枝を離れるときは一度に離れるから、未練のないように見えるが、落ちてもかたまってるところは、何となく毒々しい。またぱたり落ちる。ああやって落ちているうちに、池の水が赤くなるだろうと考えた。花が静かに浮いている辺は今でも少々赤いような気がする。また落ちた。地の上へ落ちたのか、水の上へ落ちたのか、区別がつか

ぬくらしい静かに浮く。また落ちる。あれが沈む事があるだろうかと思う。年々落ち尽す幾万輪の椿は、水につかって、色が溶け出して、腐って泥になって、ようやく底に沈むのかしらん。幾千年の後にはこの古池が、人の知らぬ間に、落ちた椿のために、埋もれて、元の平地に戻るかも知れぬ。また一つ大きいのが血を塗った、人魂のように落ちる。また落ちる。ぱたりぱたりと落ちる。際限なく落ちる。

こんな所へ美しい女の浮いているところをかいたら、どうだろうと思ひながら、元の所へ帰って、また煙草を呑んで、ぼんやり考え込む。温泉場の御那美さんが昨日冗談に云った言葉が、うねりを打って、記憶のうちに寄せてくる。心は大浪にのる一枚の板子のように揺れる。あの顔を種にして、あの椿の下に浮かせて、上から椿を幾輪も落とす。椿が長えに落ちて、女が長えに水に浮いている感じをあらわしたいが、それが画でかけるだろうか。かのラオコーンには——ラオコーンなどはどうでも構わない。原理に背いても、背かなくつても、そう云う心持ちさえ出ればいい。しかし人間を離れないで人間以上の永久と云う感じを出すのは容易な事ではない。第一顔に困る。あの顔を借りるにしても、あの表情では駄目だ。苦痛が勝ってはすべてを打ち壊わしてしまう。と云ってむやみに気楽ではなお困る。一層ほかの顔にしては、どうだろう。あれか、これかと指を折って見るが、どうも思ひくない。やはり御那美さんの顔が一番似合うようだ。しかし何だか物足りない。物足らないとまでは気がつくが、どこが物足らないかが、吾ながら不明である。したがって自己の想像でいい加減に作り易える訳に行かない。あれに嫉妬を加えたら、

どうだろう。嫉妬では不安の感が多過ぎる。憎悪はどうだろう。憎悪は烈げし過ぎる。怒？ 怒では全然調和を破る。恨？ 恨でも春恨とか云う、詩的のものならば格別、ただの恨では余り俗である。いろいろに考えた末、しまいによくこれだと気がついた。多くある情緒のうちで、憐れと云う字のあるのを忘れていた。憐れは神の知らぬ情で、しかも神にもっとも近き人間の情である。御那美さんの表情のうちにはこの憐れの念が少しもあらわれておらぬ。そこが物足らぬのである。ある咄嗟の衝動で、この情があゝの女の眉宇にひらめいた瞬時に、わが画は成就するであろう。しかし——いつそれが見られるか解らない。あゝの女の顔に普段充滿しているものは、人を馬鹿にする微笑と、勝とう、勝とうと焦る八の字のみである。あれだけでは、とても物にならない。

がさがりがざりと足音がする。胸裏の図案は三分二で崩れた。見ると、筒袖を着た男が、背へ薪を載せて、熊笹のなかを觀海寺の方へわたつてくる。隣りの山からおりて来たのだらう。「よい御天気で」と手拭をとって挨拶する。腰を屈める途端に、三尺帯に落した鉈の刃がぴかりと光った。四十恰好の逞しい男である。どこかで見たようだ。男は旧知のように馴々しい。

「旦那も画を御描きなさるか」余の絵の具箱は開けてあった。「ああ。この池でも画こうと思って来て見たが、淋しい所だね。誰も通らない」

「はあい。まことに山の中で……旦那あ、峠で御降られなさって、さぞ御困りでござんしたろ」

「え？ うん御前はあの時の馬子さんだね」

「はあい。こうやって薪を切つては城下へ持つて出ます」と源兵衛は荷を卸して、その上へ腰をかける。煙草入を出す。古いものだ。紙だか革だか分らない。余は寸燐を借してやる。

「あんな所を毎日越すなあ大変だね」

「なあに、馴れていきますから——それに毎日越しません。三日に一返、ことによると四日目くらいになります」

「四日に一返でも御免だ」

「アハハハハ。馬が不憫ですから四日目くらいにして置きます」

「そりゃあ、どうも。自分より馬の方が大事なんだね。ハハハハ」

「それほどでもないんで……」

「時にこの池はよほど古いもんだね。全体いつ頃からあるんだい」

「昔からありますよ」

「昔から？ どのくらい昔から？」

「なんでもよっぽど古い昔から」

「よっぽど古い昔しからか。なるほど」

「なんでも昔し、志保田の嬢様が、身を投げた時分からありますよ」

「志保田って、あの温泉場のかい」

「はあい」

「御嬢さんが身を投げたって、現に達者でいるじゃないか」

「いんにえ。あの嬢さまじゃない。ずっと昔の嬢様が」

「ずっと昔の嬢様。いつ頃かね、それは」

「なんでも、よほど昔しの嬢様で……」

「その昔の嬢様が、どうしてまた身を投げたんだい」

「その嬢様は、やはり今の嬢様のように美しい嬢様であった
そうながな、旦那様」

「うん」

「すると、ある日、一人の梵論字が来て……」

「梵論字と云うと虚無僧の事かい」

「はい。あの尺八を吹く梵論字の事でござんす。その梵論
字が志保田の庄屋へ逗留しているうちに、その美くしい嬢様
が、その梵論字を見染めて——因果と申しますか、どうして
もいっしょになりたいと云うて、泣きました」

「泣きました。ふうん」

「ところが庄屋どのが、聞き入れません。梵論字は聾にはな
らんと云うて。とうとう追い出しました」

「その虚無僧をかい」

「はい。そこで嬢様が、梵論字のあとを追うてここまで来
て、——あの向うに見える松の所から、身を投げて、——と
うとう、えらい騒ぎになりました。その時何でも一枚の鏡を
持っていたとか申し伝えておりますよ。それでこの池を今で
も鏡が池と申しまする」

「へええ。じゃ、もう身を投げたものがあるんだね」

「まことに怪しからん事でござんす」

「何代くらい前の事かい。それは」

「なんでもよっぽど昔の事でござんすそうな。それから——
これはここ限りの話だが、旦那さん」

「何だい」

「あの志保田の家には、代々気狂が出来ます」

「へええ」

「全く祟りでござんす。今の嬢様も、近頃は少し変だ云うて、
皆が嘸します」

「ハハハハそんな事はなからう」

「ござんせんかな。しかしあの御袋様がやはり少し変でな」

「うちにいるのかい」

「いいえ、去年亡くなりました」

「ふん」と余は煙草の吸殻から細い煙の立つのを見て、口を
閉じた。源兵衛は薪を背にして去る。

画をかきに来て、こんな事を考えたり、こんな話しを聴く
ばかりでは、何日かかっても一枚も出来つこない。せっかく
絵の具箱まで持ち出した以上、今日は義理にも下絵をとって
行こう。幸、向側の景色は、あれなりで略纏まっている。
あすこでも申し訳にちよつと描こう。

一丈余りの蒼黒い岩が、真直に池の底から突き出して、濃
き水の折れ曲る角に、嵯々と構える右側には、例の熊笹が断崖
の上から水際まで、一寸の隙間なく叢生している。上には三抱
ほどの大きな松が、若薦にからまれた幹を、斜めに振って、
半分以上水の面へ乗り出している。鏡を懐にした女は、あ
の岩の上からでも飛んだものだろう。

三脚几に尻を据えて、画面に入るべき材料を見渡す。松と、
笹と、岩と水であるが、さて水はどこでとめてよいか分らぬ。
岩の高さが一丈あれば、影も一丈ある。熊笹は、水際でとま
らずに、水の中まで茂り込んでいるかと怪まるくらい、鮮
やかに水底まで写っている。松に至っては空に聳ゆる高さが、
見上げらるるだけ、影もまたすこぶる細長い。眼に写っただ

けの寸法ではとうてい収りがつかない。一層の事、実物をやめて影だけ描くのも一興だろう。水をかいて、水の中の影をかいて、そうして、これが画だと人に見せたら驚ろくだろう。

しかしただ驚ろかせるだけではつまらない。なるほど画になつていると驚かせなければつまらない。どう工夫をしたものだろうと、一心に池の面を見詰める。

奇体なもので、影だけ眺めていてはいっこう画にならん。

実物と見比べて工夫がして見たくなる。余は水面から眸を転じて、そりそり上の方へ視線を移して行く。一丈の巖を、影の先から、水際の継目まで眺めて、継目から次第に水の上に出る。潤沢の気合から、皺皺の模様を逐一吟味してだんだんと登って行く。ようやく登り詰めて、余の双眼が今危巖の頂きに達したるとき、余は蛇に睨まれた墓のごとく、はたりと画筆を取り落した。

緑りの枝を通す夕日を背に、暮れんとする晩春の蒼黒く巖頭を彩どる中に、楚然として織り出されたる女の顔は、——花下に余を驚かし、まぼろしに余を驚ろかし、振袖に余を驚かし、風呂場に余を驚かしたる女の顔である。

余が視線は、蒼白き女の顔の真中にぐさと釘付けにされたぎり動かない。女もしなやかなる体躯を伸せるだけ伸して、高い巖の上に一指も動かさずに立っている。この一刹那！

余は覚えず飛び上った。女はひらりと身をひねる。帯の間に椿の花の如く赤いものが、ちらついたと思つたら、すでに向うへ飛び下りた。夕日は樹梢を掠めて、幽かに松の幹を染むる。熊笹はいよいよ青い。

また驚かされた。

十一

山里の臈に乗じてそぞろ歩く。観海寺の石段を登りながら仰数春星一二三と云う句を得た。余は別に和尚に逢う用事もない。逢うて雑話をする気もない。偶然と宿を出でて足の向くところに任せてぶらぶらするうち、ついこの石磴の下に出た。しばらく不許葦酒入山門と云う石を撫でて立っていたが、急にうれしくなつて、登り出したのである。

トリストラム・シャンデーと云う書物のなかに、この書物ほど神の御覚召に叶うた書き方はないとある。最初の一句はともかくも自力で綴る。あとはひたすらに神を念じて、筆の動くに任せる。何をかくか自分には無論見当がつかぬ。かく者は自己であるが、かく事は神の事である。したがって責任は著者にはないそうだ。余が散歩もまたこの流儀を汲んだ、無責任の散歩である。ただ神を頼まぬだけが一層の無責任である。スターンは自分の責任を免れると同時にこれを在天の神に嫁した。引き受けてくれる神を持たぬ余はついにこれを泥溝の中に棄てた。

石段を登るにも骨を折っては登らない。骨が折れるくらいなら、すぐ引き返す。一段登って佇むとき何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。黙然として、吾影を見る。角石に遮られて三段に切れているのは妙だ。妙だからまた登る。仰いで天を望む。寝ぼけた奥から、小さ

い星がしきりに瞬きを^{まばた}する。句になると思つて、また登る。かくして、余はとうとう、上まで登り詰めた。

石段の上で思い出す。昔し鎌倉へ遊びに行つて、いわゆる五山なるものを、ぐるぐる尋ねて廻つた時、たしか円覚寺の塔頭^{たつちゆう}であつたらう、やはりこんな風に石段をのそりのそりと登つて行くと、門内から、黄な法衣^{ころも}を着た、頭の鉢^{はち}の開いた坊主が出て来た。余は上る、坊主は下る。すれ違った時、坊主が鋭い声でどこへ御出なさんと問うた。余はただ境内を拝見にと答えて、同時に足を停めたら、坊主は直ちに、何もありませんぞと言ひ捨てて、すたすた下りて行つた。あまり洒落^{しゃらく}だから、余は少しく先を越された気味で、段上に立つて、坊主を見送ると、坊主は、かの鉢の開いた頭を、振り立て振り立て、ついに姿を杉の木の間^{あいだ}に隠した。その間かつて一度も振り返つた事はない。なるほど禅僧は面白い。きびきびしているなど、のっそり山門を這入^{はい}つて、見ると、広い庫裏も本堂も、がらんとして、人影はまるでない。余はその時に心からうれしく感じた。世の中にこんな洒落^{しゃらく}な人があつて、こんな洒落に、人を取り扱つてくれたかと思うと、何となく気分が晴々^{せいせい}した。禅^{ぜん}を心得ていたからと云う訳ではない。禅のぜの字もいまだに知らぬ。ただあの鉢の開いた坊主の所作^{しよさ}が気に入つたのである。

世の中はしつこい、毒々しい、こせこせした、その上ずうずうしい、いやな奴^{やつ}で埋^{うま}つてゐる。元来何しに世の中へ面を曝^{さら}しているんだか、解^げしかねる奴さえいる。しかもそんな面に限つて大きいものだ。浮世の風にあたる面積の多いのをもつて、さも名誉のごとく心得ている。五年も十年も人の臂^{しり}に探偵^{たんてい}

をつけて、人のひる屁^への勘定^{かんじよう}をして、それが人世だと思つてゐる。そうして人の前へ出て来て、御前は屁をいくつ、ひつた、いくつ、ひつたと頼みもせぬ事を教える。前へ出て云うなら、それも参考にして、やらんでもないが、後ろの方から、御前は屁をいくつ、ひつた、いくつ、ひつたと云う。うるさいと云えばなおお云う。よせと云えばますます云う。分つたと云つても、屁をいくつ、ひつた、ひつたと云う。そうしてそれが処世の方針だと云う。方針は人々勝手である。ただひつたひつたと云わずに黙つて方針を立てるがいい。人の邪魔になる方針は差し控^{ひか}えるのが礼儀だ。邪魔にならなければ方針が立たぬと云うなら、こつちも屁をひるのもつて、こつちの方針とするばかりだ。そうなつたら日本も運の尽きだろう。

こつちやうて、美しい春の夜に、何らの方針も立てずに、あゝるいてるのは実際高尚だ。興来^{きた}れば興来るをもつて方針とする。興去れば興去るをもつて方針とする。句を得れば、得たところの方針が立つ。得なければ、得ないところに方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。これが真正の方針である。屁を勘定するのは人身攻撃の方針で、屁をひるのは正当防禦の方針で、こつちやうて観海寺の石段を登るのは随縁放曠^{ずいゑんほうかう}の方針である。

仰^{あお}数^お春^お星^{せう}一二三の句を得て、石磴^{せきと}に登りつくしたる時、臆^{おぼろ}にひかる春の海が帯のごとくに見えた。山門に入る。絶句^{ぜつく}は纏^{まと}める気にならなくなった。即座にやめにする方針を立てる。

石を盤^たんで庫裡^{くり}に通ずる一筋道の右側は、岡つつじの生垣^{いけがき}で、垣の向^{むこう}は墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い所で、幽^{かす}

かに光る。数万の藁に、数万の月が落ちたようだと見上げる。どこやらで鳩の声がしきりにする。棟の下にでも住んでいるらしい。気のせいかな、廂のあたりに白いものが、点々見える。糞かも知れぬ。

雨垂れ落ちの所に、妙な影が一行に並んでいる。木とも見えぬ、草では無論ない。感じから云うと岩佐又兵衛のかいた、鬼の念仏が、念仏をやめて、踊りを踊っている姿である。本堂の端から端まで、一行に行儀よく並んで躍っている。その影がまた本堂の端から端まで一行に行儀よく並んで躍っている。臙夜にそそのかされて、鉦も撞木も、奉加帳も打ちすてて、誘い合せるや否やこの山寺へ踊りに来たのだらう。

近寄って見ると大きな霸王樹である。高さは七八尺もあろう、糸瓜ほどな青い黄瓜を、杓子のように圧しひしゃげて、柄の方を下に、上へ上へと継ぎ合せたように見える。あの杓子がいくつ継がったら、おしまいになるのか分らない。今夜のうちにも廂を突き破って、屋根瓦の上まで出そうだ。あの杓子が出る時には、何でも不意に、どこからか出て来て、ぴしやりと飛びつくに違いない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちにだんだん大きくなるようにには思われない。杓子と杓子の連続がいかにも突飛である。こんな滑稽な樹はたとあるまい。しかも澄ましたものだ。いかなるこれ仏と問われて、庭前の柏樹子と答えた僧があるよしだが、もし同様の間に接した場合には、余は一も二もなく、月下の霸王樹と応えるであらう。

少時、晁補之と云う人の記行文を読んで、いまだに暗誦している句がある。「時に九月天高く露清く、山空しく、月明

かに、仰いで星斗を視れば皆光大、たまたま人の上にあるがごとし、窓間の竹数十竿、相摩憂して声切々やまず。竹間の梅棕森然として鬼魅の離立笑髻の状のごとし。二三子相顧み、魄動いて寝るを得ず。遅明皆去る」とまた口の内で繰り返して見て、思わず笑った。この霸王樹も時と場合によれば、余の魄を動かして、見るや否や山を追いつけたであらう。刺し手を触れて見ると、いらいらと指をさす。

石盤を行き尽くして左へ折れると庫裏へ出る。庫裏の前に大きな木蓮がある。ほとんど一と抱もある。高さは庫裏の屋根を抜いている。見上げると頭の上は枝である。枝の上も、また枝である。そうして枝の重なり合った上が月である。普通、枝がああ重なると、下から空は見えぬ。花があればなお見えぬ。木蓮の枝はいくら重なっても、枝と枝の間はほがらかに隙いている。木蓮は樹下に立つ人の眼を乱すほどの細い枝をいたずらには張らぬ。花さえ明かである。この遙かなる下から見上げても一輪の花は、はつきりと一輪に見える。その一輪がどこまで簇がって、どこまで咲いているか分らぬ。それにもかかわらず一輪はついに一輪で、一輪と一輪の間から、薄青い空が判然と望まれる。花の色は無論純白ではない。いたずらに白いのには寒過ぎる。専らに白いのには、ことさらに人の眼を奪う巧みが見える。木蓮の色はそれではない。極度の白きをわざと避けて、あたたかみのある淡黄に、奥床しくも自らを卑下している。余は石盤の上に立って、このおとなしい花が累々とどこまでも空裏に蔓る様を見上げて、しばらく茫然としていた。眼に落つるのは花ばかりである。葉は一枚もない。

木蓮の花ばかりなる空を瞻る

と云う句を得た。どこやらで、鳩がやさしく鳴き合っている。

庫裏に入る。庫裏は明け放してある。盗人はおらぬ国と見える。狗はもとより吠えぬ。

「御免」

と訪問れる。森として返事がない。

「頼む」

と案内を乞う。鳩の声がくうくうくうと聞える。

「頼みまああす」と大きな声を出す。

「おおおおお」と遙かの向で答えたものがある。人の家を訪うて、こんな返事を聞かされた事は決してない。やがて足音が廊下へ響くと、紙燭の影が、衝立の向側にさした。小坊主がひよこりとあらわれる。了念であった。

「和尚さんはおいでかい」

「おられる。何しにござった」

「温泉にいる画工が来たと、取次でおくれ」

「画工さんか。それじゃ御上り」

「断わらないでもいいのかい」

「よろしかろ」

余は下駄を脱いで上がる。

「行儀がわるい画工さんじゃな」

「なぜ」

「下駄を、よう御揃えなさい。そろここを御覧」と紙燭を差しつける。黒い柱の真中に、土間から五尺ばかりの高さを見計って、半紙を四つ切りにした上へ、何か認めてある。

「そおら。読めたる。脚下を見よ、と書いてあるが」

「なるほど」と余は自分の下駄を丁寧揃える。

和尚の室は廊下を鍵の手に曲って、本堂の横手にある。障子を恭しくあけて、恭しく敷居越しにつくばった了念が、

「あのう、志保田から、画工さんが来られました」と云う。はなはだ恐縮の体である。余はちよっとおかしくなった。

「そうか、これへ」

余は了念と入れ代る。室がすこぶる狭い。中に囲炉裏を切つて、鉄瓶が鳴る。和尚は向側に書見をしていた。

「さあこれへ」と眼鏡をはずして、書物を傍へおしやる。

「了念。りょううねえん」

「ははははい」

「座布団を上げんか」

「ははははい」と了念は遠くで、長い返事をする。

「よう、来られた。さぞ退屈だろ」

「あまり月がいいから、ぶらぶら来ました」

「いい月じゃな」と障子をあける。飛び石が二つ、松一本のほかには何も無い、平庭の向うは、すぐ懸崖と見えて、眼下に朧夜の海がたちまちに開ける。急に気が大きくなったような心持である。漁火がここ、かしこに、ちらついて、遙かの末は空に入って、星に化けるつもりだろう。

「これはいい景色。和尚さん、障子をしめているのはもったいないじゃありませんか」

「そうよ。しかし毎晩見ているからな」

「何晩見てもいいですよ、この景色は。私なら寝ずに見えます」

「ハハハハ。もっともあなたは画工だから、わしとは少し違

うて」

「和尚さんだって、うつくしいと思ってるうちは画工でさあ」
「なるほどそれもそうじゃろ。わしも達磨の画ぐらいはこれで、かくがの。そら、ここに掛けてある、この軸は先代がかれたのじゃが、なかなかようかいとる」
なるほど達磨の画が小さい床に掛っている。しかし画としてはすこぶるまずいものだ。ただ俗気がない。拙を蔽おうと力めているところが一つもない。無邪気な画だ。この先代もやはりこの画のような構わない人であつたんだろう。

「無邪気な画ですね」

「わしらのかく画はそれで沢山じゃ。氣象さえあらわれておれば……」

「上手で俗気があるのより、いいです」

「ははははまあ、そうでも、賞めて置いてもらおう。時に近頃は画工にも博士があるかの」

「画工の博士はありませんよ」

「あ、そうか。この間、何でも博士に一人逢うた」

「へええ」

「博士と云うとえらいものじゃろな」

「ええ。えらいんでしょう」

「画工にも博士がありそうなものじゃがな。なぜ無いだろう」
「そういえば、和尚さんの方にも博士がなけりやならないでしょう」

「ハハハハまあ、そんなものかな。——何とか云う人じやつたて、この間逢うた人は——どこぞに名刺があるはずだが……」

「どこで御逢いです、東京ですか」

「いやここで、東京へは、も二十年も出ん。近頃は電車とか云うものが出来たそうじゃが、ちよっと乗って見たいような気がする」

「つまらんものですよ。やかましくつて」

「そうかな。蜀犬日に吠え、呉牛月に喘ぐと云うから、わしのような田舎者は、かえって困るかも知れんてのう」

「困りやしませんがね。つまらんですよ」

「そうかな」

鉄瓶の口から煙が盛に出る。和尚は茶筆筒から茶器を取り出して、茶を注いでくれる。

「番茶を一つ御上り。志保田の隠居さんのような甘い茶じゃない」

「いえ結構です」

「あなたは、そうやって、方々あるくように見受けるがやはり画をかくためかの」

「ええ。道具だけは持つてあるきますが、画はかかないでも構わないんです」

「はあ、それじゃ遊び半分かの」

「そうですね。そう云つても善いでしょう。屁の勘定をされるのが、いやですからね」

さすがの禅僧も、この語だけは解しかねたと見える。

「屁の勘定た何かな」

「東京に永くいると屁の勘定をされますよ」

「どうして」

「ハハハハハ勘定だけならいいですが。人の屁を分析して、腎

の穴が三角だの、四角だのって余計な事をやりますよ」

「はあ、やはり衛生の方かな」

「衛生じゃありません。探偵の方です」

「探偵？　なるほど、それじゃ警察じゃの。いったい警察の、
巡査のて、何の役に立つかの。なけりやならんかいの」

「そうですね、画工には入りませんね」

「わしにも入らんがな。わしはまだ巡査の厄介になった事がない」

「そうでしょう」

「しかし、いくら警察が屁の勘定をしたてて、構わんがな。澄ましていたら。自分にわるい事がなけりや、なんぼ警察じゃて、どうもなるまいがな」

「屁くらいで、どうかされちやたまりません」

「わしが小坊主のとき、先代がよう云われた。人間は日本橋の真中に臍腑をさらけ出して、恥ずかしくないようにしなければ修業を積んだとは云われんてな。あなたもそれまで修業をしたらよかる。旅などばせんでも済むようになる」

「画工になり澄ませば、いつでもそうなれます」

「それじゃ画工になり澄したらよかる」

「屁の勘定をされちや、なり切れませんよ」

「ハハハハ。それ御覧。あの、あなたの泊っている、志保田の御那美さんも、嫁に入って帰ってきてから、どうもいろいろな事が気になってならん、ならんと云うてしまいにとうとう、わしの所へ法を問いに来たじやて。ところが近頃はだいぶ出来てきて、そら、御覧。あのような訳のわかつた女になつたじやて」

「へええ、どうもただの女じゃないと思いました」

「いやなかなか機鋒の鋭い女で——わしの所へ修業に来ていた泰安と云う若僧も、あの女のために、ふとした事から大事を窮明せんならん因縁に逢着して——今によい智識になるようじや」

静かな庭に、松の影が落ちる、遠くの海は、空の光りに応うるがごとく、応えざるがごとく、有耶無耶のうちに微かなる、耀きを放つ。漁火は明滅す。

「あの松の影を御覧」

「綺麗ですな」

「ただ綺麗な」

「ええ」

「綺麗な上に、風が吹いても苦にしない」

茶碗に余った洪茶を飲み干して、糸底を上、茶托へ伏せて、立ち上る。

「門まで送ってあげよう。りょううねええん。御客が御帰だぞよ」

送られて、庫裏を出ると、鳩がくうくうと鳴く。

「鳩ほど可愛いものはない、わしが、手をたたくと、みな飛んでくる。呼んで見よか」

月はいよいよ明るい。しんしんとして、木蓮は幾朶の雲華を空裏に擎げている。沈寥たる春夜の真中に、和尚ははたと掌を拍つ。声は風中に死して一羽の鳩も下りぬ。

「下りんかいな。下りそうなものじやが」

了念は余の顔を見て、ちよつと笑った。和尚は鳩の眼が夜でも見えると思うているらしい。気楽なものだ。

山門の所で、余は二人に別れる。見返えると、大きな丸い影と、小さな丸い影が、石盤の上に落ちて、前後して庫裏の方に消えて行く。

十二

基督は最高度に芸術家の態度を具足したるものなりとは、オスカー・ワイルドの説と記憶している。基督は知らず。観海寺の和尚のごときは、まさしくこの資格を有していると思う。趣味があると云う意味ではない。時勢に通じていると云う訳でもない。彼は画と云う名のほとんど下すべからざる達磨の幅を掛けて、ようできたなどと得意である。彼は画工に博士があるものと心得ている。彼は鳩の眼を夜でも利くものと思っている。それにも関わらず、芸術家の資格があると云う。彼の心は底のない囊のように行き抜けである。何にも停滞しておらん。随处に動き去り、任意に作し去って、些の塵滓の腹部に沈澱する景色がない。もし彼の脳裏に一点の趣味を貼し得たならば、彼は之く所に同化して、行尿走尿の際にも、完全たる芸術家として存在し得るだろう。余のごときは、探偵に屁の数を勘定される間は、とうてい画家にはなれない。画架に向う事は出来る。小手板を握る事は出来る。しかし画工にはなれない。こうやって、名も知らぬ山里へ来て、暮れんとする春、色のなかに五尺の瘦軀を埋めつくして、始めて、真の芸術家たるべき態度に吾身を置き得るのである。一たびこの境界に入れば美の天下はわが有に帰する。尺素を染めず、寸縑を塗らざるも、われは第一流の大画工である。技において、ミケルアンゼロに及ばず、巧みなる事ラフハエルに譲る

事ありとも、芸術家たるの人格において、古今の大家と歩武を齊^{ひとし}ゆうして、毫^{ごう}も遜^{ゆず}るところを見出し得ない。余はこの温泉場へ来てから、まだ一枚の画もかかない。絵の具箱は酔興^{すいきよう}に、担^{かつ}いできたかの感さえある。人はあれでも画家かと嗤^{わら}うかもしれない。いくら嗤^{わら}われても、今の余は真の画家である。立派な画家である。こう云う境を得たものが、名画をかくとは限らん。しかし名画をかき得る人は必ずこの境を知らねばならん。

朝飯^{あさめし}をすまして、一本の敷島^{しきしま}をゆたかに吹かしたときの余の観想は以上のごとくである。日は霞を離れて高く上っている。障子^{しょうじ}をあけて、後ろの山を眺^{なが}めたら、蒼い樹が非常にすき通って、例になく鮮やかに見えた。

余は常に空気と、物象と、彩色の關係を宇宙でもっとも興味ある研究の一と考えている。色を主にして空気を出すか、物を主にして、空気をかくか。または空気を主にしてそのうちに色と物とを織り出すか。画は少しの気合一つでいろいろな調子が出る。この調子は画家自身の嗜好^{しこう}で異なってくる。それは無論であるが、時と場所とで、自ずから制限されるのもまた当前^{とうぜん}である。英国人のかいた山水^{さんすい}に明るいものは一つもない。明るい画が嫌^{きら}いなのかも知れぬが、よし好きであつても、あの空気では、どうする事も出来ない。同じ英人でもグーダルなどは色の調子がまるで違う。違うはずである。彼は英人でありながら、かつて英国の景色をかいた事がない。彼の画題は彼の郷土にはない。彼の本国に比すると、空気の透明の度の非常に勝っている、埃及または波斯^{ペルシャ}辺の光景のみを扱^{えら}んでいる。したがって彼のかいた画を、始めて見ると誰も驚

ろく。英人にもこんな明かな色を出すものがあるかと疑うくらい判然^{はつきり}出来上っている。

個人の嗜好^{しこう}はどうする事も出来ん。しかし日本の山水を描くのが主意であるならば、吾々もまた日本固有の空気と色を出さなければならん。いくら仏蘭西^{フランス}の絵がうまいと云って、その色をそのままに写して、これが日本の景色だとは云われない。やはり面のあたり自然に接して、朝な夕なに雲容煙態^{うんようえんたい}を研究したあげく、あの色こそと思ったとき、すぐ三脚^{さんきゃく}几^ぎを担^{かつ}いで飛び出さなければならん。色は刹那に移る。一たび機を失^{しう}すれば、同じ色は容易に眼には落ちぬ。余が今見上げた山の端^はには、滅多^{めった}にこの辺で見る事の出来ないほどな好い色が充ちている。せつかく来て、あれを逃^{にが}すのは惜しいものだ。ちよつと写してきよう。

襖^{ふすま}をあけて、椽側^{えんがわ}へ出ると、向う二階の障子^{しょうじ}に身を倚^もたして、那美さんが立っている。顎^{あご}を襟^{えり}のなかへ埋^{うず}めて、横顔だけしか見えぬ。余が挨拶^{あいさつ}をしようと思う途端^{とたん}に、女は、左の手を落としたまま、右の手を風のごとく動かした。閃^{ひらめ}くは稲妻^{いなずま}か、二折^{ふたお}れ三折^{みお}れ胸のあたりを、するりと走るや否^{いな}や、かちりと音がして、閃めきはすぐ消えた。女の左り手には九寸五分の白鞆^{しらたさや}がある。姿はたちまち障子の影に隠れた。余は朝っぱらから歌舞伎座^{かぶきざ}を覗^{のぞ}いた気で宿を出る。

門を出て、左へ切れると、すぐ岨道^{そばみち}つづきの、爪上^{つまあが}りになる。鶯^{うぐいす}が所々で鳴く。左り手がなだらかな谷へ落ちて、蜜柑^{みかん}が一面に植えてある。右には高からぬ岡が二つほど並んで、ここにもあるは蜜柑のみと思われる。何年前か一度この地に来了。指を折るのも面倒だ。何でも寒い師走^{しわす}の頃であった。

その時蜜柑山に蜜柑がべた生りに生る景色を始めて見た。蜜柑取りに一枝売ってくれと云ったら、幾顆でも上げますよ、持っていってとやいと答えて、樹の上で妙な節の唄をうたい出した。東京では蜜柑の皮でさえ薬種屋へ買いに行かねばならぬのと思った。夜になると、しきりに銃の音がする。何だと聞いたたら、獵師が鴨をとるんだと教えてくれた。その時は那美さんの、なの字も知らずに済んだ。

あの女を役者にしたら、立派な女形が出来る。普通の役者は、舞台へ出ると、よそ行きの芸をする。あの女は家のなかで、常住芝居をしている。しかも芝居をしているとは気がつかん。自然天然に芝居をしている。あんなのを美的生活とでも云うのだろう。あの女の御蔭で画の修業がだいぶ出来た。

あの女の所作を芝居と見なければ、薄気味がわるくて一日もいたたまれん。義理とか人情とか云う、尋常の道具立を背景にして、普通の小説家のような観察点からあの女を研究したら、刺激が強過ぎて、すごいやになる。現実世界に在って、余とあの女の間に纏綿した一種の關係が成り立つたとするならば、余の苦痛は恐らく言語に絶するだろう。余のこのたびの旅行は俗情を離れて、あくまで画工になり切るのが主意であるから、眼に入るものはことごとく画として見なければならん。能、芝居、もしくは詩中の人物としてのみ観察しなければならん。この覚悟の眼鏡から、あの女を覗いて見ると、あの女は、今まで見た女のうちでもっともうつくしい所作をする。自分でうつくしい芸をして見せると云う気がないだけに役者の所作よりもなおうつくしい。

こんな考をもつ余を、誤解してはならん。社会の公民と

して不適当などと評してはもっとも不屈きである。善は行い難い、徳は施こしにくい、節操は守り安からぬ、義のため命を捨てるのは惜しい。これらをあえてするのは何人に取っても苦痛である。その苦痛を冒すためには、苦痛に打ち勝つだけの愉快がどこかに潜んでおらねばならん。画と云うも、詩と云うも、あるは芝居と云うも、この悲酸のうちに籠る快感の別号に過ぎん。この趣きを解し得て、始めて吾人の所作は壮烈にもなる、閑雅にもなる、すべての困苦に打ち勝って、胸中の一点の無上趣味を満足せしめたくなる。肉体の苦しみを度外に置いて、物質上の不便を物とも思わず、勇猛精進の心を駆って、人道のために、鼎鑊に烹らるるを面白く思う。もし人情なる狭き立脚地に立つて、芸術の定義を下し得るとすれば、芸術は、われら教育ある士人の胸裏に潜んで、邪を避け正に就き、曲を斥け直にくみし、弱を扶け強を挫かねば、どうしても堪えられぬと云う一念の結晶して、燦として白日を射返すものである。

芝居気があると人の行為を笑う事がある。うつくしい趣味を貰かんがために、不必要なる犠牲をあえてするの人情に遠きを嗤うのである。自然にうつくしい性格を発揮するの機会を待たずして、無理矢理に自己の趣味観を銜うの愚を笑うのである。真に個中の消息を解し得たるものの嗤うはその意を得ている。趣味の何物たるをも心得ぬ下司下郎の、わが卑しき心根に比較して他を賤しむに至っては許しがたい。昔し巖頭の吟を遺して、五十丈の飛瀑を直下して急湍に赴いた青年がある。余の視るところにては、彼の青年は美の一字のために、捨つべからざる命を捨てたるものと思う。死そのものは洵

に壮烈である、ただその死を促がすの動機に至っては解したい。されども死そのものの壮烈をだに体し得ざるものが、いかにして藤村子の所作を喰い得べき。彼らは壮烈の最後を遂ぐるの情趣を味い得ざるが故に、たとい正当の事情のもとにも、とうてい壮烈の最後を遂げ得べからざる制限ある点において、藤村子よりは人格として劣等であるから、喰う権利がないものと余は主張する。

余は画工である。画工であればこそ趣味専門の男として、たとい人情世界に墮在するも、東西兩隣りの没風流漢よりも高尚である。社会の一員として優に他を教育すべき地位に立っている。詩なきもの、画なきもの、芸術のたしなみなきものよりは、美くしき所作が出来る。人情世界にあつて、美くしき所作は正である、義である、直である。正と義と直を行為の上において示すものは天下の公民の模範である。

しばらく人情界を離れたる余は、少なくともこの旅中に人情界に帰る必要はない。あつてはせつかくの旅が無駄になる。人情世界から、じやりじやりする砂をふるって、底にあまる、うつくしい金のみを眺めて暮さなければならぬ。余自らも社会の一員をもつて任じてはおらぬ。純粹なる専門画家として、己れさえ、纏綿たる利害の累索を絶つて、優に画布裏に往来している。いわんや山をや水をや他人をや。那美さんの行為動作といえどもただそのままの姿と見るよりほかに致し方がない。

三丁ほど上ると、向うに白壁の一構が見える。蜜柑のなかの住居だと思う。道は間もなく二筋に切れる。白壁を横に見て左りへ折れる時、振り返ったら、下から赤い腰巻をした

娘が上ってくる。腰巻がしだいに尽きて、下から茶色の脛が出る。脛が出切ったら、藁草履になって、その藁草履がだんだん動いて来る。頭の上に山桜が落ちかかる。背中には光る海を負っている。

岨道を登り切ると、山の出鼻の平な所へ出た。北側は翠りを置く春の峰で、今朝椽から仰いだあたりかも知れない。南側には焼野とも云うべき地勢が幅半丁ほど広がって、末は崩れた崖となる。崖の下は今過ぎた蜜柑山で、村を跨いで向を見れば、眼に入るものは言わずも知れた青海である。

路は幾筋もあるが、合うては別れ、別れては合うから、どれが本筋とも認められぬ。どれも路である代りに、どれも路でない。草のなかに、黒赤い地が、見えたり隠れたりして、どの筋につながるか見分のつかぬところに変化があつて面白い。

どこへ腰を据えたものかと、草のなかを遠近と徘徊する。椽から見たときは画になると思った景色も、いざとなると存外纏まらない。色もしだいに変わってくる。草原をのそつくうちに、いつしか描く気がなくなった。描かぬとすれば、地位は構わん、どこへでも坐った所がわが住居である。染み込んだ春の日が、深く草の根に籠って、どっかと尻を卸すと、眼に入らぬ陽炎を踏み潰したような心持ちがする。

海は足の下に光る。遮ぎる雲の一片さえ持たぬ春の日影は、普ねく水の上を照らして、いつの間にかほとぼりは波の底まで浸み渡ったと思わるるほど暖かに見える。色は一刷毛の紺青を平らに流したる所々に、しろかねの細鱗を畳んで濃やかに動いている。春の日は限り無き天が下を照らして、天が

下は限りなき水を湛^たえたる間には、白き帆が小指の爪^{つめ}ほどに見えるのみである。しかもその帆は全く動かない。往昔^{そのかみ}入貢^{ゆうこう}の高麗船^{こまふね}が遠くから渡ってくる時には、あんなに見えたであらう。そのほかは大千世界^{だいせん}を極めて、照らす日の世、照らさるる海の世のみである。

ごろりと寝^ねる。帽子^{ぼうし}が額^{ひたい}をすべって、やけに阿弥陀^{あみだ}となる。所々の草を一二尺^{しち}抽^ぬいて、木瓜^{ぼけ}の小株^{こけ}が茂^さっている。余が顔はちようどその一つの前に落ちた。木瓜^{ぼけ}は面白い花である。枝は頑固^{がんこ}で、かつて曲^{まが}った事がない。そんなら真直^{まっすぐ}かと云うと、けっして真直でもない。ただ真直な短かい枝に、真直な短かい枝が、ある角度で衝突^{しや}して、斜^{しや}に構^{かま}えつつ全体が出来上^あっている。そこへ、紅^{べに}だか白^{しろ}だか要領^{ようりやう}を得ぬ花が安閑^{あんかん}と咲く。柔^{やわら}かい葉^はさえちらちら着^きける。評^{ひやう}して見ると木瓜^{ぼけ}は花のうちで、愚^{おろ}かにして悟^{さと}ったものであらう。世間には拙^{せつ}を守る^{まも}ると云う人がある。この人が来世^{らいせ}に生れ変わるときと木瓜^{ぼけ}になる。余も木瓜^{ぼけ}になりたい。

小供のうち花の咲いた、葉のついた木瓜^{ぼけ}を切^きって、面白く枝振^{えだぶり}を作^{つく}って、筆架^{ひつか}をこしらえた事がある。それへ二銭五厘^{ずいひつ}の水筆^{すいひつ}を立てかけて、白い穂^ほが花と葉の間から、隠^{いん}見^{けん}するのを机^のへ載^のせて楽しんだ。その日は木瓜^{ぼけ}の筆架^{ひつか}ばかり気にして寝た。あくる日、眼^めが覚^さめるや否^{いな}や、飛び起きて、机の前へ行^いって見ると、花は萎^なえ葉は枯^かれて、白い穂^ほだけが元のごとく光^ひっている。あんなに奇麗^{きれい}なものが、どうして、こう一晚のうちに、枯^かれるだろうと、その時は不審^{ふしん}の念^{ねん}に堪^たえなかった。今^{いま}思うとその時分の方がよほど出^{しゅつ}世^せ間的^{てん}である。

寝^ねるや否^{いな}や眼^めについた木瓜^{ぼけ}は二十年來の旧知^{きうち}己^{おのれ}である。見

詰^つめているとしだいに氣が遠^{とほ}くなって、いい心持ちになる。また詩興^{しこう}が浮^うぶ。

寝ながら考^{かん}える。一句を得ることに写生帖^{しやうしやうてい}に記^しして行く。しばらくして出来上^{できあがり}ったようだ。始めから読み直して見る。

出門多所思^{しゅもんたしよし}。春風吹吾衣^{しゆんふうふきごい}。芳草生車轍^{ほうそうせいしやてつ}。廢道入霞微^{はいだうにろ霞み}。停筇而矚目^{ていしやうにろくもく}。万象帶晴暉^{ばんしやうたいしやうき}。聽黃鳥宛轉^{しやうきやう宛てん}。觀落英紛霏^{くわんらくえいふんひ}。行尽平蕪遠^{かうじんへいこゝろ遠}。題詩古寺扉^{だいしこくしひ}。孤愁高雲際^{こしゆかうぐんさい}。大空斷鴻歸^{たいくうだんこうき}。寸心何窈窕^{しゆんしん何やうたう}。縹緲忘是非^{へんせうわしぜい}。三十我欲老^{さんじうがよくらう}。韶光猶依々^{しやうかうしゆいゑゑ}。逍遙隨物化^{しやうしやうずいぶつゑ}。悠然對芬菲^{しゆあんたいふんひ}。

ああ出来た、出来た。これで出来た。寝ながら木瓜^{ぼけ}を觀^みて、世の中を忘れている感じがよく出た。木瓜^{ぼけ}が出来なくっても、海が出来なくっても、感じさえ出ればそれで結構である。と唸^{うな}りながら、喜^きんでいると、エヘンと云う人間の咳^{せき}払^{はら}が聞^{きこ}えた。こいつは驚^{おどろ}いた。

寝返^{ねがえ}りをして、声の響^{ひび}いた方を見ると、山の出鼻^{でびし}を回^{まわ}って、雑木^{ぞうき}の間から、一人の男^{おとこ}があらわれた。

茶^{ちや}の中折^{なかお}れを被^{かぶ}っている。中折^{なかお}れの形^{かたち}は崩^{くず}れて、傾^{かたむ}く縁^{へり}の下から眼^めが見える。眼^めの恰好^{かつこう}はわからんが、たしかにきよろきよるときよろつくようだ。藍^{あい}の縞物^{しまもの}の尻^しを端折^{はしよ}って、素足^{すあし}に下駄^{げた}がけの出^いで立^たちは、何だか鑑定^{かんてい}がつかない。野生^{やせい}の鬚^{ひげ}だけで判断^{はんぱん}するとまさに野武士^{のぶし}の価値^{かち}はある。

男^{おとこ}は岨道^{そまぢ}を下^{くだ}りるかと思^{おも}いのほか、曲^{まが}り角^{かく}からまた引き返^{かへ}した。もと来た路^{みち}へ姿^{すがた}をかくすかと思^{おも}うと、そうでもない。またあるき直^{ただ}してくる。この草原^{くさげん}を、散歩^{さんぽ}する人のほかに、こんなに行^いきつ戻^{かへ}りつするものはないはずだ。しかしあれが散歩^{さんぽ}の姿^{すがた}であらうか。またあんな男^{おとこ}がこの近辺^{きんぺん}に住^すんでいる

とも考えられない。男は時々立ち留る。首を傾ける。または四方を見廻す。大に考え込むようにもある。人を待ち合わせる風にも取られる。何だかわからない。

余はこの物騒な男から、ついに吾眼をはなす事ができなかった。別に恐しいでもない、また画にしようと言う気も出ない。ただ眼をはなす事ができなかった。右から左、左から右と、男に添うて、眼を働かせているうちに、男ははたと留った。留ると共に、またひとりの人物が、余が視界に点出された。

二人は双方で互に認識したように、しだいに双方から近づいて来る。余が視界はだんだん縮まって、原の真中で一点の狭き間に置まれてしまう。二人は春の山を背に、春の海を前に、びたりと向き合った。

男は無論例の野武士である。相手は？ 相手は女である。那美さんである。

余是那美さんの姿を見た時、すぐ今朝の短刀を連想した。もしや懐に呑んでおりはせぬかと思つたら、さすが非人情の余もただ、ひやりとした。

男女は向き合うたまま、しばらくは、同じ態度で立っている。動く景色は見えぬ。口は動かしているかも知れんが、言葉はまるで聞えぬ。男はやがて首を垂れた。女は山の方を向く。顔は余の眼に入らぬ。

山では鶯が啼く。女は鶯に耳を借して、いるとも見える。しばらくすると、男は屹と、垂れた首を挙げて、半ば踵を回らしかける。尋常の様ではない。女は颯と体を開いて、海の方へ向き直る。帯の間から頭を出しているのは懐剣らしい。

男は昂然として、行きかかる。女は二歩ばかり、男の踵を縫うて進む。女は草履ばきである。男の留ったのは、呼び留められたのか。振り向く瞬間に女の右手は帯の間へ落ちた。あぶない！

するりと抜け出たのは、九寸五分かと思いのほか、財布のような包み物である。差し出した白い手の下から、長い紐がふらふらと春風に揺れる。

片足を前に、腰から上を少しそらして、差し出した、白い手頸に、紫の包。これだけの姿勢で充分画にはなるう。

紫でちよつと切れた図面が、二三寸の間隔をとって、振り返る男の体のこなし具合で、うまい安排につながれている。不即不離とはこの刹那の有様を形容すべき言葉と思う。女は前を引く態度で、男は後えに引かれた様子だ。しかもそれが実際に引いてもひかれてもおらん。両者の縁は紫の財布の尽くる所で、ふつりと切れている。

二人の姿勢がかくのごとく美妙的な調和を保っていると同時に、両者の顔と、衣服にはあくまで、対照が認められるから、画として見ると一層の興味が深い。

背のずんぐりした、色黒の、髭づらと、くつきり締った細面に、襟の長い、撫肩の、華奢姿。ぶつきらばうに身をひねった下駄がけの野武士と、不断着の銘仙さえしなやかに着こなした上、腰から上を、おとなしく反り身に控えたる瘦形。はげた茶の帽子に、藍縞の尻切り出立ちと、陽炎さえ燃やすべき櫛目の通った鬢の色に、黒縹子のひかる奥から、ちらりと見せた帯上の、なまめかしさ。すべてが好画題である。

男は手を出して財布を受け取る。引きつ引かれつ巧みに平

均を保ちつつあった二人の位置はたちまち崩れる。女はもう引かぬ、男は引かりようともせぬ。心的状態が絵を構成する上に、かほどの影響を与えようとは、画家ながら、今まで気がつかなかった。

二人は左右へ分かれる。双方に気合がないから、もう画としては、支離滅裂である。雑木林の入口で男は一度振り返った。女は後をも見ぬ。すらすらと、こちらへ歩いてくる。やがて余の真正面まで来て、

「先生、先生」

と二声掛けた。これはしたり、いつ目付かったらう。

「何です」

と余は木瓜の上へ顔を出す。帽子は草原へ落ちた。

「何をそんな所でしていらつしやる」

「詩を作つて寝ていました」

「うそをおつしやい。今のを御覧でしょう」

「今の？ 今の、あれですか。ええ。少々拝見しました」

「ホホホホ少々でなくても、たくさん御覧なさればいいのに」

「実のところはたくさん拝見しました」

「それ御覧なさい。まあちよつと、こつちへ出ていらつしや

い。木瓜の中から出ていらつしやい」

余は唯々として木瓜の中から出て行く。

「まだ木瓜の中に御用があるんですか」

「もう無いんです。帰ろうかとも思ふんです」

「それじゃごいっしょに参りましょうか」

「ええ」

余は再び唯々として、木瓜の中に退いて、帽子を被り、絵

の道具を纏めて、那美さんといっしょにあるき出す。

「画を御描きになったの」

「やめました」

「ここへいらしつて、まだ一枚も御描きなさないじゃありませんか」

「ええ」

「でもせっかく画をかきにいらしつて、ちつとも御かきなさ

らなくっちゃ、つまりませんわね」

「なにつまってるんです」

「おやそう。なぜ？」

「なぜでも、ちゃんつまるんです。画なんぞ描いたつて、描かなくなつたつて、つまるところは同じ事ですあ」

「そりや洒落なの、ホホホ随分呑気ですなえ」

「こんな所へくるからには、呑気にでもしなくっちゃ、来た甲斐がないじゃありませんか」

「なあにどこにいても、呑気にしなくっちゃ、生きている甲斐はありませんよ。私なんぞは、今のようなところを人に見られても恥かしくも何とも思いません」

「思わんでもいいでしょう」

「そうですかね。あなたは今の男をいったい何だと御思いです」

「そうさな。どうもあまり、金持ちじゃありませんね」

「ホホホ善くあたりました。あなたは占いの名人ですよ。あの男は、貧乏して、日本にいられないからつて、私に御金を

貰いに来たのです」

「へえ、どこから来たのです」

「城下から来ました」

「随分遠方から来たもんですね。それで、どこへ行くんですか」

「何でも満洲へ行くそうです」

「何しに行くんですか」

「何しに行くんですか。御金を拾いに行くんだか、死に行くんだか、分りません」

この時余は眼をあげて、ちよと女の顔を見た。今結んだ口元には、微かなる笑の影が消えかかりつつある。意味は解せぬ。

「あれは、わたくしの亭主です」

迅雷を掩うに違あらず、女は突然として一太刀浴びせかけた。余は全く不意撃を喰った。無論そんな事を聞く気はなし、女も、よもや、ここまで曝け出そうとは考えていなかった。

「どうです、驚ろいたでしょう」と女が云う。

「ええ、少々驚ろいた」

「今の亭主じゃありません、離縁された亭主です」

「なるほど、それで……」

「それぎりです」

「そうですか。——あの蜜柑山に立派な白壁の家がありますね。ありや、いい地位にあるが、誰の家なんですか」

「あれが兄の家です。帰り路にちよと寄って、行きましよう」

「用でもあるんですか」

「ええちつと頼まれものがあります」

「いっしょに行きましょう」

岨道の登り口へ出て、村へ下りずに、すぐ、右に折れて、

また一丁ほどを登ると、門がある。門から玄関へかからずに、すぐ庭口へ廻る。女が無遠慮につかつか行くから、余も無遠慮につかつか行く。南向きの庭に、棕櫚が三四本あって、土堀の下はすぐ蜜柑畠である。

女はすぐ、椽鼻へ腰をかけて、云う。

「いい景色だ。御覧なさい」

「なるほど、いいですな」

障子のうちは、静かに人の気合もせぬ。女は音のう景色もない。ただ腰をかけて、蜜柑畠を見下して平気でいる。余は不思議に思った。元来何の用があるのかしら。

しまいには話もないから、両方共無言のまま蜜柑畠を見下している。午に逼る太陽は、ともに暖かい光線を、山一面にあびせて、眼に余る蜜柑の葉は、葉裏まで、蒸し返されて耀やいている。やがて、裏の納屋の方で、鶏が大きな声を出して、こけこっこううと鳴く。

「おやもう。御午ですね。用事を忘れていた。——久一さん、久一さん」

女は及び腰になって、立て切った障子を、からりと開ける。内は空しき十畳敷に、狩野派の双幅が空しく春の床を飾っている。

「久一さん」

納屋の方でようやく返事がする。足音が襖の向でとまって、からりと、開くが早い。白鞆の短刀が畳の上へ転がり出す。

「そら御伯父さんの餞別だよ」

帯の間に、いつ手が這入ったか、余は少しも知らなかった。短刀は二三度とんぼ返りを打って、静かな畳の上を、久一さんの足下へ走る。作りがゆる過ぎたと見えて、ぴかりと、寒いものが一寸ばかり光った。

十三

川舟で久一さんを吉田の停車場まで見送る。舟のなかに坐ったものは、送られる久一さんと、送る老人と、那美さんと、那美さんの兄さんと、荷物の世話をする源兵衛と、それから余である。余は無論御招伴に過ぎん。

御招伴でも呼ばれば行く。何の意味だか分らなくても行く。非人情の旅に思慮は入らぬ。舟は筏に縁をつけたように、底が平たい。老人を中に、余と那美さんが艫、久一さんと、兄さんが、舳に座をとった。源兵衛は荷物と共に独り離れている。

「久一さん、軍さは好きか嫌いかい」と那美さんが聞く。

「出て見なければ分らんさ。苦しい事もあるだろうが、愉快な事も出て来るんだろう」と戦争を知らぬ久一さんが云う。

「いくら苦しくっても、国家のためだから」と老人が云う。

「短刀なんぞ貰うと、ちよつと戦争に出て見たくなりやしないか」と女がまた妙な事を聞く。久一さんは、

「そうさね」

と軽く首肯う。老人は髯を掀げて笑う。兄さんは知らぬ顔をしている。

「そんな平気な事で、軍さが出来るかい」と女は、委細構わず、白い顔を久一さんの前へ突き出す。久一さんと、兄さんがちよつと眼を見合せた。

「那美さんが軍人になったらさぞ強かろう」兄さんが妹に話しかけた第一の言葉はこれである。語調から察すると、ただの冗談とも見えない。

「わたしが？ わたしが軍人？ わたしが軍人になれりやとうになつています。今頃は死んでいます。久一さん。御前も死ぬがいい。生きて帰っちゃ外聞がわるい」

「そんな乱暴な事を——まあまあ、めでたく凱旋をして帰つて来てくれ。死ぬばかりが国家のためではない。わしもまだ二三年は生きるつもりじゃ。まだ逢える」

老人の言葉の尾を長く手繰と、尻が細くなつて、末は涙の糸になる。ただ男だけにそこまではだまを出さない。久一さんは何も云わずに、横を向いて、岸の方を見た。

岸には大きな柳がある。下に小さな舟を繋いで、一人の男がしきりに垂綸を見詰めている。一行の舟が、ゆるく波足を引いて、その前を通つた時、この男はふと顔をあげて、久一さんと眼を見合せた。眼を見合せた兩人の間には何らの電気も通わぬ。男は魚の事ばかり考えている。久一さんの頭の中には一尾の鮒も宿る余地がない。一行の舟は静かに太公望の前を通り越す。

日本橋を通る人の数は、一分に何百か知らぬ。もし橋畔に立つて、行く人の心に蟠まる葛藤を一々に聞き得たならば、浮世は目眩しくて生きづらかろう。ただ知らぬ人で逢い、知らぬ人でわかれるから結句日本橋に立つて、電車の旗を振る志願者も出て来る。太公望が、久一さんの泣きそうな顔に、何らの説明をも求めなかったのは幸である。顧り見ると、安心して浮標を見詰めている。おおかた日露戦争が済むまで

見詰める気だろう。

川幅はあまり広くない。底は浅い。流れはゆるやかである。舢に倚つて、水の上を滑つて、どこまで行くか、春が尽きて、人が騒いで、鉢合せをしたがるところまで行かねばやまぬ。腥き一点の血を眉間に印したるこの青年は、余一行を容赦なく引いて行く。運命の縄はこの青年を遠き、暗き、物凄き北の国まで引くが故に、ある日、ある月、ある年の因果に、この青年と絡みつけられたる吾らは、その因果の尽くるところまでこの青年に引かれて行かねばならぬ。因果の尽くるとき、彼と吾らの間にふつと音がして、彼一人は否応なしに運命の手元まで手繰り寄せらるる。残る吾らも否応なしに残らねばならぬ。頼んでも、もがいても、引いていて貰う訳には行かぬ。

舟は面白いほどやすらかに流れる。左右の岸には土筆でも生えておりそう。土堤の上には柳が多く見える。まばらに、低い家がその間から藁屋根を出し。煤けた窓を出し。時によると白い家鴨を出す。家鴨はがあがと鳴いて川の中まで出て来る。

柳と柳の間に的礫と光るのは白桃らしい。とんかたんと機を織る音が聞える。とんかたんの絶間から女の唄が、はああい、いようう——と水の上まで響く。何を唄うのやらいつこ

う分らぬ。
「先生、わたくしの画をかい下さいな」と那美さんが注文する。久一さんは兄さんと、しきりに軍隊の話をしている。老人はいつか居眠りをはじめた。

「書いてあげましょう」と写生帖を取り出して、

春風にそら解け縷子の銘は何

と書いて見せる。女は笑いながら、

「こんな一筆がきでは、いけません。もっと私の氣象の出るように、丁寧にかいて下さい」

「わたしもかきたいのだが。どうも、あなたの顔はそれだけじゃ画にならない」

「御挨拶です事。それじゃ、どうすれば画になるんです」

「なに今でも画に出来ますがね。ただ少し足りないところがある。それが出ないところをかくと、惜しいですよ」

「足りないたって、持って生れた顔だから仕方ありませんわ」

「持って生れた顔はいろいろになるものです」

「自分の勝手にですか」

「ええ」

「女だと思つて、人をたんと馬鹿になさい」

「あなたが女だから、そんな馬鹿を云うのですよ」

「それじゃ、あなたの顔をいろいろにして見せてちょうだい」

「これほど毎日いろいろになつてればたくさんだ」

女は黙つて向をむく。川縁はいつか、水とすれすれに低く

着いて、見渡す田のものは、一面のげんげんで埋まっている。鮮

やかな紅の滴々が、いつの雨に流されてか、半分溶けた花の

海は霞のなかに果しなく広がって、見上げる半空には崢嶸た

る一峰が半腹から微かに春の雲を吐いている。

「あの山の向うを、あなたは越していらした」と女が白い

手を舐から外へ出して、夢のような春の山を指す。

「天狗岩はあの辺ですか」

「あの翠の濃い下の、紫に見える所がありましたよ」

「あの日影の所ですか」

「日影ですかしら。禿げてるんでしよう」

「なあに凹んでるんですよ。禿げていりや、もっと茶に見えます」

「そうでしょうか。ともかく、あの裏あたりになるそうです」

「そうすると、七曲りはもう少し左になりますね」

「七曲りは、向うへ、ずっと外れます。あの山のまた一つ先の山ですよ」

「なるほどそうだった。しかし見当から云うと、あのうすい雲が懸つてるあたりでしょう」

「ええ、方角はあの辺です」

居眠をしていた老人は、舳から、肘を落して、ほいと眼をさます。

「まだ着かんかな」

胸膈を前へ出して、右の肘を後ろへ張って、左り手を真直

に伸して、ううんと欠伸をするついでに、弓を彎く真似をし

て見せる。女はホホホと笑う。

「どうもこれが癖で、……」

「弓が御好と見えますね」と余も笑いながら尋ねる。

「若いうちは七分五厘まで引きました。押しは存外今でもた

しかです」と左の肩を叩いて見せる。舳では戦争談が酣で

ある。

舟はようやく町らしいなかへ這入る。腰障子に御肴と書いた

居酒屋が見える。古風な縄暖簾が見える。材木の置場が見

える。人力車の音さえ時々聞える。乙鳥がちちと腹を返して

飛ぶ。家鴨^{あひる}があがあ鳴く。一行は舟を捨てて停車場^{ステーション}に向う。

いよいよ現実世界へ引きずり出された。汽車の見える所を現実世界と云う。汽車ほど二十世紀の文明を代表するものがあるまい。何百と云う人間を同じ箱へ詰めて轟^{ごう}と通る。情け^{なさけ}容赦^{ようしゃ}はない。詰め込まれた人間は皆同程度の速力^{すみりき}で、同一の停車場へとまってそうして、同様に蒸氣^{じようき}の恩沢^{おんたく}に浴さねばならぬ。人は汽車へ乗ると云う。余は積み込まれると云う。人は汽車で行くと云う。余は運搬されると云う。汽車ほど個性を輕蔑^{けいべつ}したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を發達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏み付けようとする。一人前何坪何合かの地面を与えて、この地面のうちでは寝るとも起きるとも勝手にせよと云うのが現今の文明である。同時にこの何坪何合の周圍^{おど}に鐵柵^{てつさく}を設けて、これよりさきへは一步も出てはならぬぞと威嚇^{おど}かすのが現今の文明である。何坪何合のうちで自由を擅^{おぼ}にしたものが、この鐵柵外にも自由を擅^{おぼ}にしたくなるのは自然の勢^{いきおい}である。憐^{あわれ}むべき文明の国民は日夜にこの鐵柵に噛^かみついて咆哮^{ほうこう}している。文明は個人に自由を与えて虎^{とら}のごとく猛^{たけ}からしめたる後、これを檻^{かん}牢^{らう}の内に投げ込んで、天下の平和を維持しつつある。この平和は眞の平和ではない。動物園の虎が見物人を睨^{にら}めて、寝^ね転^{ころ}んでいると同様な平和である。檻^{おり}の鐵棒^{てつぼう}が一本でも抜けたら——世はめちやめちやになる。第二の仏蘭西^{フランス}革命はこの時に起るのである。個人の革命は今すでに日夜^{にちや}に起りつつある。北欧の偉人イブセンはこの革命の起るべき状態についてつぶさにその例証を吾人^{ごじん}に与えた。余は汽車の猛烈に、見界^{みかい}なく、すべての人を貨物同様に心得

て走る様^{さま}を見るたびに、客車のうちに閉^とじ籠^こめられたる個人と、個人の個性に寸毫^{すんごう}の注意をだに払わざるこの鉄車^{てつしゃ}とを比較して、——あぶない、あぶない。気をつけねばあぶないと思う。現代の文明はこのあぶないで鼻を衝^つかれるくらい充滿している。おさき真闇^{まつくら}に盲動^{もうどう}する汽車はあぶない標本の一つである。

停車場^{ステーション}前の茶店に腰を下ろして、蓬餅^{よもぎもち}を眺^{なが}めながら汽車論を考えた。これは写生帖^{しやうしやうてい}へかく訳にも行かず、人に話す必要もないから、だまって、餅を食いながら茶を飲む。向うの床几^{しょうぎ}には二人かけている。等しく草鞋^{わらじ}穿^はきで、一人は赤毛布^{あかげつと}、一人は千草色^{ちくさいいろ}の股引^{ももひき}の膝頭^{ひざがしら}に継布^{つぎ}をあてて、継布のあたった所を手で抑えている。

「やっぱり駄目かね」

「駄目さあ」

「牛のように胃袋が二つあると、いいなあ」

「二つあれば申し分はなえさ、一つが悪^{わる}くなりや、切つてしまえば済むから」

この田舎者^{いなかもの}は胃病と見える。彼らは満洲の野に吹く風の臭^{にお}いも知らぬ。現代文明の弊^{へい}をも見認^{みと}めぬ。革命とはいかなるものか、文字さえ聞いた事もあるまい。あるいは自己の胃袋が一つあるか二つあるかそれすら弁^わじ得^えんだらう。余は写生帖を出して、二人の姿を描^かき取った。

じゃらんじゃらんと号鈴^{ベル}が鳴る。切符^{きっぷ}はすでに買^かうてある。「さあ、行きましよ」と那美さんが立つ。

「どうれ」と老人も立つ。一行は揃^{そろ}って改札場^{かいさつば}を通り抜けて、プラットフォームへ出る。号鈴^{ベル}がしきりに鳴る。

轟と音がして、白く光る鉄路の上を、文明の長蛇が蜿蜒て来る。文明の長蛇は口から黒い煙を吐く。

「いよいよ御別かれか」と老人が云う。

「それでは御機嫌よう」と久一さんが頭を下げる。

「死んで御出で」と那美さんが再び云う。

「荷物は来たかい」と兄さんが聞く。

蛇は吾々の前でとまる。横腹の戸がいくつもあく。人が出たり、這入ったりする。久一さんは乗った。老人も兄さんも、那美さんも、余もそとに立っている。

車輪が一つ廻れば久一さんはすでに吾らが世の人ではない。遠い、遠い世界へ行ってしまう。その世界では煙硝の臭いの中で、人が働いている。そうして赤いものに滑って、むやみに転ぶ。空では大きな音がどんどんと云う。これからそう云う所へ行く久一さんは車のなかに立って無言のまま、吾々を眺めている。吾々を山の中から引き出した久一さんと、引き出された吾々の因果はここで切れる。もうすでに切れかかっている。車の戸と窓があいているだけで、御互の顔が見えるだけで、行く人と留まる人の間が六尺ばかり隔っているだけで、因果はもう切れかかっている。

車掌が、ぴしゃりぴしゃりと戸を閉てながら、こちらへ走って来る。一つ閉てるごとに、行く人と、送る人の距離はますます遠くなる。やがて久一さんの車室の戸もぴしゃりとしまった。世界はもう一つに為った。老人は思わず窓側へ寄る。青年は窓から首を出す。

「あぶない。出ますよ」と云う声の下から、未練のない鉄車の音がごつとごつとと調子を取って動き出す。窓は一つ

一つ、余等の前を通る。久一さんの顔が小さくなって、最後の三等列車が、余の前を通るとき、窓の中から、また一つ顔が出た。

茶色のはげた中折帽の下から、髯だらけな野武士が名残惜気に首を出した。そのとき、那美さんと野武士は思わず顔を見合せた。鉄車はごとりごとりと運転する。野武士の顔はすぐ消えた。那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。その茫然のうちには不思議にも今までかつて見た事のない「憐れ」が一面に浮いている。

「それだ！ それだ！ それが出れば画になりますよ」と余は那美さんの肩を叩きながら小声に云った。余が胸中の画面はこの咄嗟の際に成就したのである。